

インテグラルエコロジー教皇庁部局間協働作業グループ

ともに暮らす家を大切にする旅

『ラウダート・シ』公布から5年

インテグラルエコロジー教皇庁部局間協働作業グループ

ともに暮らす家を大切にする旅

『ラウダート・シ』公布から5年

回勅『ラウダート・シ』公布5周年を祝って

カトリック中央協議会

JOURNEYING TOWARDS CARE FOR OUR COMMON HOME

Five Years after Laudato Si'

© Copyright 2020 – Libreria Editrice Vaticana

目 次

はじめに	7
------	---

第1部 教育とエコロジカルな回心

1 総合的なエコロジーと霊的回心	21
2 人として生きるということ	27
3 とともに暮らす家の守り手、家庭と若者	31
4 幼児教育と初等教育	37
5 中等教育	43
6 大 学	47
7 生涯学習	53
8 ノンフォーマル教育と出会いの文化	61
9 カテケージス（信仰教育）	67
10 エキュメニカルな対話	73
11 宗教間対話	77
12 コミュニケーション	81

第2部 インテグラルエコロジーとインテグラルな人間の発展

1 食と栄養	89
2 水	95
3 エネルギー	101
4 生態系、森林伐採、砂漠化、土地利用	107
5 海と大洋	113
6 循環型経済	119
7 労働	125
8 金融	131
9 都市化	137
10 制度、司法、行政	141
11 健康	147
12 気候——課題、責任、好機	153
パチカン市国の取り組み	159
結 論	163

「皆がともに暮らす家を保護するという切迫した課題は、人類家族全体を一つにし、持続可能で全人的な^{インテグラル}発展を追求するという関心を含意しています。というのは、物事は変わりうると、わたしたちは知っているからです。……この回勅が、直面する課題の重要性、規模の大きさ、緊急性を認識する助けとなることを希望します」。

教皇フランシスコ『ラウダート・シ』13、15

本テキストは、教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に』が公布された2015年5月24日の聖霊降臨の祭日から5年後の同祭日、2020年5月31日に公にされる。

本書は、インテグラルエコロジーの推進と普及のために2015年に設立された、インテグラルエコロジー教皇庁部局間協働作業グループに属する諸機関によって準備されました。当作業グループは、この分野に深くかかわっている教皇庁関連の諸機関、および本テキストの準備に大きく貢献した複数の司教協議会やカトリック諸団体から成っています。

はじめに

「定められた時は迫っています」(一コリント7・29)。使徒パウロがコリントの人々にあてたこの勧告は、今日、これまでと同様、緊急なものとして響きます。

何万人をも犠牲にし、わたしたちの社会のもろもろの経済システムを危うくすることによってわたしたちのライフスタイルを変え続けているウイルス、COVID-19のパンデミックによって引き起こされた危機は、世界を震撼させてきました。保健衛生上の緊急事態や、感染拡大を防ぐために施されたもろもろの対策が招来した孤独感や隔離によって、わたしたちは皆、突然、自分たち人間がいかに脆弱かを思い知らされ、また、生きていくために本当に不可欠なものを発見あるいは再発見させられました。教皇フランシスコは、2020年3月27日にサンピエトロ広場においてなされたパンデミック終息を願う特別な祈りの式の中で、「(主なる)あなたの裁きの時ではなく、わたしたちの決断の時です。何が重要で、何が過ぎ去るものかをえり分ける時、必要なものとそうでないものを見分ける時です。主なるあなたに対しての、他者に対しての、生きる道を定め直す時です。わたしたちは、模範となる大勢の旅の仲間に目を向けることができます。不安の中にあっても、自らのいのちを差し出すことでこたえた人々です」と述べ、「この試練の時を選びの時とするよう」¹強く促しました。

わたしたちが生きる社会を決定的に変えるであろう、こうした困難の時に、わたしたちは、お互いを気遣い、利己主義に閉じこもることなく、人間のいのちを受精からその自然な最期に至るまで守り育て、すべての人に適切な医療を施し、国際的な連帯を醸成し、使い捨て文化と闘い、学習し、より公正な新しい経済的・財政的システムと一緒に構築し、そして、対話への、平和への、暴力と戦争の拒絶への献身を貫くよう呼びかけられています。わたし

1 教皇フランシスコ「パンデミック下の特別な祈りの式でのことば(2020年3月27日)」(『パンデミック後の選択』28頁)。

たちが経験している危機は、すべてのことがどのように繋がっているかをわたしたちに教えてくれる、公布から5年を経た、教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に』（*Laudato Si'* 以下LSと表記）の否定しがたい重要性を示しています。

わたしたちは、困窮する人々の苦しみに、そしてまた、ともに暮らす家の搾取に、もはや無関心ではられません。回勅はこの点を明確にしています。「わたしたちが別の道を歩むようにとの懇願の叫びを、世の中の見捨てられたすべての人とともに、姉妹である地球にも上げさせてきたのは、こうした状況です。この二百年間ほど、皆がともに暮らす家を傷つけ、また虐げてきた時代はありません。しかしわたしたちは、父なる神の道具となるよう呼ばれています。それは、わたしたちの星が、創造の時にお望みになられたものとなり、平和と美と充満へと向かう計画にかなうものとなるためです」（LS 53）。何と心躍る使命ではないですか。

このような意味で、いわゆる生態学的危機は、回心の、また、もはや先延ばしにしてはならない具体的な決断の絶好の機会となるのです。それは、地域レベルから国際レベルまで、あらゆるレベルでの学際的で実行可能な対話への召喚状であり、良心の十全な形成を目指す教育過程を必要とします。

このような生態学的危機の根底には、実は、わたしたちの社会に影響を及ぼす深刻な道徳的・文化的危機があり、それは過度に個人主義的な人間中心主義によって特徴づけられています。こうした行き過ぎた人間中心主義は、他の諸要因とともに、人間と自然との関係性を変化させ、今日すべての人に明白な諸結果をもたらすことになったのです。「わたしたちはさまざまの速さで突き進み、自分たちには力があって何でもできると思い込んできました。食欲に利益を求め、さまざまなことに忙殺され、急き立てられ混乱していました。……戦争や地球規模の不正義を前にしても目を覚まさずにきました。貧しい人の叫び声にも、無残に傷つけられた地球の声にも耳を傾けてきませんでした。病んだ世界の中で、自分たちはいつだってまともだと考え、無関心でい続けてきました」²。「わたしたちは、環境危機と社会危機という別個の

2 同（同邦訳書 27 頁）。

二つの危機にではなく、むしろ、社会的でも環境的でもある一つの複雑な危機に直面している」(LS 139) という事実を認識するようになってきました。その危機の象徴が、教皇フランシスコがその教導権をもって繰り返し糾弾する使い捨て文化です。

しかしながら、銘記しなければならないことがあります。「この危機に立ち向かうために必要とされる文化を、わたしたちはいまだ有していないということです。新しい方針を打ち出し、将来世代に被害を与えることなく、取りこぼしなく現在の必要を満たすことのできるリーダーシップが欠けているのです」(LS 53)。

こうした危機の根本原因に真摯に立ち向かうためにわたしたちが必要とするのは、すべてのものは密接に関係しているという気づきを土台とする本物の「軌道修正」と、同時にまた、自分自身との、他者との、社会との、被造界との、そして、神との関係性を刷新するよう動機づける「霊的回心」(LS 202-221 参照) です。

エコロジカルな回心は「イエス・キリストとの出会いがもたらすものを周りの世界とのかかわりの中であかし」(LS 217) することを要求します。それは、社会的あるいは政治的であるよりも、超越的であるものに根ざす歩みです。「神の作品の保護者たれ、との召命を生きることは、徳のある生活には欠かせないことであり、キリスト者としての経験にとって任意の、あるいは副次的な要素ではありません」(LS 217)。エコロジカルな回心は、キリストへの真の回心であり、わたしたちの時代の出来事を福音の光そしてイエスとの出会いの光において解釈するとき^とに生じます。

近年、さまざまな状況の中、自分のいのちを賭してまでも、ともに暮らす家を守ることを選択したキリスト者の事例が多くあります。大半の信者が、被造界の保護はキリスト者として生きるうえで必須の要求事項であると信念として共有する以前から、これをわかまえる修道者や信徒がいたのです。

「あらゆるものはつながっている」(LS 91、240) との考えは、回勅の指導原理、すなわち、長期的な展望を必要とする複合的で多次元的なリアリティー

たるインテグラルエコロジーの原理に内包されています³。インテグラルエコロジーは単に自然環境に関することなのではありません。それは、いのちをあらゆる面から理解するように招く展望であり、開発や成長についてのゆがんだ諸概念を回避しつつも、よりよい政策、評価指標、研究と開発の過程、評価基準を追求させます。というのは、つねに還元主義の危険があるからです。

インテグラルエコロジーの提案によって、教皇は一つの新たな世界の展望⁴を指し示そうとしています。たとえば、新型コロナウイルスのパンデミックや、その他の環境的、人的、社会－経済的な問題のような、大きな今日の諸課題を理解しそれらに対処するための包括的な枠組みを提供することに資する展望です。

今のわたしたちの世界は、「手段が多すぎて、重要で成長にかかわる目的を果たせずにいます」(LS 203)。手と心と頭を動員させうる崇高な理想を見だしにくい状況の中で、『ラウダート・シ』は、「物事は変わりうる」(LS 13)との確信から生まれる希望豊かな「広い視野」(LS 197参照)を提供して

3 「あらゆるものはつながっています」という言明は、聖イレネオ、アッシジの聖フランシスコ、ビンゲンの聖ヒルデガルト、聖ボナヴェントウラのような、教父や霊的教師にまで遡ることができるもので、霊的・司牧的回心のさまざまな要点を提供する聖書的、典礼的、教義的、人間学的、倫理的な基盤を有している。新約聖書によれば、すべてのものを結ぶきずなはただ一つであり、それは愛である。エコロジーは科学に訴えるものだが、その十全な意味は、キリストがご自身のいのちをもってなされたまっさきさげもの——すなわち愛徳——と、それが生み出す交わりに照らしてのみ理解しうる。信者にとってインテグラルエコロジーは、全被造界を生かすいのちの泉である洗礼において受けた召命への応答であり、ご自身をささげものとされたキリストに結ばれて自分自身をささげることを通して生きられなければなりません。

4 ギリシア語の「オイコス」と「ロゴス」とから出来ている「エコロジー」という語に刻まれているものの見方であり、わたしたちの家、わたしたちがともに暮らす家についてのホリスティックな研究や考察を指す。インテグラルエコロジーという新たな発想に基づいた実践は、エコロジーの諸次元の相互作用を土台とする一つの複雑な作業であり、「より全人的で統合的な展望」(LS 141)を取り入れるための、経済的なエコロジー（生産・分配システムの分析）と、社会・文化的なエコロジー（人間関係を支配する制度システムの、補完性と連帯の原理に立った分析）と、ヒューマン・エコロジー（人間的な尊厳の中心性）とを伴う環境デザイン（自然生態系の分析）を意味する。

くれます。

こうした挑戦にふさわしくこたえるために回勅は、「自然への思いやり、貧しい人々のための正義、社会への積極的関与、そして内的な平和」(LS 10) がどれほど分かちがたいものであるかに光を当て、「わたしたち自身の中での調和、他者との調和、自然やいのちある他の被造物との調和、そして神との調和といったさまざまなレベルで、エコロジカルな平衡を回復させ」(LS 210)、自分たち自身に、隣人に、被造物に、そして、創造主に対する、人間としての責任をわたしたち一人ひとりに気づかせてくれる対処法を提案します。

「人類と地球に影響を及ぼす諸変化の間断なき加速は、今や、生活や仕事のペースのさらなる激化——それは「急かし」と称されてもいいでしょう——と対になっています。変化は複雑なシステムの動きに属するものであるとはいえ、人間活動が展開する速度は、生物の進化の自然本性にかなうゆっくりとしたペースと対照的です。加えて、こうした急速で間断なき変化は、必ずしも、共通善や全人的で持続可能な人類の発展に方向づけられてはいません。変化はある意味で望ましいものですが、世界と、人類の大多数の生活の質に害をもたらすならば、不安の源となります」(LS 18)。

教皇のこうしたことばを注意深く省みるなら、わたしたちは新たな文明の構築を迫る火急の挑戦を特徴とする歴史的な時に生きていると自覚することになるでしょう。教皇フランシスコは、「わたしたちは、テクノロジーに制限を定めそれを方向づけるのに必要な自由を有しており、その自由を別様の進歩のために、すなわち、もっと健全で、より人間的で、より社会的で、より全人的な進歩のために役立つことができ」(LS 112) ということをはっきりと意識しています。そこで求められる対処法は、教育と文化が涵養されて受け継がれる、気づきが醸成される、政治的、科学的、経済的な責任感が形成され、また、全般的に、責任ある行為がなされる、そうした場所や空間で実施される長期的なアプローチです。

教会は、出来合いの、ましてや押しつけの解決策リストを手元にもってはいません。むしろ教会が差し出すのは、さまざまな地理的条件において幾世紀にもわたって積み上げられてきた経験、時間をかけて練り上げられてきた

内容と原則から成る社会的な教え、そして、解決策について一緒に考えるための方法——「対話」という方法——です。真の対話に必要なのは、固有のアイデンティティを保ちつつも、各人、自らの見方——それがどんなに肯定的あるいは建設的であっても——を盲目的に主張しないことです。ともに暮らす家を大切にする責任を共有するすべての人、組織や機関とで行う話し合いに参加し、相異なり相補う視座を交える必要があります。信仰や霊的伝統の豊かさ、学術研究からの要求、公正で持続可能な人類の全人的発展達成のための改革精神や具体的な努力といったものです。こうした対話をもっとも貧しい人々や周縁に追いやられた人々を含んだものとなるよう担保する特段の努力がなされなければならず、それによって、もっとも貧しい人々や周縁に追いやられた人々の観点もまた意思決定過程に組み込まれるのです⁵。対話は、単なるアイデア交換に限られてはならず、「ともに働くこと (working together)」である実生活レベルと、「ともに歩むこと (walking together)」であるシノドスレベルを含んだものです。こうした対話は、ともに暮らす家への共同の献身をもって始まる霊性の再発見と回心に至る道を告げ、切り開くための機会ともなるでしょう。

教皇フランシスコ自身、「妨害的な態度は、信仰者たちの中にさえ存在し、問題の否定から、無関心、冷ややかなあきらめ、技術的解決への盲信にまで及んで」(LS 14) いることを認めながら、『ラウダート・シ』のまさに冒頭から、「皆がともに暮らす家についての、すべての人との対話に加わり」(LS 3) たいとの望みを表しています。

わたしたちは、この惑星の未来を形づくることを目指してなされる真摯な努力や、信実で実り多い対話にとって非建設的な、誤った、時に邪悪ともいえる4つの態度——否定、無関心、あきらめ、(徹底した考察に欠け、完全に逆効果ではないとしても部分的にはリスクとなる策への) 見当違いの過信⁶——に陥らないよう注意する必要があります。

5 教皇フランシスコ使徒的勧告『愛するアマゾン (2020年2月2日)』27 参照 (*Querida Amazonia*)。

6 教皇フランシスコ「国連気候変動枠組条約第23回締約国会議 (COP23) へのメッセージ (2017年11月7日)」参照。

相互依存の世界では、一つの計画を共有する一つの世界（LS 164 参照）という見地から物事を考えざるをえなくなります。わたしたちの行為は他者から孤立してはなされえず、一人ひとりの献身が決定的です。信仰者たちは、こうした献身が、教会の存在理由である福音宣教の要求事項の一つであると受け止めるに違いありません⁷。「わたしたちは新しい普遍的な連帯を必要としています」（LS 14）。「わたしたちは一つの家族であるという自覚を深める必要があります。自分には関係がないというための、政治的、社会的な、国境もなければ障壁もありません。ですから、無関心のグローバリゼーションが入り込む余地がないのはなおさらのことです」（LS 52）。このことは、現在進行中の「新型コロナウイルス（COVID-19）の際限のない感染拡大」からも十二分に明らかです。「このパンデミックとともに立ち向かうことで、一つの家族の一員として、兄弟姉妹のきずなを強めることがわたしたちには必要なのだと皆が気づいたはずです」し、「対立を克服するための新たな取り組みを始め」⁸ するようになりました。「わたしたちは自分たちが同じ舟に乗っていることに気づきました。皆弱く、先が見えずにいても、だれもが大切に必要存在なのだ。皆とともに舟を漕ぐように求められていて、だれもが互いに慰め合わなければならないのだと……わたしたちも自力では進むことはできず、ともに力を出すことで初めて前進できるのだと知ったのです」⁹。

まさしく、インテグラルエコロジーへの献身の呼びかけには霊的な動機があり、すなわち、わたしたちを内側から突き動かす責任感に根ざすもので、総論のみの、時に口先だけの要求にただ応答するだけではありません。アブダビにおいて、教皇フランシスコは、アル＝アズハルのグランド・イマーム、アフマド・アル・タイーブ師と共同で、信仰者は「被造界と全宇宙を大切に守り、一人ひとりを、とりわけもっとも助けを必要としている貧しい人々を

7 教皇フランシスコ使徒的勸告『福音の喜び（2013年11月24日）』（*Evangelii Gaudium*）第2章および第4章参照。

8 教皇フランシスコ「お告げの祈り後のあいさつ（2020年3月29日）」（『教皇フランシスコ講話集8』79-80頁）。

9 教皇フランシスコ「パンデミック下の特別な祈りの式でのことば（2020年3月27日）」（前出邦訳、28頁）。

支えることを通して、この人類の兄弟愛」¹⁰に献身すべきであるという声明を出しました。

そうした意味で、『ラウダート・シ』の普及と詳細な研究そして社会実装が必要とされるのです。そこから、地方教会、その共同体、政治指導者、すべての善意の人にあてた、行動を促す文書に本書を仕立てることで、同回勅のいくつかの実践案の考察を行おうというアイデアが生まれたのです。

当回勅は、ともに暮らす家を大切にすることとインテグラルエコロジーを促進することとを土台としつつ、社会のあらゆる構成員の共同の献身を促す斬新な対処法を提示します。これについて、『ラウダート・シ』の中心的な教えを見分けて明示することが不可欠となります。そうしてカトリック信者（またそうでない人々）は、世俗の生活における具体的な行動のための方向づけを手にする事になり、すべてのキリスト者は、普段の行動を見直し、「被造界との健全なかかわりが、全人格に及ぶ回心の一面」（LS 218）であり、まさに教会的な回心の一面であると認識することを要求される事になります。

教皇フランシスコが回勅の中で繰り返すテーマが出発点となります。すなわち、「^{ぜいじやく}貧しい人々と地球の脆弱さとの間にある密接なかかわり、世界中のあらゆるものはつながっているという確信、テクノロジーに由来する勢力の新たなパラダイムと権力形態の批判、経済や進歩についての従来とは別の理解の方法を探ろうという呼びかけ、それぞれの被造物に固有な価値、エコロジーの人間的意味、率直で正直な討議の必要性、国際的な政策および地域的な政策が有する重大な責任、使い捨て文化、そして新たなライフスタイル」（LS 16）です。

技術的・科学的でなくむしろ教育的・司牧的・文化的な具体的貢献を心掛ける教会は、上記の繰り返されるテーマを土台として、行動路線を同定して提案する努力をしてきました。

10 教皇フランシスコ／アル＝アズハルのグランド・イマーム、アフマド・アル・タイーブ共同文書「世界平和と共生のための人類の兄弟愛（アブダビ、2019年2月4日）」（邦訳は教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん』に付録として所収。同書251頁から引用）参照。

本文書は、その大部分が新型コロナウイルス大流行によって引き起こされた危機よりも前に起草されたため、生じた新たな緊急事態に直接につながる考察や行動のための論点を含んではいません。それにもかかわらず、同回勅や教会の社会教説に含まれた教えは、未来を形づくろうとともに働くわたしたちの努力に、希望に満ち時宜を得た勢いを与えてくれます。その未来とは、わたしたちの兄弟姉妹のだれをも無視したり排除したりすることなくよき実が結ばれるよう、神からいただいたいのちを守り、神からゆだねられた被造物を耕すことにおいて、一つに結ばれているわたしたちの姿を見ることのできる未来です。

本文書を読む際の留意点

『ラウダート・シ』が、教会内部でまた教会を越えて、広く、大きな関心をもって迎え入れられる中、教皇からの励ましを受け、『ラウダート・シ』の社会実装推進を望む声から、このテキストを準備するというアイデアが生まれました。同回勅の豊かな科学的、経済的、政治的、社会的、倫理的含意を研究するために設けられた種々の学際的交流の場で交わされてきた多くの議論が、そうした関心の明らかなしるしとなっています。

『ラウダート・シ』は、諸教皇の社会回勅の一つとして、教会の社会教説に連なって、重大な今日の諸課題を取り上げるもので、わたしたちの時代を特徴づける複雑な出来事についての道徳的また司牧的な識別を通して、考察原理と判断基準と行動指針を提供するものです。ですから同回勅は、個人的にも集団的にも、信頼と希望をもって未来に向かう勇気ある決断と行動に駆り立てるガイドの役目を果たすでしょう¹¹。

教会の社会教説は、人として生きるさまざまな状況についての注意深い考察を、神の啓示と、自然法と、キリスト教神学の人間論の光のもと、自由意志を与えられた知的存在であり、自己支配、および他の被造物に対する優位性の責任ある行使とが求められる権利と義務の主体である「人格」の尊厳を

11 教皇庁正義と平和評議会『教会の社会教説綱要』7-10 参照。

土台として提示しています。こうした展望は、人間を、自身との、他者との、社会との、宇宙との、神とのかかわりから成る一つの総体として、深みから分析すること、また、つねに変化し続ける世界の中で「時のしるし」を見極めることを要求します。ですから教会の社会教説は、明らかに、よりよい世界の構築に資する教育と行動との価値ある道具となるのです。

本文書ではこの先、教会の社会教説、殊に『ラウダート・シ』の教えに照らしつつ、教会の諸組織や信者や善意の人々の行動を鼓舞するための、さまざまな実践案を提示します。

教皇が何度も注意を喚起するように、必要なことは単なる経済的・技術的アプローチではありません。インテグラルエコロジーの概念に連なる倫理的・社会的アプローチが^{かなめ}要の役割を果たすのです。「環境に悪影響を及ぼす行為を防ぐには、政治的な取り組みや法的な強制力では不十分だ、とわたしたちは考えるべきです。文化が墮落し、客観的な真理や普遍的に有効な諸原理がもはや保てなくなると、法は恣意的な強制手段あるいは回避すべき障害物としかみなされなくなるからです」(LS 123)。

こうして、一方は技術的・経済的・金融的、他方は倫理的・社会的・教育的な、二つの相関的な基本軸に沿って、社会進化を思い描くことが鍵となります。一方の軸の弱さが他方の軸にも、また社会全体にも悪影響を及ぼすでしょうから、どちらも同等に強化される必要があります。

ということで、以下、実践案を二部に分けて提示することにします。初めに(第1部)「霊的回心」と「教育」を、次に(第2部)「インテグラルエコロジーから見た十全な人間的発展の促進」を取り扱います。第1部、第2部とも12の関心領域に焦点を当て、それぞれ同じ構成とします。最初に「(主題にぴったりの)『ラウダート・シ』の引用」、続いて「(各関心領域との接続となる)導入」、(関連する教皇文書等の重要な)参考資料、という構成です。次に「(啓発的な)実践例」、「(行動指針となる)いくつかの勧め」で締めくくります。

ここで、誤解や重複を避けるため、本文書で取り扱う各論について、あらかじめ3点を確認しておきます。

1. 「あらゆるものはつながっている」という認識は、導きの糸として今回

勅を貫いています。還元主義の危険を避けるため、これらの行動指針あるいは実践案は、包括的・統合的なしかたで理解されなければなりません。ある側面だけを扱い他の側面を無視しては、提示されている諸問題の永続的な解決策には至らないでしょう。

2. こうした実践案には、すべての社会において高次の集団は、より低次の集団に対して、支援し、励まし、発展させるといふしかたで助けを提供（補完）すべきであるという、補完性の原理の光のもとで¹²適用され解釈されたものが採用されるべきです。個人、家庭、共同体、地方の自治体や経済団体、中間組織、国家、地域国際共同体、国際社会、それぞれに固有の責任について、適宜、検討していきます。こうした責任の多くは、違ったしかたではありますが、教会にも（地方教会から普遍教会まで）当てはまるものです。

3. これら実践案には、重大で不可避な教育的側面もあります。そうした側面は、とりわけ親たちにかかわるもので、（教育の場で積極的役割を果たす若い世代を含む）家族による責任ある支援を受け、高い清廉性や倫理性の原則と、同時に宗教団体や文化界やコミュニケーション界による刺激を受けた、学校や人づき合いのつながりを大切にしつつなされます。

12 『教会の社会教説綱要』185-188 参照。このようなアプローチは、教皇ピオ十一世の回勅『クアドラジェジモ・アノ（1931年5月15日）』（*Quadragesimo Anno*）においてはっきりと強調されている。「個人がその発意と努力とによって果たしうる仕事を奪って、共同体に移管することが重大な不正であるように、規模の小さい低次の集団からその果たしうる役割を奪って、より広大でより高次の集団に託することは、不正を犯すことであり、社会秩序を甚だしく損ない、乱すこととなります。あらゆる社会活動の本来の目的は、社会の構成員を助けることであって、それを減ぼしたり、吸収したりすることではありません」（伊語版 80／英語版 79）参照。

第1部

教育と

エコロジカルな回心



1

インテグラル 総合的なエコロジーと霊的回心

「そうした人々〔キリスト者〕皆に必要なものは『エコロジカルな回心』であり、それは、イエス・キリストとの出会いがもたらすものを周りの世界とのかかわりの中であかしさせます。……永続的な変化をもたらすために必要とされるエコロジカルな回心はまた、共同体の回心でもあるのです」(LS 217、219)。

導 入

回心とは何でしょうか？ それは、「わたしたちと兄弟姉妹との関係、他の生物との関係、ありとあらゆる被造物との関係、すべてのいのちの源である創造主との関係の変容として、完全なかたちで理解されなければなりません」¹³。教育と霊性を扱う『ラウダート・シ』第6章(LS 202-246)は、現代文化とポストモダン文化との典型的なジレンマについて語ります。一方で、憂慮すべき消費主義への執着が、足ることを知らない生産者と消費者に見られます。そうした人々は結局、世界を使用可能な物品の詰め合わせとみなすことで世界に振るう自らの暴力の犠牲者となるに至り、神の創造のわざを前に立ち止まり、感嘆することができなくなります¹⁴。他方では、正義や共感や連帯をもって「自分自身から出て他者へと向か」(LS 208)い、あらゆる被造物の中に神の御手のわざを認めるといふ、人間としての欲求や能力が存在し

13 教皇フランシスコ「第53回世界平和の日メッセージ“希望の道である平和——対話、和解、エコロジカルな回心”(2020年1月1日)」参照。

14 教皇フランシスコ「2019年四旬節教皇メッセージ“被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます”(2018年10月4日)」2、3参照。

ます。

このように、回心は考え方や物の見方の転換です。支配し征服しようとする意欲から、他者との出会いと被造物の恵みを受け取ることに開かれた心への、操る姿勢から、見つめて味わう姿勢への変化です。インテグラルエコロジー教育は、そこに一つ一つのいのちと全被造物界を観想し大切にすることへの手ほどきが含まれるなら、また、立ち現れるさまざまな問題の間にある深いつながりを認めるにはわたしたちの地平を拡張する必要があるということを受け入れるなら、そうした回心に貢献できます。「あらゆるものはつながっています。環境への配慮はこうして、仲間である人間への真摯な愛、そして社会問題の解決のための揺るぎない献身と結ばれる必要があります」(LS 91)。

ここから今度は、「共通の家に住むための、それぞれの多様性をもったまま互いに向き合うための、与えられ分かち合ういのちをたたえて大切にすること、生物をこれからも繁栄させ永続させることに優しい社会の条件と模範について考えるための、さらには人類家族全体の共通善を発展させるための新たな方法」¹⁵が示され、必要な「十分な意欲」(LS 211)が生み出されます。こうした回心は、キリストによって、聖霊によって、あらゆる人を聖性へと招き、あらゆる被造物をその完成へと導くかた¹⁶、父なる神との親子の関係性にその根をもっています。回心はキリスト者に「イエス・キリストとの出会いがもたらすものを周りの世界とのかかわりの中であかし」(LS 217)するよう求めます。そこには、次のような3つのしるしが見られます。

- ・「世界は愛のこもった神の贈り物であるという……認識」(LS 220)
- ・キリストにおけるすべての人の「すばらしい普遍的交わり」(LS 220 参照)
- ・資源を貯め込むあらゆるむなしき企みからわたしたちを自由にし、かえって、不可欠なものや美しいものを分かち合う喜びを教えてください。聖霊に敏感で、「節度ある成長とわずかなもので満たされること」(LS 222)

15 教皇フランシスコ「第53回世界平和の日メッセージ(2020年1月1日)」参照。

16 黙示録21・1-5、『カトリック教会のカテキズム』280参照。

参考資料

聖ヨハネ・パウロ二世「信徒霊性運動へのあいさつ（1980年4月18日）」。

同「一般謁見講話（1995年1月4日）」。

教皇庁正義と平和評議会『教会の社会教説綱要（2004年）』113、266、582。

教皇ベネディクト十六世回勅『希望による救い（2007年11月30日）』15（*Spe Salvi*）。

同「一般謁見講話——アッシジの聖フランシスコ（2010年1月27日）」（ペトロ文庫『中世の神学者』所収）。

同シノドス後の使徒的勧告『主のことば（2010年9月30日）』87（*Verbum Domini*）。

教皇フランシスコ回勅『信仰の光（2013年6月29日）』13、42（*Lumen Fidei*）。

同回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』62-100、216-221、233-245（*Laudato Si'*）。

同使徒憲章『ヴェリターティス・ガウディウム（2017年12月8日）』序文（*Veritatis Gaudium*）。

同使徒的勧告「喜びに喜べ（2018年3月19日）」25-29、40-109（*Gaudete et Exsultate*）。

同「2019年四旬節メッセージ“被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます”（2018年10月4日）」。

同「第53回世界平和の日メッセージ“希望の道である平和——対話、和解、エコロジカルな回心”（2020年1月1日）」。

実践例

生き方において、知識と個人的・社会的・環境的な経験とを一つにし、開かれた心で神の現存や被造界の美を観想させてくれる、調和あるバランスを探り求めている人は多くいます。霊的体験の、殊に、回心の具体的な事例はたくさんあります。野外での労働、被造界の実りの分かち合い、自然との直

接的な触れ合いは、福音のメッセージや修道生活の伝統と親密につながっています。

典礼上の季節の周期的な性質は、自然の季節の流れを思い起こさせるものであり、そこからの靈感で生まれた神秘的・観想的な経験に富む文学作品群は、さらなる深みある研究や回心に向けた靈感の泉となりうるものです。

典礼、祈り、観想、愛徳と実践の教えと勧めを、自然との密接なつながりの中で実践してきたカトリック諸共同体により開拓されたさまざまな方法は、注目に値し、励ましとなります。そうした意味で、観想修道会（ベネディクト会、シトー会等）やフランシスコ会の伝統がとりわけ注目され尊ばれるべきです。

9月1日～10月4日の「被造物の季節（Season of Creation）」は、毎年この期間にこれを祝う幾千ものカトリック地域共同体に対して、教会内でのエコロジカルな回心の刺激となる、広く受け入れられた取り組みとして傑出しています。もともとはエキュメニカルなものとして考案されたこの取り組みを、教皇フランシスコは「ともに暮らす家のための祈りと行動の集中月間」¹⁷と特徴づけ、2019年のこの時期に教会で祝うよう招きました。「被造物の季節」は、いくつもの広域司教団組織（たとえば、ヨーロッパ司教協議会評議会やラテンアメリカ司教会議）や国レベルの司教協議会そして世界中の諸教区に採用され（訳注：日本のカトリック教会では「すべてのいのちを守るための月間」として取り組んでいる）、信者のエコロジカルな霊性（LS 216）の発展に資する非常に効果的な司牧的な資源であることが明らかになっています。

その他多くの重要な率先活動もなされています。2016年、フランス司教協議会は、エコロジカルな回心を教区内で促進し支援するという使命のために、各司教によって指名されたインテグラルエコロジーの教区代表者を置くことにしました。

もう一つの興味深い事例は、「カーサ・ヴェルハ（Casa Velha – Ecologia e Espiritualidade）」¹⁸です。ポルトガルのファティマから数キロメートルの場所にあるこの施設は、エコロジカルな回心を、神との、他者との、自然とのかか

17 教皇フランシスコ「被造物を大切にす世界祈願日メッセージ（2019年9月1日）」。

18 <https://casavelha.org> 参照。

わりの中で経験できるよう、黙想会や研修を行っています。

いくつかの勧め

1. 靈的回心には、社会的、経済的、政治的な関与や行動へと促す影響力があることから、靈的養成の重要性を意識しましょう。

2. 観想、沈黙、祈り、典礼、労働、奉仕をみごとに組み合わせる修道生活の伝統を広め活かしましょう。

3. 「被造物の季節」（「すべてのいのちを守るための月間」）の期間中に『ラウダート・シ』関連の活動を組織し、被造界を大切にすることがキリスト者の召命にとって不可欠な要素であると信者が納得し、自らの生き方に統合できるよう、助けましょう。

4. 屋外で、一人あるいは皆と一緒に観想したり内省したりする機会を設けましょう。

5. 被造界や将来世代に対する個人的また集団的な責任感を醸成する教育を施しましょう。

6. 「個人としてのバランス」と「社会としてのバランス」と「自然環境としてのバランス」とのつながりの重要性の意識啓発に努めましょう。

7. 被造界との調和を求めてやまない人々との（他教派や他宗教の視点も含め）司牧的な対話を、とくに、地球の保全といのちの保護を促進するためのイベントを組織することで進めましょう。

8. インテグラルエコロジーを推進しようと働いている、文化的また社会的に相異なるグループどうしの出会いや対話を促進しましょう。

9. 経済・金融分野、政治・制度分野、農業・環境分野、そして生命倫理・健康分野の間の信頼関係と率直な討論とを促進して、開かれた対話の妨げとなる自己陶醉や猜疑心を克服しましょう。



2

人として生きるということ

「適切な人間論なしのエコロジーなどありえません」(LS 118)。

導 入

「自然という本は一つで分かちがたいもの」(LS 6) です。その本には、生命、個々人、家族、社会関係、そして環境が含まれています。ですから、一人ひとりの人間をも守らなければ、自然を守ることにはなりません。「戦争、人間を搾取する組織、被造物を投機の対象とすること、使い捨て文化、さらには人間存在を都合よく支配するあらゆる構造によって、いのちは攻撃されています」¹⁹。

あらゆる人間のいのちの計り知れない価値を適切に認めることを妨げる最大のものを、教皇フランシスコは行き過ぎた (LS 115 参照)、専制君主的で (LS 68 参照) 逸脱した人間中心主義 (LS 69、118、119、122 参照) と名指ししています。この種の人間中心主義は、聖書的な基盤を欠いており (LS 68 参照)、他の被造物について功利的な立場からしか考えず、大切にしようとする人々の態度に映し出されています。こうした態度は、「進歩や人間の能力に不合理な自信を抱いていた」(LS 19) ことから生じるもので、神の代わりに人間を据えるに至ります。ヒトゲノムの見境のない操作や、実験目的でのヒト胚の使用 (LS 136 参照) は明らかにその実例です。「自然を感覚なき秩序と見る」(LS 115 参照) ようになり、それによって自然保護に必要な、限りがあるという感覚の視点を失ってしまう危険が人間にはつねに付きまっています

19 教皇フランシスコ、「一般謁見講話 (2018年10月10日)」(『十戒・主の祈り——教皇講話集』72頁)。

す。今日の状況は、「人間より劣った存在に内在的価値を認めない技術主義^{テクノクラシー}と、人間に何ら特別な価値を認めないもう一方の極論が並存するという、不断の分裂症状を招いてきました。しかし、だれも人間性を捨象することはできません。人間性の刷新なしに、自然とのかかわりを刷新することは不可能です。適切な人間論なしのエコロジーなどありません」(LS 118)。

回勅は、脆弱性は人間性に属すもので、選択や識別によって取り除けるものではないと理解できない社会にある、強力な矛盾の数々に光を当てています。インテグラルエコロジーに立てば、すべての人は、よいサマリア人のように、正義と愛徳を伴う行為をもって、もっとも困っている人々を世話するよう呼びかけられているのです(ルカ 10・25-37 参照)。

教皇フランシスコは、「客観的な真理や普遍的に有効な諸原理」(LS 123)を欠く文化を批判し、人間の行動基準として、もっとも貧しい人々を最優先とすることを提案します²⁰。「わたしたちが——少しばかりの例ですが——貧しい人やヒト胚や障害者の価値を現実の一部として認め損ねるとすれば、……自然そのものの叫びを聞くことも困難になります」(LS 117)と述べる回勅は、一貫して、もっとも傷つきやすい人々の目と手と叫びを通して世界を眺めているのです。

参考資料

聖パウロ六世回勅『フマーネ・ヴィテ(1968年7月25日)』(Humanae Vitae)。

教皇庁教理省『生命のはじまりに関する教書——人間の生命のはじまりに対する尊重と生殖過程の尊厳に関する現代のいくつかの疑問に答えて(1987年2月22日)』。

聖ヨハネ・パウロ二世回勅『新しい課題——教会と社会の百年をふりかえって(1991年5月1日)』38、39(Centesimus Annus)。

同回勅『いのちの福音(1995年3月25日)』42、101(Evangelium Vitae)。

教皇ベネディクト十六世「2007年世界平和の日メッセージ“平和の中心

20 教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び(2013年11月24日)』186-201(Evangelii gaudium) 参照。

である人間の人格”（2007年1月1日）」。

同回勅『真理に根ざした愛（2009年6月29日）』15、49-51、74（*Caritas in Veritate*）。

同「ドイツ連邦議会での演説（ベルリン、2011年9月22日）」。

教皇フランシスコ使徒的勸告『福音の喜び（2013年11月24日）』158（*Evangelii Gaudium*）。

同回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』6、19、68、69、115以下、229（*Laudato Si'*）。

実践例

ブラジル司教協議会が、インテグラル・アプローチを取り入れ、子どもや高齢者を守る司牧的なプログラムを導入してから幾年もが経ち、キリスト教共同体のメンバーの強いきずなによって、いのちが、中絶や安楽死から、そして社会的遺棄の脅威から守られてきました。「子どもの司牧（Pastoral da Criança）」²¹という事業は、妊娠期間から出産まで妊婦に寄り添い、家庭の世話をしています。生後数年間、子どもたちは、栄養状態や医療的な観点で見守られ、環境保護もテーマの一つとするカテケージスを受けます。「子どもの司牧」は、ブラジルのもっとも恵まれない地域出身のおおよそ100万の子どもを助けています。こうした経験は、最近では、ラテンアメリカの他の国々、アジア、アフリカにも広がっています。

「高齢者の司牧（Pastoral da Pessoa Idosa）」²²という事業は、同様のやり方で、高齢者を世話しています。訪問ボランティアが、家を訪問して、高齢者の健康状態を見守り、また何より、高齢者の多くが陥っている孤立状態を和らげています。こうした司牧的な奉仕は、50万前後の人々に届いています。

21 <https://www.pastoraldacrianca.org.br> 参照。

22 <http://www.pastoraldapessoaidosa.org.br> 参照。

いくつかの勧め

1. 被造界の傷つきやすさに正義の問題として対応しつつ、社会の根源的単位たる家庭と、受胎から自然死までの人間のいのちとを擁護しましょう。

2. 人間のいのちを奪うことは、地球を守り、人類の^{インテグラルな}全人的発展を促進するための容認可能な政策にはならないということを、強く主張しましょう。

3. 功利的な考え方を避け、安楽死に隠された意図を拒絶しつつ、一人ひとりの尊厳を尊重して、すべての人が保健医療を利用できるよう協働しましょう。

4. 社会的、教育的、司牧的なレベルで（学校、小教区、等々で）、人間のいのちを擁護し支援する具体策を実施しましょう。

5. 殊に生命倫理の新たな課題（堕胎、安楽死、自殺など）に関連して、教育的、文化的、司牧的な取り組みを通じて、人間のいのちに対する罪という観念を若者の心に育てましょう。

6. 貧しい人々を優先することの意味を、インテグラルエコロジーに照らしつつ、より深く考察するよう促しましょう。

7. ヒト胚、子ども、病者、高齢者、世話してくれる人のない人をも含む、貧しい人々の保護と被造界の保護との間にある内的なつながりを強調しましょう。

8. 教育プログラムや実践プログラムによって、教育、司牧、カテケージス、社会、政治、経済のレベルで「使い捨て文化」と闘いましょう。

9. 教会内また広く社会の中で、『真理に根ざした愛』と『ラウダート・シ』が提示するヒューマン・エコロジーについての理解や示唆を伝えていきましょう。

3

ともに暮らす家の守り手、家庭と若者

「わたしは、家庭が非常に重要であることをここで強調したいと思います。家庭は、神の贈り物である生命がふさわしく迎えられ、ふりかかる多くの攻撃から守られる場であり、真の人間の成長をもたらしつつ発展することができる場なのです。いわゆる死の文化に対して、家庭は生命の文化の中心なのです」(LS 213)。

導 入

家庭は、福音の明白な告知を通して、またさまざまな分野での、とりわけ、被造界の保護におけるあかしを通して、その使命を果たします²³。こうした意味で、ともに暮らす家への個人としての責任感をキリストとの個人的な出会いによって強められる場となるよう、家庭もまた、エコロジカルな回心に呼ばれています。家庭は「総合的な^{インテグラル}エコロジーの主演です。地上の人間文明の二つの基本原理を内包する社会の、第一の担い手だからです。二つの基本原理とは、交わりの原理と繁殖の原理です」²⁴。「わたしたちはまず家庭の中で、いのちに対する愛と敬意の示し方を学び、また、物を適切に利用すること、整頓することと清潔にすること、地域の生態系を尊重すること、すべての被造物を気遣うことを教わります。家庭の中でわたしたちは、人格的成熟における調和のとれた成長を可能にする全人的な教育を受けるのです」(LS 213)。ですから、家庭の役割は根本的なのです。「健全な諸徳を培うことによって

23 教皇フランシスコ使徒的勧告『愛のよろこび (2016年3月19日)』(*Amoris Laetitia*)

290 参照。

24 同 277。

のみ、人々は、無私でエコロジカルな献身をなすことができるでしょう」(LS 211)。

教会内でも、若者たちこそが新たな環境意識を促進する当人であることが多いのです。「若者、信仰、そして召命の識別」をテーマとした世界代表司教会議の最終文書の中で、シノドス教父（司教）たちは、ともに暮らす家の保護について語り、「若者は、教会がこの領域でことばをもって、しかしおもに、人と環境を尊重する経済は可能であることを示す決定を通じて、預言者的となるよう促す」²⁵と述べました。同文書は、教会の中でより大きな役割を果たしてくれるよう、若者を激励しています。しばしば教皇は、歴史を作るよう、また幸福を安楽な生活と混同しないよう、若者たちを招きます。

すでに多くの若者の中には「エコロジカルなものに敏感な新しい感性と寛大な精神があり、環境保護のために立派な努力をする人もいます」(LS 209)。しばしば彼らは、家庭の中で、「大胆な文化的革命」(LS 114)の必要性を年長者に教えているのです。さらに世代間倫理も家庭内にあり、しっかりと経験されうるものですし、またそうでなければなりません。2018年10月に行われた若者に関するシノドスでは、「傍聴者の一人に、サモア諸島出身の若者がいました。彼は、教会はカヌーのようだ、老人が星を見て進路からそれないよう支え、若者が自分たちを待ち受ける未来を思いながら力強く漕いでいるとっていました。大人とは、もはや気にすることのない過去、終わった人たち、そう思っている若者によっても、自分たちは若者のなすべき振る舞いを完璧に知っていると思込んでいる大人の手によっても、進路を誤らされないようにしましょう。むしろ、皆で同じカヌーに乗り込み、聖霊がもたらすつねに新たな推進力に押されて、よりよい世界をともに探し求めていきましょう」²⁶。

インテグラルエコロジーを生きるという確固たる決意は、教会の社会教説にまた聖書的な人間観に深く根ざしているものなのですが、クリスチャンだとの自己認識のない人々にも広く共有されうるものです。ですから『ラウダ

25 第15回通常シノドス（2018年10月3～28日）「最終文書」153。

26 教皇フランシスコ使徒的勧告『キリストは生きている（2019年3月25日）』（*Christus Vivit*）201。

ート・シ』は、ともに暮らす家を大切にする若者の国際的な運動——他宗教の若者や、信仰を奉じない若者も加わりうる活動です——の参照点となりうるでしょう。彼らは、デジタルコミュニケーションの可能性を駆使して、変革への望みを新しいやり方で表現することもできます。

この問題に対する感性によって彼らは、率先して行動するよう促されます。それは否定されてはならないもので、むしろ、寄り添い励まされるべきものなのです。

参考資料

教皇ベネディクト十六世「2010年世界平和の日メッセージ“平和を築くことを望むなら、被造物を守りなさい”（2010年1月1日）」。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』13、114、165、209、213、216、221（*Laudato Si'*）。

同シノドス後の使徒的勸告『愛のよろこび（2016年3月19日）』277、290（*Amoris Laetitia*）。

同「ワールドユースデー WYD パナマ大会国際準備会議時の晩の祈りでの講話（2017年4月8日）」。

同シノドス後の使徒的勸告『キリストは生きている（2019年3月25日）』168-174（*Christus Vivit*）。

実践例

数々の司教協議会が、さまざまな教会組織や信徒組織と一緒に、家庭や若者たちが『ラウダート・シ』にこたえることを助ける企画をいくつも策定しています。イタリアのウンブリアの司教たちによって2017年に出された文書『これがわたしの家です』（*Questa è la mia casa*）はその一つで、教皇フランシスコの簡潔な前書きが添えられています²⁷。

27 <https://www.lavocce.it/edizioni/2017/08/31/questa-e-la-mia-casa/> 参照。

2018年8月のダブリンでの世界家庭大会期間中、国際神学・司牧会議（訳注：世界家庭大会と同時期に同一都市で開催される）では、被造界への配慮というテーマを扱い、家庭大会でも「ともに暮らす家プロジェクト（Our Common Home Project）」²⁸でそれを展開しました。

ワールドユースデー（WYD）は、これまでも環境問題を重視してきましたし、これからもそうしていくことになります。何千もの若者が出席する、被造界保護関連の諸会議が、若者たち自身によって組織されてきました。たとえば、2019年1月にパナマで開催されたWYDでは、『ラウダート・シ』についての複数の会合がもたれ、「ラウダート・シ・ジェネレーション（Laudato Si' Generation）」というプロジェクトが展開しました。後者は、若者主導の、複数のカトリックの青年組織で成るグローバルネットワークです。これは、より大きなネットワークであるグローバル・カトリック・クライメイト・ムーブメント（Global Catholic Climate Movement：GCCM。訳注：2021年7月29日より「ラウダート・シ・ムーブメント（Laudato Si' Movement）」に名称変更）²⁹にとって欠かすことのできない部分であり、パナマでのWYD期間中に正式に発足したものです。

自然保護を目的とする多くの活動は、子ども、若者そして家庭にかかわるものです。なかには、汚染が広がるのを防ぎ、消費主義を抑制して友愛の文化を作り上げる一つの方途として、学校や教会の企画でクリスマス休暇中、自分のゲーム機を再利用してチャリティ目的でそれらを販売するという、子どもたちが参加する取り組みも含まれます。

さらに、ともに暮らす家を守る子どもたちのまじめで寛大な献身は重要なあかしとなっており、わたしたちが直面している環境問題の深刻さを大人たちにもっと意識させる助けになっています。たとえば、環境教育を重視するレソトの司教団は、GCCM（現ラウダート・シ・ムーブメント）のようなさまざまな組織と一緒に、ラジオ番組や、学校や共同体での諸活動を通して、総合的エコロジーの意識啓発活動を推進するラウダート・シの若き活動家を養成しています。南アフリカの諸教区は、2019年3月23日に「#Youth-go-

28 <https://www.icatholic.ie/our-common-homewmof2018-going-green/> 参照。

29 <https://laudatosigeneration.org/> 参照。

Clean19」を立ち上げるなど、さまざまなラウダート・シ企画を推し進め、意識向上プログラム、高齢者や病者の世話、森林再生、リサイクルやリユース、祈りを通じて、環境と共同体への敬意と共感力を若者の間に醸成してきました。

いくつかの勧め

1. 家庭は司牧活動の担い手であって、ともに暮らす家を大切にすることを通しても、福音をあかしするよう求められているという意識を高めましょう。教皇が全教会に求めているエコロジカルな回心を生きるよう、家庭は呼ばれているのです。

2. 連帯、親切、ゆるし、いのちに開かれること、責任を学ばせてくれるとともに、他者と被造物を大切にすることを教えてくれる恵まれた教育の場として、家庭がその役割を果たせるよう支援しましょう。

3. いわゆる「人口統計学的な冬」に抗うため、家族を増やす賢明な政策を推し進めるよう、国家を、とくに西側諸国を後押ししましょう。

4. 子育て中の一人親家庭、中絶を選択しがちな困難な状況にさらされている母親、高齢の家族や障害をもつ家族の世話をしている家庭を支えましょう。

5. 若者がリーダーシップを発揮する機会をもっと増やし、より持続可能で、より包摂的で、被造界の恵みをより重んじる未来を構築するために、信教やイデオロギーや支持政党が異なっても彼らが手を取り合って働けるよう、適正な倫理的ガイドラインを提供することによって彼らの取り組みを支えましょう。



4

幼児教育と初等教育

「幼年期や少年期のよい教育は、わたしたちに種を蒔き、生涯を通して実を結び続けます」(LS 213)。

導 入

学校教育は、幼少期から批判的思考や社会的責任を養成するうえで、中心的な役割を果たします。過去と比べて情報源が増大し「情報社会」と定義されるまでになった今日の社会において、このことはいっそう真実です。しかしながらわたしたちは、こうしたあふれんばかりの情報を、適切に、選択的に、また批判的に取り扱う能力を有してはいません。

かつてと違い知識伝達の間としての優位性を失ってしまった学校は、新たな重要性を手に入れる必要が、すなわち、若い人々が物事の違いをわきまえ、よしあしを見分け、批判的に考えることができるよう支援する場になる必要があります。加えて、学校は、インテグラルエコロジーの観点から、そうした基本的能力を倫理的諸価値や社会的責任へと方向づけることができなければなりません。専門知識とそれを使用するのに必要な知恵との明白なギャップが広がるのをじかに見ているわたしたちは、生徒が知識、識別、批判的思考、責任ある振る舞いにおける力を伸ばせるよう助けとなることの中に、学校の重要性を見いだします。

教育の過程に不可欠なのは、生徒が実生活の諸問題に気づき、共通善への意義ある寄与ができるようなやり方で、それらに対処する方途を学ぶのを助けることです。他者のため、また自然環境のために何かができるということは、生徒の倫理的な自覚や社会的な責任感を育てるばかりでなく、人として

の成熟を促すことともつながっています。これは教育を、子どもの成長過程に合わせて、頭（知識）と心（感受性）と手（行動）を調和させることと解するようにとの、教皇の度重なる招きへの一つの具体的応答とみなすことができます。インテグラルエコロジーをその動機とする教授法は、人間の全人的発達という人格主義的な発想を採用することによって、子どもの頭と心と手を重視します。それは、際限なき進歩という観念にとらわれて、人間の成長を物質的繁栄と混同し、社会的排除やアイデンティティ剥奪を一顧だにしない経済主義的な解釈に抗するものとして、すべての人の一己の人格としての全人的発達³⁰を涵養するものです。

参考資料

聖パウロ六世「第9回イタリア・カトリック教員組合全国会議参加者へのあいさつ（1968年11月4日）」。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』202-215（*Laudato Si'*）。

教皇庁教育省「教育機関あて指針 友愛的なヒューニズム教育——“愛の文明”の構築、ポプロールム・プログレシオ公布50年を経て（2017年4月16日）」。

教皇フランシスコ「イタリア・カトリック教員組合へのあいさつ（2018年1月5日）」。

実践例

サービスマーケティングとは、批判的思考ができる意識の高いアクティブ・シチズンシップを生徒に習得させる効果的な教授法で、どんなタイプの学校でも、どんな学年にも導入できるものです。1つのプロジェクトを6段階で行う「Six for One」モデルは、保育園でも、次のような段取りで使えるもので

30 聖パウロ六世回勅『ポプロールム・プログレシオ（1967年3月26日）』（*Populorum Progressio*）14 参照。

す。1) 観察する、2) 一緒に振り返る、3) 共同で行うプロジェクトを選ぶ、4) やってみる、5) 経験を記録して振り返る、6) 小さな祭儀で終わる。小学校でのサービラーニングはより発展したものとなり、次のように構成されています。1) 状況の分析と、共同体の助けとなる取り組むべき問題やニーズの見定め、2) プロジェクトの実現に協同してくれる他の事業体（関連団体、小教区、地方自治体、NGO など）を見つけること、3) 十分な検討期間を設けたうえでの、共同体奉仕活動プロジェクトの計画、4) プロジェクトの実行と、経験したこと全体の成果と意義の振り返り、5) SNS や出版物やポスター等を通じた成果の周知、6) 締めくくりとして共同体全体の式。

もう一つの興味深いアプローチは、アイルランドの多くの教区がカリタスアイルランド (Trócaire) の支援を得ながら採用してきたもので、『ラウダート・シ』やインテグラルエコロジーの主題を保育園や小学校の教育カリキュラムの中に導入する「Grow in Love」プログラムを通してなされるものです。このプログラムは、「家庭—学校—小教区」の結びつきを円滑にしながら、ともに暮らす家を守る行動的参加を促す包括的なアプローチを取り入れています³¹。

「ともに暮らす家を大切にする」という論点は、保育園や小学校の教育プログラムでますます中心的特徴となりつつあります。たとえば、オーストリアのグラーツ・ゼッカウ教区では、「被造界への責任を引き受ける」というモットーが小学校の4つの指導原理の1つにされました。

いくつかの勧め

幼稚園／保育園（幼児教育）

1. 自然環境や都市環境の観察と探索を通じて、気づきを促し、生活を取り巻く現実の特徴を理解できるよう助けながら、子どもが生来有している好奇心を育てましょう。お絵描きや色塗り、音楽やダンスを通して自分を表現するよう促しましょう。美しいものをふさわしく味わえるよう、また、すべ

31 <https://www.growinlove.ie/en>. 参照。

てのものは神から与えられたプレゼントで、それを大切にするのはわたしたちの責任だということが分かるよう、子どもに寄り添い、励ましましょう。

2. 子どもたちに、教室をはじめとする身の回りの環境を大切にする責任感をもたせ、環境を美的観点からも改善する活動に参加させましょう。こうしたプロジェクトには、保護者にもかかわってもらいましょう。

3. 子どもの年齢にふさわしい、環境問題や社会問題に関するサービスラーニング企画（学校農園、不用品リサイクル、食べ物……）を実行しましょう。

4. ガイドの案内で、公園や植物園、教育農園や美しさにおいて意義深い環境を、保護者と一緒に訪れるよう奨励しましょう。子どもが心に残る自然体験を得られるよう助けましょう。そうした体験や、自然環境を重んずる心を表す、ポスターや掲示板や縮尺模型を制作しましょう。

小学校（初等教育）

1. 双方向のやり取りを通して学習し発見していく方法を奨励し、食事の取り方について省みるよう子どもたちを助け、正しくて意識的で責任ある食生活を促しながら、既成の考えの押しつけではない食育プログラムを実行しましょう。

2. 必要な栄養も得られず、飢えてすらいる人々など、自分以外の他の人々が置かれている状況について、子どもが視野を広げられるようにしましょう。貧困、格差、非識字、搾取、児童労働、女性の処遇、等々、全人的な発展を妨げ、周縁化を招来する諸原因に対処しましょう。

3. 子どもたちが自分の自然環境や社会環境を調べて、その質を評価し、そこにある問題を同定する、調査研究プロジェクトを促進しましょう。自分たちの環境を大切にしよう子どもたちを訓練する諸活動を奨励しましょう。家庭ゴミのリサイクルや分別の最新技術や優れた実践例を教えましょう。

4. 環境問題は、援助の必要な人間のニーズ（たとえば貧困）につながっているという基本的理解を子どもがはぐくめるようにしましょう。そうした問題の環境的な側面についても教えましょう。

5. 絵、音楽、ダンス、ゲーム、写真、スポーツなど、役に立つあらゆる

手段を用いて、自然とじかに触れる体験を促し、美と調和を発見できるよう手助けしましょう。社会見学を企画して、その経験を振り返り、天然資源は神からのプレゼントであると同時に、無限ではないということを子どもたちに学ばせましょう。

6. 健康と環境に資する行動変容を促進しましょう。他の生徒や保護者そして地域共同体を巻き込みながら、よりよい、より節度ある食品の消費や、フードロスを防ぐ取り組みを奨励する啓発キャンペーンを実施しましょう。

7. 通信技術によって提供されるリソースを使って、オンライン学習や分かち合いプロジェクト等、学校間の協同企画を導入しましょう。



5

中等教育

「環境上の責任についての教育は、直接的で多大な影響を周囲の世界に及ぼす行動へと促すことができます」(LS 211)。

導 入

若者に、倫理的に考え、個人的な責任感を涵養^{かんよう}することを教えずに、批判的に考えることのみを教えるのは不十分です。わたしたちの社会は倫理と環境とを切り離してしまいました。見方を変え、倫理的責任を生^なのあらゆる領域に拡張する必要があり、いのちとその全き実現を守り、取り戻し、促進するのに求められる諸条件を作り出そうとする姿勢を奨励する必要があります。

若者がもっと意識的になり、批判的に考え、さらには責任をもって行動するよう教育することによって、彼らの物の見方はまとまっていくでしょう。それはまた、歴史と地理の観点からだけでなく、その中で生きている自然と広大な宇宙の観点からも、自分を位置づける助けとなるでしょう。科学や人文学における教育は、自分自身のアイデンティティや歴史、そして共同体やより広い世界の中での場所を自覚する人格形成に寄与します。空間、時間、社会、環境をつなぐ、相互依存的な現実だという認識を深めもします。そのようにして生徒は、自分に固有の責任を担えるようになるでしょう。

教育と実生活とが重なるとき、学校はいのちの場となり、外界へと開かれた空間となるでしょう。そのようにしてこそ、学習は理にかなうものとなり、生徒にとって有意義なものとなります。

参考資料

聖ヨハネ・パウロ二世回勅『真の開発とは（1987年12月30日）』34（*Sollicitudo Rei Socialis*）。

同回勅『新しい課題——教会と社会の百年をふりかえって（1991年12月30日）』38-39（*Centesimus Annus*）。

教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛（2009年6月29日）』32、48-51（*Caritas in Veritate*）。

同「2012年世界平和の日メッセージ“若者に対する正義と平和の教育”（2021年1月1日）」。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』202-215（*Laudato Si'*）。

同「教皇庁教育省主催国際会議参加者へのあいさつ（2015年11月21日）」。

同使徒的勧告『キリストは生きている（2019年3月25日）』222（*Christus Vivit*）。

実践例

教育や養成に係る多くの活動を実行するために、サービスラーニングを使うことができます。たとえばそれは、「わたしはできる（Yo puedo）」というプロジェクト（訳注：カトリック教育国際団体 [OIEC] が取り組む）の発想に結びついています。このプロジェクトは、共感をもって状況を受け止め、解決法を考案し、実行に移し、共有するよう生徒を導く、4段階（感じる—想像する—行動する—共有する）の教授モデルです。このモデルは「エコロジカルな市民性」のための養成プロジェクトにも適用でき、各人の諸次元や諸言語、すなわち、心の言語（感情）、頭の言語（想像）、手の言語（行動）、そして分かち合いの言語を巻き込むものです。

カトリックと公的教育機関との連携構想も重要です。たとえばルーマニアでは、クルージュ・ゲルラ教区のギリシア・カトリック高校が、気候やリサ

イクルそしてそれとは別のインテグラルエコロジー関連の活動に関する国家プロジェクトに連携協力してきました。加えて、アルバ・ユリアとファガラシュの大司教区にある聖大バジル・ギリシア・カトリック神学高校とブカレストにある聖ヨセフ・ローマ・カトリックカレッジは、廃棄物処理や森林再生を含む、ともに暮らす家の保護に向けたプロジェクトや意識啓発活動に生徒を参加させています。

もう一つの興味深い取り組みは、ブラジルのペロオリゾンテ大司教区が、2019年から導入している、「壁を壊し、橋を架ける (Desconstruindo muros, construindo pontes)」プロジェクトです。こうした活動は、小学生や中学生が、個人としてまた集団として、現今の人間の現実を反省的に理解するのを助けてくれます。

ほかにも、さまざまな教区では、司祭たちが回勅を学び、学校や小教区で、その内容を知らしめ、現場で実施するうえでの有意義な活動を見定める会合を開くよう促す、種々の取り組みがあります。たとえば、ガンビアのバンジュール教区では、こうした会合を通して、複数の生徒のグループが団結し、それぞれの共同体で回勅の諸主題がもっとよく知られるよう、働きました。

いくつかの勧め

1. 環境変化に関する最新の科学データに基づいて、インテグラルエコロジーについての学際的な教育を促進しましょう。節度、責任の自覚、そして再生可能エネルギーの使用をもって、環境の持続可能性の諸問題に対処する方法を生徒に教えましょう。環境の持続可能性の諸問題に取り組む手段としての、廃棄物を出すことのない自然の循環型経済サーキュラーエコノミーの重要性に注目させ、人間と自然との調和あるかかわり方を涵養しましょう。

2. 良識あるエコロジカルなアプローチは、社会的・文化的・法的な次元を軽視することなどないと生徒に教えましょう。発展途上諸国の実際のケース（たとえば干ばつによる穀物減収）や、また先進諸国のケース（たとえば移住を余儀なくさせる海面上昇等）を引きながら、貧困のような社会問題と環境問題とのつながりを、生徒に理解しやすくしましょう。

3. より大きな関心や意識を喚起しうる活動やイベントを計画し、社会や環境の持続可能性にかかわる諸問題を、生徒や保護者に知ってもらいましょう。

4. 人間の尊厳、共感力、和解、非暴力、平和、持続可能な発展を促進するためのリーダーシップを発揮するよう、若者を教育し力づけましょう。科学分野には、変革の担い手となる彼らの可能性に重点を置いた、生徒が実施する教育プログラムというよい事例があります。こうした取り組みを、低所得国の学校を含め、すべてのカトリック学校で採用すべきです。インターネット上に交流サイトを立ち上げ、生徒が持続可能性関連プロジェクトについての自分たちの体験をシェアできればいいですね。

5. 『ラウダート・シ』の教えを参照しつつ、環境問題の倫理的・霊的な根本因を考察する試みを励まし、教育共同体の全構成員の参画を射程に入れ、中等教育の中で、そうした考察を徐々に涵養しましょう。

6. カトリックのしかるべき専門諸団体との協力関係やネットワークを構築し、インテグラルエコロジーを推進し人間の尊厳を擁護することを目指す、教育的取り組みの開発・導入・評価を支えてもらいましょう。

6

大 学

「環境教育はその射程を広げてきました。初期の環境教育は、おもに科学的情報の提供と意識の啓発と環境リスクの回避とを中心にしていたのですが、現在では功利主義的な考え方を土台とする近代の「神話」（個人主義、限りなき進歩、競争、消費主義、規制なき市場）批判を含みつつあります。それはまた、……さまざまなレベルで、エコロジカルな平衡を回復させようとしてもいます」（LS 210 参照）。

導 入

大学は、若者たちを教育する場所であり、知識の伸長と社会の発展のための科学研究の拠点です。大学はまた「自分たちの星の未来をわたしたちがどのように形づくろうとするかについての新たな対話」（LS 14）に呼ばれてもいます。ですから、世界のあらゆる民族の、とくに貧しい人々の生活の質を真に持続可能なものとする政策と経済の構築へと導くインテグラルエコロジー（LS 62、124、137）の教育が不可欠なのです。

大学の本性と使命は、人間や神にかかわるあらゆる細目に及ぶ知識の総体を包摂することです。大学の究極目的は、すべての人と、わたしたちがともに暮らす家とを向上させることであるべきです。大学で学ぶ者が、自分たちには今日の諸問題や貧しい人々の窮状や環境のケアに対するより大きな責任が課されるのだと気づくような教育が行われれば、このことは実際になし遂げられうのです（LS 201、210 参照）。

大学、とくにカトリック大学には、天然資源管理の限界と不平等を指摘し、

新たな発展モデルを提案するという重大な課題（LS 162、209参照）が突きつけられています。講義で扱われるそうした問題の生態学的、社会的、環境的、政治的、経済的、教育的な諸次元と、各学問分野が与える全般的な養成とを統合することが不可欠です。大学は、教授（第一の使命）と研究（第二の使命）のほかに、何にも増して、地域共同体の社会的発展を後押しするという第三の使命を有しています。実に大学は、市民社会や地元企業との積極的な交流を通して、共通善の実現を目指すよう求められています。

つながりに刮目するインテグラルエコロジーが、いかにして、科学活動や高等教育を組み立てるための枠組みとなりうるかは、経験によって示されています。さまざまな形態を取る環境意識は、とくに大学における学際的な対話（LS 81、199参照）を支える基盤となり、イノベーションの好機や新たな専門職をもたらしうるのです。

こうした第三の使命を遂行する学術共同体は、一丸となって実効ある教育を提供しようとする社会全体の取り組みに、積極的にまた信念をもって協働することでしょう。またそれは、「環境教育は、エコロジカルな倫理にそのもっとも深い意味を与えてくれる超越者に向かつての跳躍を助けてくれるはず」だということを示すでしょう。さらにそうした学術共同体は、「エコロジーの倫理を発展させ、また、効果的な教育を通して、連帯と、責任と、思いやりをもって大切にすることをはぐくむよう、人々を助ける力のある教育者」（LS 210）を提供できます。

参考資料

聖ヨハネ・パウロ二世使徒憲章『エクス・コルデ・エクレジエ——カトリック大学について（1990年8月15日）』（*Ex Corde Ecclesiae*）。

教皇ベネディクト十六世「ローマのラ・サピエンツァ大学での講義（2008年1月17日）予定稿」。

教皇フランシスコ回勅回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』14、62、81、124、137、199、201-215 (*Laudato Si'*)。

同南米三か国司牧訪問時「教育・学術関係者との集いでの講話（キト [エ

クアドル]の教皇庁立大学、2015年7月7日)』。

同「ポルトガル・カトリック大学共同体へのあいさつ(2017年10月26日)」。

同使徒憲章『ヴェリターティス・ガウディウム——教皇庁立の大学と学部について(2017年12月8日)」序文(*Veritatis Gaudium*)。

同使徒的勧告『キリストは生きている(2019年3月25日)』222(*Christus Vivit*)。

実践例

「科学的研究による今日ある最高の成果を活用して、……倫理的・霊的道の筋の具体的基盤を築」(LS 15)くために、多くのカトリック大学で「ラウダート・シ」プロジェクトが立ち上げられてきました。このような意味で、大学は、知恵と創造性をもって、環境への人的悪影響を削減し、持続可能な発展の新たなモデルを提示し、責任あるライフスタイルを促進する方途を発見する責任があります。こうした目的のための実際的可能性や方法を創出するには、人間のためになる明確な選択がなされ、現在においても未来においても、わたしたちの惑星の状態とその住人の権利に関する意思決定にあたっての対話、率直さ、透明性といった諸価値の重要性に焦点が当てられなければなりません。

こうした趣旨で立ち上げられた「食糧問題に関する学際共創研究センター(TROFIC)」は、国際カトリック大学連盟(IFCU/FIUC)が主催する「フード&ヒューマンディグニティーネットワーク」に連なる国際的な大学のネットワークの結実であり、ミラノにある聖心カトリック大学に本部を置いています³²。この研究センターは、キリスト教の人間観や生命観に照らしつつ、環境の持続可能性や栄養や食糧入手に関連する諸問題についての学際的な学術活動を奨励し実施しています。

ほかにも、インテグラルエコロジーを通常の学修プログラムに組み入れたスロバキアのルジョンベロク・カトリック大学をはじめ、言及に値する取り

32 <https://centridiateneo.unicatt.it/trofic-home>. 参照。

組みが世界中の大学でなされています。その一つに、2017年から2021年の期間の戦略的なキーテーマとして持続可能性を掲げる組織的發展プラン(Plano de Desenvolvimento Institucional)」を立ち上げ、学術、管理、運営の各部門で持続可能性を目指す具体的行動に取り組んでいる、ペロオリゾンテ(ブラジル)にある教皇庁立ミナスジェライスカトリック大学の例があります。

2017年、ローマの教皇庁立の諸大学は、『ラウダート・シ』のビジョンとミッションの普及を目指し、「インテグラルエコロジーのジョイント・ディグリー (Joint Diploma in Integral Ecology)」制度を立ち上げました。

いくつかの勧め

1. 厳密な意味では環境問題に関連しない大学のコースでも、将来世代と若者が、ともに暮らす家を大切にすることと持続可能性を統合し、結ばれている世界そして共有されるプロジェクトという見地から考えられるよう、教育しましょう。

2. 学生たちに、教育を受けることで、貧しい人々のニーズと環境を大切にすることを含む、今日の問題に対するより大きな責任が生じることを理解するよう教えましょう。持続可能な発展の最良の国際的実践例からインスピレーションを得ながら、『ラウダート・シ』で提示されている目標を達成するのに必要とされる、社会変革と建設的な環境変化とを促進する職業に従事するよう励ましましょう。

3. とりわけ、^{テクノクラティック}技術主義パラダイムを唯一の評価基準とするリスクの高い学問においてこそ、そうしたパラダイムから生じたモデルとは異なる代替モデルの提案につながる動機づけやビジョンを示すことで、学生の創造力を活性化しましょう。

4. サービスラーニングの活動に参加させることで学生たちに力をつけ、食糧の生産や入手、水の管理、廃棄物の削減、再生可能エネルギー、技術革新といった、人間活動のさまざまな分野でなされている持続可能性の良質な実践例を彼らが広められるようにしましょう。

5. 持続可能性の3つの次元(生態学的、社会的、経済的)を考慮すると

同時に、自然、人類、ともに暮らす家を尊重する、持続可能性に関する学際的研究を発展させましょう。

6. 創造の神学を、そして、人間とわたしたちが生きている世界との関係性を学びましょう。「被造界に対する罪」という概念を育て、人間と被造界との調和ある関係の基礎理解とをはぐくむ、創造神学講義を導入しましょう。

7. すべての大学に、インテグラルエコロジー、環境、地球の健康を扱う、学際的研究を兼備する研究組織を創設しましょう。

8. さまざまな学部や専攻から成る、持続可能性とインテグラルエコロジーに関するシンクタンクを設立しましょう。そうした団体には、学生、事務職員、経営陣、教員の各代表によって構成され、大学が行う調達や手続き等における持続可能性を向上させること、それと同時に、学外団体との行事や交流における持続可能性、そしてインテグラルエコロジーにふさわしい、キャンパス改革、インターンシップ、典礼、就職支援、等々の促進を目指すべきです。

9. 現今の社会的・文化的環境の十全な分析を行うため、世界のさまざまな地域からの異なる専門領域の学者が、討論し、考えを交えることのできる、国際的な研究ネットワークを活気づけ、発展させましょう。



生涯学習

「日々のささやかな行いを通して被造界を大切にするという務めには高潔さが宿っており、また、教育がライフスタイルを実際に変化させうるのはすばらしいことです」(LS 211)。

導 入

学習は、学校や養成機関に特化した活動に限定されない継続的道程であり、成人や、これまでは想定されなかったような学習者が増えています。仕事、プライベート、家庭、社会、等々にかかわる、わたしたちの実生活のあらゆる領域にわたり、生涯を通して必要なものです。

なかでもインテグラルエコロジー教育は、その教えに沿ったライフスタイルを促進する、決意ある取り組みを求めます。教会は、具体的な配慮をもって被造界を十全に保護するには避けて通ることのできない倫理的な要求を強調すると同時に、「使い捨て文化」やそれを助長するメンタリティ (LS 16 参照) に対抗しうる「ケアの文化」(LS 231 参照) を浸透させることによって、そうした決意ある取り組みへの固有の貢献ができます。

そのような決意ある取り組みを実行に移すことは、エコロジカルな回心を促進し、「ライフスタイルや生産と消費のモデル、そして今の社会を支配している既成の権力構造」(LS 5) に深く永続的な効果をもたらすことでしょう。「とりわけ変わる必要があるのは、わたしたち人間です」し、わたしたちは「共通の起源について、相互に属し合っていることについて、そしてあらゆる人と共有される未来についての自覚」(LS 202) をもつ必要があります。「永続的な変化をもたらすために必要とされるエコロジカルな回心はまた、

共同体の回心でもある」(LS 219)のは明らかで、そうした回心は、「被造界との健全なかかわりが、全人格に及ぶ回心」にとって不可欠な「一面」(LS 218)だとわきまえています。

共同体のエコロジカルな回心は、「エコロジカルな市民性の創出」(LS 211)を目指した、さまざまな社会構成員が連携する教育的取り組みを要求します。このことは、とりわけ若い人々の間で、個人主義の克服と、連帯・責任・ケアから生まれるライフスタイルとを特徴とする、個人と社会と環境との新たな関係性モデルが広まるよう促すことを意味します。キリスト教共同体は、そうした共同の教育的取り組みへの独自の貢献をなす責任を有しているのです。キリスト者にとって、神の作品である被造界の信託管理人となる召命は、任意のものではなく、まして副次的なものではありません。

参考資料

聖ヨハネ二十三世回勅『マーテル・エト・マジストラ (1961年5月15日)』
210-211 (*Mater et Magistra*)。

第二バチカン公会議『信徒使徒職に関する教令 (1965年11月18日)』 29
(*Apostolicam Actuositatem*)。

同『現代世界憲章』 62 (*Gaudium et Spes*)。

聖ヨハネ・パウロ二世回勅『働くことについて (1981年9月14日)』 18
(*Laborem Exercens*)。

教皇ベネディクト十六世「ローマの小教区司祭と聖職者との会合 (2013年2月14日)」での講話」。

教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び (2013年11月24日)』 171、182、
183(*Evangelii Gaudium*)。

同回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に (2015年5月24日)』
59、107、164、202-215、219 (*Laudato Si*)。

実践例

生涯学習のたぐいは広範囲にわたり、さまざまな活動を含みます。かなり異なる二つの企画を例として挙げるができます。一つは、社会福祉面での実際的な貢献をもなしつつ、農業教育と自然とのふれあいを促進し支援する、市民農園の開設です。もう一つの価値ある取り組みは、世代間的な観点からのもので、高齢者のボランティアが、一人親の子どもや社会経済的困難下に置かれた子どもを支援する、地域祖父母事業です。シニア世代によるこうした支援ネットワークは、学習補助やリクレーション活動を提供し、子どもや弱い立場の人の、個人的、集団的な助けとなっています。こうしてシニア世代は、自分たちのスキルを失わずにいられ、子どもたちとの積極的な対話を通して、間接的ながら共同体とのつながりを続けられます。

多くの司教協議会は、実践プログラムを通して、『ラウダート・シ』の教えを実行に移す努力しています。たとえば、2018年9月27日、ドイツの司教団は回勅の教えを、自覚と責任感の促進から、教会の活動や資産の持続可能な管理運営に至るまでの、教区レベルでの行動のための10の勧めにまとめ一文書にして説明しました³³。

ブラジル司教協議会の常任委員会とはいえば、インテグラルエコロジー分野での教会のさまざまな取り組みを導入・調整するために、2019年6月29日に、インテグラルエコロジーと鉱業のための司教委員会を立ち上げました。これは、行政府、司法府、立法府、経済界そして市民社会との協働というかたちで、環境問題の倫理的また霊的な根源を見失うことなくなされました。

いくつもの司教協議会が、インテグラルエコロジーに関する司教団の内部研究グループを立ち上げてきました。たとえば、2000年初頭、イタリア司教協議会は、調査研究と、年一回の学びの日開催を目的とする、被造界へのケアに関する研究グループを、社会・労働問題事務局の一部として設置しました。スペイン司教協議会は、カリタススペイン、正義と平和委員会、マノ

33 https://www.dbk-shop.de/media/files_public/jitvyqqly/DBK_5301001.pdf 参照。

スウニダス（Manos Unidas 訳注：カトリック教会が運営する第三国向け開発援助 NGO 団体）、スペイン修道会・奉獻生活者会管区長会（CONFER）、REDES（カトリック系開発援助 NGO のネットワーク）とともに、さまざまな活動を通して『ラウダート・シ』の意識を広めるため、社会司教委員会の中にインテグラルエコロジー研究チームを立ち上げました。スペインでは、インテグラルエコロジーに関する教区委員会が立ち上げられつつあります。

取り上げるべき地域レベルでの取り組みは、ほかにもあります。コンゴ民主共和国のラヴィラ教区は 2016 年に、壊滅的狀態の生態系の回復、不健全な環境の撲滅、若い人々への環境教育の奨励、従来とは別のエネルギー源の使用促進を目的とする、環境保護のための教区センターを創設しました。カナダでは 2006 年に、オタワ大司教区が社会正義事務局の中にクリエーション・ケア・ミニストリー（Creation Care Ministry）を立ち上げ、『ラウダート・シ』による啓発とその実現に向けて働いています³⁴。2017 年 11 月にポルトガルでは、地域のカトリック教会に結ばれたネットワーク「共通の家のケア（Cuidar da Casa Comum）」が、『ラウダート・シ』をさまざまな活動を通して普及させるために設立されました³⁵。2005 年には、フランドル地方の教区が連携し、キリスト教的なエコロジーのビジョンの発展とその推進に従事するネットワーク、Ecokerk³⁶を設立しました。

2015 年 11 月、アトランタ大司教区は、注目すべき『ラウダート・シ・アクションプラン』（Laudato Si' Action Plan）を発行し、回勅の詳細な実行プランを提示しています³⁷。

フランス司教協議会が、カリタスフランス（Secours Catholique Caritas France）、CCFD-Terre Solidaires（訳注：フランスで最初に設立された国際開発協力の NGO。旧 Catholic Committee against Hunger and for Development）、CERAS（訳注：イエズス会が運営する、フランスの社会活動・研究センター）と協働しながら、フランス正教会

34 <https://catholicottawa.ca/care-for-creation-of-god> 参照。

35 <https://netrv.be/ecokerk> 参照。

36 <https://netrv.be/ecokerk> 参照。

37 <https://archatl.com/laudato-si/> 参照（PDF 冊子は随時アップデートされるため、掲載ページを紹介）。

主教会議、フランス・プロテスタント連盟、フランス国内のキリスト教諸教派と共同で提案した「緑の教会 (Église Verte)」³⁸ という取り組みも言及されるべきです。この取り組みは2017年9月に、祭儀とカテケージス、建物、土地、ライフスタイル、ローカルでグローバルな取り組み、この5分野における方法論的提言による各自の活動のエコ診断を通じて、キリスト教共同体のエコロジカルな回心を促進していくために立ち上げられました。

同様の活動が、ベルギー、カナダ、ポルトガル、スペインの教区でも立ち上げられました。この取り組みが、カトリックの学校、修道院、事業体といった、別の領域へと広がる可能性については、目下研究中です。

GCCM (現ラウダート・シ・ムーブメント) は、900を超えるカトリック団体と何千もの地域共同体指導者から成る注目すべきネットワークで、エコロジカルな回心を体験するための、また、被造物界をケアする助けを得るためのプログラムや資料を提供しています。これは、マニラ大司教区、イエズス会欧州社会センター (JESC)、アルゼンチンのカトリック・アクションをはじめ、12のカトリック団体のグループが、2015年1月、間もなく回勅が公布されるとの知らせに勇気づけられて、立ち上げたものです。その提供するプログラムのうち、「ラウダート・シ黙想会 (Laudato Si' Retreats)」や「ラウダート・シ・サークル (Laudato Si' Circles)」のようなプログラムはエコロジカルな霊性に、他のプログラムは持続可能性や権利擁護に結びついています³⁹。ここで、GCCMのプロジェクトである、「ラウダート・シ・アニメーター」に言及しておくことは重要です。これは、すでに100か国以上で2000人以上ものローカルリーダーを養成し認定しているオンラインプログラムで、自分たちの教区、小教区、共同体で、回勅に関する知識を深め、それを実践に移していくために必要なトレーニングを提供しています。このプログラムは、「アースデー」や「被造物の季節」(日本のカトリック教会では「すべてのいのちを守るための月間」)の折に、ローカルリーダーが自分たちの共同体で何らかのイベントを企画することを求めており、世界中のラウダート・シ・アニメーターに、サポートやオンラインでの交流の場を提供しています。ローマ教区のよ

38 www.egliseverte.org. 参照。

39 <https://catholicclimatemovement.global>. 参照。

うないくつかの教区は、GCCMと協力して、ラウダート・シ・アニメーターのトレーニングモデルを用いたコースを整えました。

2018年には、女子修道会の国際総長連盟（UISG）の役員会が、すべての修道会とその協同者や協力者やネットワークを対象に、それぞれの生活と使徒職に『ラウダート・シ』を組み入れていく方法についての各種の提案や資料を提供するキャンペーン、「地球に希望の種を蒔こう（Sowing Hope for the Planet）」を立ち上げました⁴⁰。

いくつかの勧め

1. 人間的な成長は、直線的に進むものではなく、簡単な形状から始まる生体心理学的な進化ではない、という原則を堅持しましょう。人としての成長は、それどころか、ある年齢まではますます豊穡なものになっていくものの、その後は、地上の生の黄昏に向かうにつれて、諸機能の喪失とともに衰え始めます。人生を構成する時節はどれも、獲得と損失、危機と適応、生死にかかわる出来事、新たな挑戦に応じる際の思いがけない能力の発揮、そうしたもので成る途切れなき過程の刻印を受けるのだと強調することは肝要です。

2. 各人や各共同体が生涯学習に取り組む助けとなり、自己学習を含め、自身の成長の主体となり評価者となる仕組みや方法の導入を奨励しましょう。

3. インテグラルエコロジーに関しては、学ぶ側により大きな役割を与え、彼らが個人的な経験やスキルを表明し、伝え、比較することを奨励する教育法や養成法を重視しましょう。人は皆、どのような場合でも、他者にとっての資源であること、あらゆる経験や状況から学び、また自己改善のための教訓を得ることが可能であること、そうした認識を向上させ強化しましょう。

4. その全構成員また全世代にとって、インテグラルエコロジーの生涯学習に有利な場所である家庭に、感謝の念を表しましょう。社会の基本的最小単位たる家庭が成長していけるよう支えましょう。

40 <https://www.sowinghopefortheplanet.org>. 参照。

5. 世代間の交流や協同を支援しましょう。子ども、若者、成人、高齢者は、互いに、向上のための機会を提供しています。画期的な方法をも支援しつつ、年齢の異なる人が一緒に学べる協働^{コラボレティブラーニング}学習の場を創出しましょう。
6. あらゆる形態の脆弱さへの気遣いを表すことで、超高効率と消費主義の文化に^{あらが}抗いましょう。病者、高齢者、困窮者、障害や不自由を抱えている人々は、変わることはない価値あるものに、日常の中で出会わせてくれる存在であるゆえに、インテグラルエコロジーの観点から重要な社会的資源といえます。福祉任せ、無関心、放置を克服し、一人ひとりすべての人の尊厳という認識を高める取り組みを始めましょう。



ノンフォーマル教育と出会いの文化

「環境教育には、エコロジーの倫理を発展させ、また、効果的な教育を通して、連帯と、責任と、思いやりをもって大切にする心をはぐくむよう、人々を助ける力のある教育者が必要です」(LS 210)。

導 入

「ケアの倫理」の原則をよりどころとする教育政策の促進には、支配的な教育モデルを根本から覆すことが伴います。適正な行動には科学的な専門知識だけで足りるという前提で、トレーニングと教育を同一視し、教育のプロセスを概念や手順についての知識の獲得としか見ていない産業技術的教育モデルです。ケアの倫理の教育は、責任と個人的なかかわりを引き受けることを含め、経験を通してケアを学ぶ環境を整えることを意味します。

連帯と責任とケアにおいて成長させる職務は、教育共同体全体の任務です。「一人の子どもを育てるのは、村全体の仕事だ」というアフリカのことわざがあります。言い換えると、種々の関係が生き生きと結ばれたネットワークとして理解された「教育共同体」は、すべての人が、自分の生活と行いを他者への贈り物としてささげる共同責任を自覚している集いの場です。本物の教育的経験は、全人的でなければならず、いかなる領域も全体から切り離されたものとして扱うことは不可能なので、家庭、学校、小教区、スポーツ団体青年団、文化センター等々は、すべて互いを必要としています。教育共同体とみなされる町は、さまざまな団体すべてがともに働き、一つの「教育協定」を結ぶ場所です。そうした団体は助け合い、若者を中心に据え、そうして若い人々との信頼関係を築き、彼らを大人たちに何かをもたらししてくれる活動の

担い手、メインキャストと考えているのです。2018年の世界司教代表者会議での討論を踏まえた使徒的勧告『キリストは生きている』は、共同体全体には、子どもと若い成人の成熟過程に同伴する義務があることに注目させます(243)。

子どもや若い人は、バランスある成長のために、自分自身についての、他者についての、造られたすべてのものについての、そして、神についての知識を深める機会を必要としています。適正な同伴を得たうえで、これを達成する最良の道は「苦しみとの出会い」です。他者の痛みに触れることは、愛徳と共感、自分自身の脆弱さの自覚、友愛へのより強い思いを深めてくれます。もう一つの道は、わたしたちは皆一つの起源と運命をともにしているという理解をはぐくんでくれる、文化的多様性とグローバリズムを積極的に受け入れることによるものです。わたしたちは全員、同じ空気を吸い、ともに暮らす家である同じ地球の上を歩いています。こうした道は、いわれなき敵意や暴力への積極的で建設的な応答として、「出会いの文化」と互恵的な傾聴を土台にした平和的共存の構築に資するものです。

ノンフォーマル教育の環境や活動はまた、健全な環境と美とのかかわりにも重きを置くべきです。美を感謝の念をもって味わいめであることを学ぶなら、あらゆるものやすべての人の価値に、全被造界とその背後におられる創造主の価値に気づけるようになります。

参考資料

聖ヨハネ二十三世、「第17回オリンピック競技会ローマ大会参加選手へのあいさつ(1960年8月24日)」。

聖パウロ六世「イタリアでのスカウト運動設立50周年記念時のあいさつ(1996年11月5日)」。

聖ヨハネ・パウロ二世「欧州ガールガイド・ガールスカウトへのあいさつ(1994年8月3日)」。

教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び(2013年11月24日)』220、223(*Evangelii Gaudium*)。

同「スコラス・オクレンテス後援第4回世界会議閉幕のあいさつ（2015年2月5日）」。

同回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』
202-215、229-231 (*Laudato Si'*)。

同「ヘブライ大学で開催されたスコラス・オクレンテス大会（2017年7月2～5日）へのビデオメッセージ」。

教皇庁いのち・信徒・家庭省『ベストを尽くす——スポーツと人間についてのキリスト教的観点（2018年6月1日）』。

教皇フランシスコ使徒的勅告『キリストは生きている（2019年3月25日）』
242-247 (*Christus Vivit*)。

実践例

スカウト活動は、よき「青少年のための学校」です。チーム精神を教えるもので、社会階層の違いを超えています。年長者や経験豊かな人の「手本による教授法」に重きを置いています。アウトドアに触れることでいのちについて啓発し、そうして自然を尊重することを教えます。スカウト活動は、若い人々の心を開き、レクリエーションの機会を与え、規則に従うことや自分のことばに忠実であることの重要性を強調します。奉仕や普遍的友愛や平和を理念に掲げ、野外でのアウトドアや身体を使った活動、ゲームや一緒に歌うこと、霊的な生活や、共同体また困窮者への奉仕といったものの健全なバランスを提供します。

教皇庁立基金「スコラス・オクレンテス」（訳注：「出会いの学校」の意味。教皇フランシスコが、ブエノスアイレス大司教時代から推進してきた教育運動。中南米や欧州を中心に、190か国もの教育機関を結ぶネットワーク）は、「スコラス・ラウダート」プログラムを通してスカウト運動と協力し、「ともに暮らす家の守り人」である若者たちを訓練し、「スコラス・ソシアル」⁴¹というプラットフォームにおいて、ノンフォーマル教育団体と学校や他の諸機関を連携させて

41 <https://www.scholasoccurrentes.org/it>. 参照。

います。マニュアルや訓練ワークショップは、「出会いの文化」に資する芸術とスポーツと新たな技術とを結び合わせることで、地域共同体に意義ある変化をもたらすことを狙った具体的活動を促進しています。若者がほかの若者をトレーニングし、その子が今度は、自分たちが学んできたことを、そのプログラムに参加している学校の子どもたちと分かち合うのです。

ワークショップは、観察／観想し、勉強し、共同体を巻き込み、行動し、評価し、そして祝うという6つの異なったステップを使って、インテグラルエコロジーに関連する特定の問題に焦点を当てます。各テーマには芸術活動やスポーツ活動も含まれていて、良質の実践例がインターネット上で広く共有されています。

回勅『ラウダート・シ』に鼓舞されて、アンゴラとサントメの司教協議会の正義と平和と移住者委員会は、環境保護のアクションプラン2017-2019を著しました。このアクションプランは、ラジオ番組や会議や集会を通じた回勅の普及活動、意識啓発キャンペーンや廃棄物回収活動、環境教育書の発刊、鉱業事業者との対話を促進する率先活動、そして、森林伐採と闘う教育活動にその特徴があります。こうしたプロジェクトは、アンゴラの信者や市民に被造界を大切にすることを促進するための、祭儀やさまざまな教育活動や文化活動とともに行われています。

カリタス英国 (CAFOD) は、インテグラルエコロジーのアプローチを取り入れ、出会いの文化とエコロジカルな回心とに重点を置いた、「わたしたちの共通の家 (Our Common Home)」という10か年戦略計画を採択しました⁴²。

サルフォード教区は、「ラウダート・シ・センター」のプロジェクトを立ち上げ、個人や共同体がインテグラルエコロジーを推し進める刺激となる、ささやかな、しかし積極的な手段の数々を後押ししています⁴³。

2011年、ハンガリーの司教協議会は、「Naphimnusz (太陽の賛歌)」と呼ばれる被造界保護のための協会を設立し、ともに暮らす家を大切にしていけるよう、ハンガリーのカトリック諸共同体の積極的支援と調整を行っていま

42 <https://cafod.org.uk/Campaign/Climate>. 参照。

43 <https://www.dioceseofsalford.org.uk/diocese/environment/laudatosicentre/> 参照。

す⁴⁴。

ほかに、女子修道会によって立ち上げられたインフォーマル教育の取り組みは少なくありません。なかでも、カメルーンの聖フランシスコ女子修道会に言及することができます。2018年の「被造物の季節」(訳注:エキュメニカルな環境保護行事)には、シスターたちは、植樹や樹木の世話と保護について、また被造物への配慮とともに暮らす家の再生について教える「アンバサダー」やロールモデルを起用して、地域の共同体や学校における意識向上のためのさまざまな教育活動を組織しました⁴⁵。米国では、聖ヨゼフ修道会のシスターたちが、いろいろな教育法を用いて働き、持続可能性の重要性を学ぶための機会を提供するネットワークを作っています。たとえば、被造物を大切にする30のレッスンを含む、子ども向け冊子を、地域の機関やカレッジと協力して準備しました⁴⁶。

いくつかの勧め

1. 「頭と手と心」を働かせるような、自然環境と接する具体的な経験を奨励しましょう。こうした経験は、わずかであっても環境の改善へと導いてくれるものですし、時間を取って振り返ったり、どんな暮らしをしてきたか、また何を学んできたかについて、グループで分かち合ったりすべきです。

2. 子どもや若い人を社会変革や環境改善の担い手・働き手とみなし、他者を気遣うよう助けましょう。彼らの提案やアイデアに耳を傾け、彼らの目標達成に向けて具体的な助けを提供しましょう。

3. 「他者の苦しみに触れる」ことのできる経験から、若者たちを遠ざけないようにしましょう。そうした経験は、愛徳と共感において成長し、自身の苦しみの価値や人生の意味を認め、他者を尊敬し思いやり、使い捨て文化に典型的な無関心を拒絶できるようにしてくれるでしょう。

4. あらゆるものは、そこに付随する価値によって、健全な教育の補強に

44 <http://www.teremtesvedelem.hu>. 参照。

45 <http://tssfcameroon.org>. 参照。

46 www.ssjphila.org. 参照。

も阻害にもなりえ、助けにも妨げにもなりうるという確信のもと、あらかじめだれかを排除することなく、社会的、文化的、経済的、政治的、宗教的な共同体のより広範な相互交流を地域レベルで促進しましょう。これは、社会の中の関係者全員で取り結ぶ「教育協定」の再構築を後押ししてくれることでしょう。

5. 地域レベルの諸問題に関心をもち、それらをグローバルな諸問題とつなげましょう。行動のしかた一つ一つが及ぼすよい影響や悪い影響について、また、そのグローバルな影響についても考察しましょう。

6. あらゆる場面での美に、そして自然との触れ合いに関心をもちましょう。調和と健全な環境とは密接につながり合っています。自然や美を観想すること、感謝を表すこと、神に感謝することに、時間を割くよう勧めましょう。これはインテグラルエコロジーへの回心の一端でもあるのです。

7. 被造物を尊重する文化を、対話の道具として、できることなら、さまざまな文化の出会いと交わりの道具として、受け止め活用しましょう。

カテケージス（信仰教育）

「どのような世界を後世に残したいかと自問するとき、わたしたちはまず、その世界がどちらに向かい、どのような意味を帯び、どんな価値があるものなのかを考えます。エコロジーへの関心をわたしたちが抱いていても、そうしたより深い問題との格闘がなければ、大した実りは期待できないであろうと、わたしは確信しています」
(LS 160)。

導 入

カテケージスは、信仰の内容を欠けることなく有機的なつながりをもって提示する、信仰教育の過程です。受け手が、キリストの神秘に照らされ、世におけるキリストのあがないのわざに教会を通して積極的に参与することができるようにするものです。教会の社会教説は、カテケージスではインテグラルエコロジーを扱うよう求めています。

キリスト者には、エコロジカルな取り組みへと促される神学的・霊的な理由がいくつもあります。「信仰者は、自分の信仰にかなう生き方をし、行いでそれに背くことのないように、つねに自らを戒めなければなりません。……わたしたちが自らの行動規範を誤って解釈し、自然の濫用を正当化したり、被造界に対して横暴に振る舞ったり、戦争や不正や暴力行為に手を染めたりすることがあったのであれば、わたしたち信仰者が認めるべきは、それによってわたしたちは、自分たちが守り保つよう招かれた知恵の宝に不忠実だったということです」(LS 200)。ともに暮らす家を大切にす自覚的な取り組みなしに、キリスト者らしく生きることはできません (LS 第2章参照)。

カテケージスではまた、象徴的・儀式的なしかたで、信者が創造主の前で被造物である自分を経験し、他の被造物との意義深い関係性を感じる場である典礼への結びつきが強調されるべきです。典礼文は被造界を、キリストにおいて新たにされあがなわれている神のみ手のわざであり、なお究極的完成へと旅を続けるものとして、肯定的に提示しています。典礼は、何より秘跡を通して、過越の神秘を表現し現存させるために、自然の要素を取り入れます。それらは、「神が自然を、超自然的ないのちを仲介するものへと高める、特別に恵まれた手段」であり、「聖体は、被造界全体の信託管理人であるようわたしたちを導く、環境への関心を照らし生かす光と力の源でもあります」(LS 235-236)。

カテケージスは典礼と並んで、キリスト者らしく生きるためのトレーニングの場となります。インテグラルエコロジーの観点からいえば、他者とのかわりをもちつつ、自然と直接つながることを促すよう求めるのです。

環境問題が、信者ではない人にキリスト教信仰をのべ伝える最初の機会ともなる、という事実を過小評価してはなりません。ともに暮らす家を大切にすることに敏感な人の多くは、人道的懸念、正義への渇き、また、将来に対する具体的不安に突き動かされます。信仰者のこうした共同の事業における積極的な協力は、エコロジーの分野においても主の弟子たちを動機づける *magis* (もっと) をあかしするために聖霊がお与えくださる好機でありえるのです。

参考資料

『カトリック教会のカテキズム』 279-314 (創造主なる神)、337-349 (見える世界の創造)、2402-2406 (財貨は万人のためにあるという原理)、2415-2418 (被造界の保全の尊重)、2419-2449 (教会の社会教説、経済活動と社会正義、国家間での正義と連帯、貧しい人々への愛)。

教皇フランシスコ「カテケージス国際会議参加者へのあいさつ (2013年9月27日)」。

同使徒的勧告『福音の喜び (2013年11月24日)』第4章 (*Evangelii Gaudium*)。

同『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』第2章、213-217 (*Laudato Si'*)。

実践例

地方教会は、信仰の観点からのインテグラルエコロジーを紹介する、カテケーシスのプログラムや資料をいくつも提案してきました。なかでも、GCCM（現ラウダート・シ・ムーブメント）が発行した小教区のための手引書『エコな小教区への手引き——ラウダート・シを生活に生かす』（*Eco-parish Guide: Bringing Laudato Si' to life*）が挙げられます⁴⁷。

「新しい生き方のための教区間ネットワーク（*Rete interdiocesana Nuovi stili di vita*）」のために幾年間か取り組んできた、イタリアのいくつかの教会関連団体の経験も挙げられます。キリスト者の共同体の中で被造物ケアに対する関心を育てるために、個々の教区での生活において、通常の司牧手段を用いつつ、知識を経験にリンクさせようとするネットワークです。これはカテケーシスやキリスト者の養成の柔軟な手段で、さまざまな脈絡における適用が可能です⁴⁸。

米国司教協議会は、さまざまな方法で『ラウダート・シ』を推進してきました。中には、司祭や助祭用のものも含め、情報や資料の提供、インテグラルエコロジー研修の企画を目的とした、「小教区でのラウダート・シ（*Laudato Si' in the Parish*）」プログラムなどがあります

2019年、南部アフリカ司教協議会（SACBC）は、「神と人類と全被造界への奉仕による共同体の福音化」と銘打った司牧計画を採択しました。そこでは、カテケーシスには、もっとも早い段階から、被造界という贈り物と、神から託された環境を大切にする責務についての題材を盛り込むべきだ、と述べられています。この計画はまた、小教区、とりわけ司牧的奉仕に従事する人々に対し、被造物を大切にするることについてのトレーニングコースを推進

47 <https://catholicclimatemovement.global/eco-parish/> 参照。

48 <https://reteinterdiocesana.wordpress.com/rete/> 参照。

してもいます⁴⁹。

ベロオリゾンテ大司教区では、回勅『ラウダート・シ』のメッセージを広めようと、2016年以降、回勅の文章が宗教教育プログラムの中に含まれています。

いくつかの勧め

1. 福音宣教とキリスト者の養成において、^{クレド}信条の第一節を味わう時間を取り、創造の神学の正しい理解の基準点にすることが不可欠です。

2. カテケジスのため、また信仰にかなった生活のために発展させるべき中心的な神学概念として、次の点を提示しておきます。

a) 聖書の知恵の記述にある創造の神秘は、驚嘆と感嘆の念を呼び起こします。

b) 神は全能の父また創造主であり、イエス・キリストにおける、そして聖霊における神とのわたしたちの関係性が、わたしたちのしかるべき役割を認識させ、わたしたちの中に神への畏敬のたまものを目覚めさせます。

c) 「被造界」は「自然」以上のものです。この認識が、人間に、世界と被造物を所有されるべき財産としてではなく、尊重され世話され重視されるべき神のたまものとして受け止められるようにしてくれます。

d) 男も女も人間は、被造界の頂点であり、園の管理人です。このことが人間に対し、他の被造物とは異なった役割を担わせるのなら、それはまた、責任ある管理人であるよう、そして例の歪んだ人間中心主義に屈しないよう求めてもいるのです。

e) 被造界はその究極の完成に「向かう途上」にあります。このことは、悪の神秘と人間の自由の意味について内省するよう、わたしたちを導いてくれます。わたしたちの自由は、ポジティブな進化に向けて知的に貢献するという課題を背負う一方で、新たな諸悪をもたらす傾向をも有して

49 <https://www.sacbc.org.za/wp-content/uploads/2018/10/SACBC-Pastoral-Plan.pdf> 参照。

います。

f) 被造界の長子であるイエス・キリストは、父なる神からたまわった道であり、この世界の変容を待ち望みながら、人間が、聖霊の力の中で、全被造界との友愛に満ちた関係をもって、生きていくための道です。愛ゆえに人間となられた神の御子への信仰は、キリスト者が敬意をもってこの世の現実に向かう神学的な理由です。

3. カテケージスにおいては、エコロジーのもつ倫理的意味を、『カトリック教会のカテキズム』の第3章に明記されているとおり、教会の道徳的教えという、より広い文脈の中で提示すべきです。

4. カテケージスは、問題の否定、無関心、安易なあきらめ、技術的な解決法の盲信などの、個々人や共同体の生活における障害を責任をもって見定めることができるよう支援すべきです。

5. カテケージスは、エコロジカルな均衡のあらゆるレベル——内的、対外的、自然的、霊的な——での回心への刺激となりえます。

6. カテケージスは、神の創造のみわざである被造界の管理をゆだねられた者としての召命意識を高めることにより、あらゆるレベル——個人のライフスタイル、共同体の新たな実践の提案、積極的な市民性、国内組織や国際機関での社会的・政治的献身——で、ともに暮らす家を大切にす行動を断固として取るようキリスト者を励まします。



エキュメニカルな対話

「カトリック教会以外でも、他教派や他教団が——また他の諸宗教も——わたしたち皆が気にかけている問題について、同じく深い懸念を示し、貴重な省察を提示してきました。一つの顕著な例を示すべく、完全な教会的交わりへの希望をともにしている親愛なるヴァルソロメオス全地総主教の声明について言及したいと思います」(LS 7)。

導 入

ともに暮らす家を大切にすることは、対話とエキュメニカルな協同にとって優れた枠組みとなります。1989年、コンスタンチノーブル全地総主教は、毎年9月1日を「被造物の保護のための祈願日」と定めました。聖公会と改革派教会世界共同体(WCRC)と世界教会協議会(WCC)は、9月1日から10月4日の間を「被造物の季節(Season of Creation)」としています。2016年に、教皇フランシスコは、毎年9月1日に祝う「被造物を大切にす世界祈願日」を制定し⁵⁰、2019年には、こうした記念日が、正教会と、また他教派や他教団とも交わりを深めるものとなり、WCC主催の取り組みに沿って祝われることを望み、教会で「被造物の季節」を祝うよう促しました⁵¹(訳注:日本のカトリック教会では「すべてのいのちを守るための月間」として取り組む)。

現在、相異なる教会に属するキリスト者が、祈り、意識化、教育、具体的

50 教皇フランシスコ「被造物を大切にす世界祈願日制定に関する書簡(2015年8月6日)」。

51 同「被造物を大切にす世界祈願日メッセージ(2019年9月1日)」。

取り組みを通して、現今の環境危機に対して協力しています。これは、わたしたちが分かち合っている一致を経験させてくれる、「ともに歩んでいく」ことの見事な事例です。こうした協同は、司教協議会や教区のレベルでつねに促進されるべきものでもあります。

参考資料

聖ヨハネ・パウロ二世／コンスタンチノーブル全地総主教ヴァルソロメオス一世「共同声明（ベニス、2002年6月10日）」。

教皇ベネディクト十六世「2010年世界平和の日メッセージ“平和を築くことを望むなら、被造物を守りなさい”（2010年1月1日）」。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』7-9、14、63、64、111、216、222 (*Laudato Si*)。

同「被造物を大切にする世界祈願日制定に関する書簡（2015年8月6日）」。

教皇フランシスコ／モスクワおよび全ロシア総主教キリル「共同声明（キューバ、2016年2月12日）」11、17。

教皇フランシスコ／コンスタンチノーブル全地総主教ヴァルソロメオス一世「被造物を大切にする世界祈願日共同メッセージ（2017年9月1日）」。

教皇フランシスコ「国際シンポジウム“緑多きアツティカに向けて——惑星地球の保全とその住民の保護”（アテネ、2018年6月5-8日）にあたっての、全地総主教ヴァルソロメオス一世あてメッセージ（2018年5月28日）」。

実践例

「被造物の季節」に関しては、エキュメニカル運営委員会——教皇庁総合人間開発省、GCCM（現ラウダート・シ・ムーブメント）、世界教会協議会（WCC）、その他で成る——が、ウェブサイト [Season Of Creation.org](http://SeasonOfCreation.org) を運営し、毎年、この季節の祝いにふさわしい資料を提供してくれています。エキュメニカル運営委員会は、「キリスト教一致祈禱週間」をモデルに、年ごとのテーマに沿った祈りや、被造界のケアに資する具体的行動のための共通の資料を地方

教会に提供してくれています。

2016年の四旬節、ブラジルのキリスト教会協議会は「共通の家、わたしたちの責任」というテーマの友愛キャンペーンを繰り広げました。このキャンペーンの主要文書の全体にわたって『ラウダート・シ』が盛り込まれ、四旬節の期間中、参加教会は、回勅から取られたテーマを扱うトレーニングコースを組織しました。同年の枝の主日には、社会・環境関連のさまざまな取り組みを支援するエキュメニカルな献金が呼びかけられ、エキュメニカル連帯基金の設立という実を結びました。このエキュメニカルな友愛キャンペーン2016には、ブラジル司教協議会、ブラジル福音ルーテル教会、ブラジル聖公会、長老派教会連合、シリア正教会のほか、福音宣教と普通教育の事業を行うエキュメニカルセンター（CESEEP）、ブラジル・ワールド・ヴィジョン（訳注：米国で設立されたキリスト教系国際NGO）、ブラジル・バプティスト連盟も加わりました。

ドイツにおける MISEREOR（訳注：アフリカ、アジア、アメリカの貧困撲滅のための開発協力を行う、ドイツ司教協議会の事業）や Brot für die Welt（訳注：「世界へのパン」の意味。ドイツのプロテスタント教会の運営する食料問題国際機関）のように、権利擁護やキャンペーンなどにおける協同は、さまざまな教派に属するキリスト者が存在している国々で見られます。南アフリカにおけるエキュメニカルな協同は、政策関連の問題、経済、多国籍企業の国内活動の研究に従事するNGO、ベンチマークス財団（Bench Marks Foundation）の設立につながりました。この財団は、数々の調査報告書を作成し、権利擁護に携わっています。

教皇と全地総主教ヴァルソロメオス一世は、2017年9月1日付の「被造物を大切にす世界祈願日」に共同メッセージを発表しています。「神の被造物に対する共通の危惧と、地球は共有財産だという認識によって結ばれているわたしたちは、9月1日を環境のために祈る日とするよう、すべての善意の人に心から呼びかけます。この機会にわたしたちは、被造物というすばらしい贈り物を与えてくださったことをいつくしみ深い創造主に感謝すると同時に、被造物を未来の世代のために大切にし、守護することを約束します。つまるところ、主が傍らにいてくださらなければ（詩編127参照）、また、わ

わたしたちの考察や賛美の中心に祈りがなければ、労苦はむなしいことをわたしたちは知っています。わたしたちの祈願日の目的は、自然界とのかかわり方を変えるために、自然界の受け止め方を変えることです。この提案は、わたしたちの生き方を思い切ってさらに質素で連帯あるものにする勇気をもつためのものです。』。

被造物を大切に作る祈願日にあたって、イタリアの司教協議会は、社会問題・労働・正義・平和委員会と、エキュメニズム・対話委員会の2つの委員会によって作成される年ごとのメッセージを出しています⁵²。

いくつかの勧め

1. キリスト教の諸教会と諸教派で、断食、巡礼、セミナー、投資引揚げや再投資のキャンペーン、共同プロジェクトの資金調達、等々の具体的提案を通じて、インテグラルエコロジー関連のエキュメニカルな協同を強化しましょう。

2. 「被造物を大切に作る世界祈願日」(9月1日)や「被造物の季節」(9月1日~10月4日)に、諸教会・教派と合同祈禱会を企画し、継続しましょう。

3. 人道的な協同や開発(たとえば水の入手)の具体的プロジェクトの実施に向け、諸教会・諸教派と協同して、被造物への配慮に関する啓発運動や教育活動を推し進めましょう。

52 <https://lavoro.chiesacattolica.it/category/ambiti/> 参照。

宗教間対話

「生態学的危機の複雑さやその原因の多様性に鑑みれば、解決策が生まれるのは、現実を解釈し変容させるたった一つの方法からではない、ということに気づかなければなりません。さまざまな民族が有する多彩な文化的富、芸術や詩、内的生活や霊性に対しても敬意が示されてしかるべきです。わたしたちが与えてきた損傷をいやしうるエコロジーを本気で開発するつもりなら、科学のいかなる部門も知恵のいかなる表現も除外されてはならず、それには宗教と宗教特有の言語も含まれます」(LS 63)。

導 入

共有した価値を土台にし、エコロジカルな責任を担う社会秩序を、さまざまな宗教団体の信者が力を合わせて増進させることは、喫緊の課題です。さまざまな宗教団体の気候変動に関する宣言は、その多くの例の一つです⁵³。

『ラウダート・シ』の中で教皇フランシスコは、ともに暮らす家を大切にするためにあらゆる宗教と対話することの緊急性と重要性を強調しています(LS 7、14、63、64、111、216、222 参照)。教皇はまた、生態学的危機は本質的に

53 「今こそ行動の時——気候変動に関する仏教徒の宣言（2015年5月14日）」(*The Time to Act is Now: A Buddhist Declaration on Climate Change*)、「仏教徒から世界の指導者たちへの気候変動に関する声明（2015年10月29日）」(*Buddhist Climate Change Statement to World Leaders*)、「世界の気候変動に関するイスラーム宣言（2015年8月18日）」(*Islamic Declaration on Climate Change*)、「気候変動に関するヒンドゥー教の声明（2015年11月23日）」(*Hindu Declaration on Climate Change*) 参照 (Lynn Whitney, *Faith Based Statements on Climate Change*, 2012 所収)。

は靈的な問題であって、それを解決するには宗教間対話が不可欠である、と論じています。環境破壊への憂慮には、諸宗教を貫く次元があります。諸宗教の有する知恵は、わたしたちの星の荒廃を克服するのに必要な、ライフスタイルの変化をもたらす助けとなりえます。「わたしたち人間は、被造物一つ一つに向けられる神の愛によって結び合わされつつ、驚きに満ちた巡礼をともにする、兄弟姉妹として集められています。その愛はまた、兄弟なる太陽、姉妹なる月、兄弟なる川、母なる大地への柔和な情愛によって、わたしたちを一つにしてくれます」(LS 92)。人間と自然とがつながり合い支え合っているという事実は、すべての人が一緒になって、社会階級や信条、人種や文化の違いを超え、現在また将来世代のために、わたしたち家族の家の健全性を守るために働くよう招きます。こうした展望が理解されるよう、皆にわたしたちの共同責任を思い起こさせなければなりません。

参考資料

聖ヨハネ・パウロ二世、「1990年世界平和の日メッセージ“創造主である神とともに生きる平和、創造されたすべてのものとともに生きる平和”(1990年1月1日)」。

教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛(2009年6月29日)』48、51 (*Caritas in Veritate*)。

同「2010年世界平和の日メッセージ“平和を築くことを望むなら、被造物を守りなさい”(2010年1月1日)」。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に(2015年5月24日)』7、14、63-64、111、216、201、222 (*Laudato Si'*)。

同「被造物を大切にする世界祈願日メッセージ(2015~2019年9月1日)」。

アジア司教協議会連盟(FABC)『被造界の責任ある信託管理に向けて——アジアのキリスト教のアプローチ(2015年)』(*Towards Responsible Stewardship of Creation. An Asian Christian Approach*)。

教皇庁[キリスト教一致推進評議会内]ユダヤ人との宗教関係委員会／カトリック教会との関係担当のイスラエルのチーフラビ代表団「被造界と環境

についての共同声明（2010年1月19日）」5。

教皇庁ユダヤ人との宗教関係委員会「神のたまものと招きとは取り消されない（ローマ11・29）——カトリック・ユダヤ教関係に関する神学的問題についての省察（2015年12月10日）」46。

教皇フランシスコ「米州機構／ブエノスアイレス諸宗教対話研究所主催、教皇庁諸宗教対話評議会協賛によるバチカンでのシンポジウム参加者へのあいさつ（2016年9月8日）」。

教皇フランシスコ／アル＝アズハルのグランド・イマーム、アフマド・アル・タイブ共同文書『世界平和と共生のための人類の兄弟愛（アブダビ、2019年2月4日）」（教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん』に付録として所収）。

教皇フランシスコ「諸宗教と持続可能な開発目標（SDGs）会議の参加者へのあいさつ（2019年3月8日）」。

同シノドス後の使徒的勸告『愛するアマゾン（2020年2月2日）』106-110（*Querida Amazonia*）。

実践例

教皇庁諸宗教対話評議会は、生態学的危機に立ち向かうための宗教間対話の重要性を、他宗教の主要祝祭日に送る年ごとのメッセージの中で、また、対話と協同の必要性を取り上げる会議の中で、強調してきました⁵⁴。

ほかにも、宗教間対話を通じたインテグラルエコロジーの啓発促進のために、地方教会が企画する数多くの取り組みがあります。たとえばトルコ司教協議会は、環境問題において憂慮を抱いている正教会やイスラームの若者たちをも巻き込んで、ともに暮らす家を大切にするための祈りや活動を行う「ラウダート・シ・グループ（*Laudato Si' grubu*）」を立ち上げました。カナダでは、エドモントン大司教区が、インテグラルエコロジーに関する、エキュメニカルなまた宗教間の数々の活動を組織してきました⁵⁵。

54 <https://www.pcinterreligious.org/> および https://www.vatican.va/roman_curia/pontifical_councils/interelg/index.htm 参照。

55 <https://caedm.ca/Ecumenical>. 参照。

いくつかの勧め

1. 預言的、観想的、そして節度あるライフスタイルを奨励しましょう。
2. さまざまな宗教的伝統が有する聖典の助けも借りながら、人類と自然とのきずな意識を取り戻し、日常生活の中で表現しましょう。
3. エコロジカルな意識の向上と、近接して生活し働く他宗教の信者も巻き込む取り組みの促進とを目指した教育プログラムを共有することを通して、わたしたちの星の健やかさと持続可能性への関心を示しましょう。
4. 人類が一つになって全人的で持続可能な発展を追求するのに必要な普遍的な連帯を強調しながら、環境問題に対する宗教間の協同的な対処を促しましょう。
5. 新たな環境意識を支える諸価値の再発見を通じて、他宗教の信者たちとの積極的な取り組みの共有を推し進め、行動変容やライフスタイルの転換を促しましょう。

12

コミュニケーション

「彼（聖フランシスコ）は、被造界全体と心が通じ合っており、花々にさえ、まるでそれらに理性があるかのように、主を賛美するよう、説きました」（LS 11）。

導 入

教皇フランシスコは、このアッシジの貧者のように、驚嘆と感嘆をもって自然と環境に近づき、友愛と美の言語をもって世界について語るよう、わたしたち皆に呼びかけています。『ラウダート・シ』は、メディアの生態をテクノクラティック技術主義パラダイムとの関連で分析し、メディアやインターネットの遍在に憂慮の目を向ける（LS 47 参照）と同時に、エコロジカルな回心——短期的に利益を得、即座に結果を出すという考え方を超越するパラダイム転換（LS 181 参照）——を推し進めるためにそれらを用いる必要性を認識してもいます。「人格は、神との、他者との、全被造物との交わりを生きるために、自分自身から出て行って、もろもろのかかわりに加わればそれだけ、いっそう成長し、いっそう成熟し、いっそう聖化されます。こうしてすべての被造物は、創造の際に神が刻印なさった、あの三位一体的なダイナミズムを自らのものとし、あらゆるものはつながり合っており、そのことが、三位一体の神秘から流れ出る、かの地球規模の連帯の霊性をはぐくむよう、わたしたちを促すのです」（LS 240）。

専制君主的でゆがんだ人間中心主義の批判から、地球市民たるにふさわしい生き方に向けたエコロジカルな回心の呼びかけ（LS 216-221 参照）に至るまで、「関係の中にあること」やコミュニケーションということばが、「対話」

という語や「対話に参加する」という表現とともに、回勅を通じて繰り返されます。『ラウダート・シ』は、社会のつながりの中で五感を活用することを通して、人間と自然と被造界を結ぶ、^{インテグラル}全人的関係というビジョンを提示します。それは、不当な操作や搾取、「使い捨て」という発想を批判する、グローバルな視点を提供してくれます。「詰め込みや混乱につながる単なるデータの蓄積」は「一種の心の汚染である」(LS 47) と非難し、メディアという環境への配慮の必要性が強く主張されます。「今日の通信手段は、知識や感情の伝達や共有を可能にします。しかし、時にそれは、他者の苦悩や恐れや喜びに、また他者の個人的体験の複雑さに直接触れることを妨げます」(LS 47)。

ともに暮らす家への配慮とコミュニケーションへの配慮の間には大きな類似点があります。どちらもあらゆるものやあらゆる人との、交わり、かかわり、相互のつながりを土台としています。コミュニケーションは分かち合いです。ですから、倫理的、社会的、経済的、政治的、教育的なあらゆるレベルで、わたしたちがどれほど相互につながり合っているかを認識する必要があります。

コミュニケーションは必須のものであり、手段であり、生活環境です。それは、人間と自然の間の生態学的な議論の中心にあるもので、世代間の交流および諸価値の共有と継承のための舞台です。教皇フランシスコは、メディアそのものを一つの環境と捉え、デジタル環境や情報伝達環境について語っています⁵⁶。そのように情報伝達は、エコロジカルな回心が生じうる分野の一つなのです。ここでは、被造界の尊重が、コミュニケーションの倫理にとって不可欠な原則となります。まさにメディア関係者は、市民は消費者であるばかりでなく、地球という惑星の責任ある管理人でもあることを自覚させるために、人間の運命と自然環境とのつながりを思い起こさせ、それをアピールする任務を負っています。そのアプローチは、いわゆるフェイクニュースによって広まる偽情報とはまったく違います。コミュニケーションは、人々の考えに悪影響を及ぼす可能性があります。それはまた、エコロジカ

56 教皇フランシスコ「第48回世界広報の日メッセージ“真正な『出会いの文化』に資するコミュニケーション”(2014年1月24日)」。

ルな倫理を伝達し、議論、優れた実践、諸民族の経験と知恵、といったものを生み出し、収集し、放送し、広めることによって、また、あらゆるものは結びつき、つながっていることを再発見できるよう皆を助けることによって、エコロジカルな地球市民の涵養に資する公共の場や手段となることが出来ます。このようにしてわたしたちは、他者との交わりに入るように招かれるのです (LS 65 参照)。

参考資料

教皇庁広報評議会「広告の倫理 (1997年2月22日)」17 (*Ethics in Advertising*)。

聖ヨハネ・パウロ二世「一般謁見講話“環境破壊を防ぐ取り組み”(2001年1月17日)」。

教皇ベネディクト十六世「2010年世界平和の日メッセージ“平和を築くことを望むなら、被造物を守りなさい”(2010年1月1日)」。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に(2015年5月24日)』1、47-49、68、79、84、92、127、162、213-227 (*Laudato Si'*)。

同「被造物を大切にする世界祈願日設立に関する書簡(2015年8月6日)」。

同使徒的勧告使徒的勧告『キリストは生きている(2019年3月25日)』86-90 (*Christus Vivit*)。

実践例

『ラウダート・シ』のメッセージを適切に伝えるための第一歩は、だれもが読めるようにすること、つまり、多くの司教協議会や地元の教会によってすでになされているように、それぞれの言語に翻訳することを意味します。パキスタン(そこではウルドゥー語に訳されましたが)やエチオピアやバングラデシュでの例にあるとおりです。

『ラウダート・シ』関連の多くのデジタルネットワークが、インターネットを介して作られています。同回勅を理解し、学び、伝え、また、経験やよき実践例を分かち合うための資料を提供するウェブサイト (<http://www.laudato->

si.net/) や、エコロジカルな回心や地球市民たるにふさわしい生き方を押し進める回勅の精神に沿ったコミュニティの確立を目指す、「ラウダート・シ・コミュニティネットワーク」(<https://comunitalaudatosi.org/>) などがあります。

多くの司教協議会は、『ラウダート・シ』のメッセージを効果的に伝えるために最善を尽くしてきました。たとえば、米国司教協議会は、国内全土にさまざまな資料（手引き、ビデオなど）を配布し、2017年から2020年の司教団の計画の優先事項として「環境の劣化と、もっとも脆弱な人々の生活へのその影響に、とくに注意を払いながら、総合的なエコロジーについて教え、声を上げる」ことを採択しました。ほかにも、「ラウダート・シ推進プログラム」⁵⁷ や、日常生活の中での⁵⁸、家庭内での⁵⁹、また、ソーシャルメディアやブログ上のキャンペーン⁶⁰を通じての回勅の実践方法の普及に向けたさまざまな手段を挙げることもできます。

ポーランド司教協議会は、カリタスポルスカと GCCM（現ラウダート・シ・ムーブメント）と共同で、国内の小教区に数百万部の『ラウダート・シ』の祈りのパンフレットを配布し、2018年12月にカトヴィツェで開催された国連気候サミット（COP24）のために祈るよう促しました。

カナダ司教協議会も『ラウダート・シ』の手引き書⁶¹を発行しました。

2003年、マルタのカトリック教会は、被造界のケアのための委員会を立ち上げ、報道資料、ラジオ番組、会議などによる、さまざまな活動を促進しました⁶²。

2018年にウルグアイで立ち上げられた「聖フランシスコエコロジーグループ」は、モンテビデオのカトリック教会の社会奉仕部の支援を受けて、現

57 <https://www.usccb.org/issues-and-action/human-life-and-dignity/environment> 参照。

58 <https://www.usccb.org/issues-and-action/human-life-and-dignity/environment/upload/laudato-si-discussion-guide.pdf> 参照。

59 <https://www.usccb.org/issues-and-action/human-life-and-dignity/environment/upload/Laudato-Si-Bulletin-Insert.pdf> 参照。

60 <https://www.wearesaltandlight.org/blog> 参照。

61 <https://jesuitforum.ca/> 参照。

62 <https://church.mt/archdiocese/interdiocesan-commissions/interdiocesan-environment-commission/> 参照。

場での情報伝達や教育や諸活動を通じて、ともに暮らす家を大切にするための意識啓発を推進しています。

「グリーンアコード (Greenaccord)」⁶³ (訳注:ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『新千年期の初めに』)の精神で、メディア向けに環境問題について発信するNPOの提案するような総合的なエコロジーと地球市民たるにふさわしい生き方に関するジャーナリスト向けのトレーニングコースが、数多く企画されました。

2019年には、CIDSE (Coopération Internationale pour le Développement et la Solidarité 訳注:ブリュッセルに本部を置く、開発援助と連帯のためのカトリック系NGO国際協力連合)は、『持続可能なライフスタイルについてのジャーナリストのためのツールキット。執筆のヒント、アイデア、ビジュアル資料つき』という、ジャーナリストやメディア関係者のための手引書を5か国語で制作しました。これは、メディアが報道すべき諸課題が劇的なものであれ、希望ある前向きな表現を使うことによって、総合的なエコロジーを伝えるための資料です⁶⁴。

いくつかの勧め

1. 教育経験やよき実践例の共有と、SNS上の分かち合いや祈りのグループの奨励のために、回勅を普及させるウェブサイトを宣伝しましょう。
2. 交流、公的な会合、研修、協議を通して、メディア従事者の司牧的な養成を強化しましょう。
3. トピックの複合性や学際性を踏まえて、総合的なエコロジーと地球市民たるにふさわしい生き方に関するジャーナリストのためのトレーニングコースを企画しましょう。
4. 環境問題についてジャーナリストに情報を伝える役目を担う、教会関係の組織の貢献を促し、強化しましょう。
5. さまざまな視聴者の関心を引きつつ、回勅に関する明確で網羅的で正確な情報を提供するよう、ワークショップやセミナーや協議を通じて、ジャ

63 <https://greenaccord.org/en/> 参照。

64 <https://www.cidse.org/2019/10/16/journalists-toolkit-on-sustainable-lifestyles-with-inspirations-writing-tips-and-visual-ideas/> 参照。

ーナリストや環境関連のメディアを促しましょう。

6. 環境危機の存在を否定するために意図的に作られた、誤解を招きかねないニュースの拡散を止めるため、真実の文化がジャーナリストの間で育つよう勇気づけましょう。

7. 虐待や公害や人権侵害を経験した人、あるいは、それらの事例にかかわりのあった人による証言の収集と拡散を支援し促進することで、声を上げられない人の代わりに声を上げることにかわりましょう。

第2部

インテグラルエコロジーと インテグラルな人間的発展



1

食と栄養

「食料を捨てるなら、貧しい人の食卓から奪うことになる」(LS 50)。

「世界人口の大半を養う、多岐にわたる小規模食糧生産システムがあります。それらは、小規模の農業区画であれ、果樹園や菜園であれ、狩猟や野生植物の採取あるいは小規模漁業においてであれ、わずかな土地や水を利用するだけで、生み出される廃棄物もわずかです。……公権は、小規模生産者や差別化生産を支援するために、明確で手堅い対策を講ずる権利と義務を有します」(LS 129)。

導 入

回勅では、食糧問題を広範なグローバル経済システムの文脈で捉え、不平等、多様性の欠如、環境への悪影響、消費主義的な生産モデルの席卷に起因するそのシステムの不備を強調しています。教皇は食品廃棄を「貧しい人々の食卓から盗む」不正な行為だと強烈に非難しつつ、一方で、食料と環境保護のための小規模農業システムが重要であるとはっきり認めています。このことに関して、遺伝子研究によって可能になったイノベーションを評価するには、小規模農業の生産者への影響を考慮しなければなりません。それゆえ、こうした複雑な問題により包括的にアプローチするためには、すべての利害関係者を含む率直な対話を通じて、それに取り組む必要があります (LS 133-135 参照)。

そのため、『ラウダート・シ』では、何よりもまず、各国政府に対し、多様で持続可能な農業、農村地域や国内・地域市場への投資、小規模生産者お

よび自然資源を保護する力のある企業間連携やコミュニティの組織化を促すために、国や地域レベルでの解決策を得るよう強く促しています。

とくに問題となっているのは、生産後の段階（収穫後、加工、貯蔵、輸送、販売）で発生する食品ロスであり、これが小規模生産者の収入に深刻な影響を与えています。このようなロスは、市場中心の食糧システムを過剰に開発した結果であり、総合的^{インテグラル}で社会的かつエコロジカルな人間開発へのアプローチを通じた取り組みが必要です。

最近の国際的な統計によれば、世界では肥満や低栄養の増加といった多岐にわたる栄養不良が報告されています。こうした状況から、健康的で、量的・質的・文化的に適切な栄養教育の推進が急務となっているのです。さらに重要なのは、土地や水に食料を依存している人々にもたらす環境劣化の影響を理解することです。

参考資料

聖ヨハネ二十三世回勅『マーテル・エト・マジストラ（1961年5月15日）』第3章、111-142（*Mater et Magistra*）。

聖パウロ六世「世界食料会議参加者へのあいさつ（1974年11月9日）」。

教皇庁開発援助促進評議会『世界の飢餓、皆の課題——連帯ある成長（1996年）』（*World Hunger, a Challenge for All: Development in Solidarity*）。

聖ヨハネ・パウロ二世「世界食糧デーへのメッセージ（2003年10月16日）」。

Joachim von Braun, *Agriculture, Food and Nutrition*（教皇庁社会科学アカデミー機関紙 Acta 16 “Crisis in a Global Economy – Re-Planning the Journey”, 2011 所収）。

国際カリタス論説冊子『気候変動が食料供給と地球に与える意味』（*What Climate Change Means for Feeding the Planet*, 2013）。

教皇庁正義と平和評議会『土地と食べ物』（*Land and Food: Libreria Editrice Vaticana*, 2015）。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』50、129、135、180（*Laudato Si'*）。

同「国際連合食料農業機関（FAO）第40回総会へのメッセージ（2017年7

月3日)】。

同「世界食料デーにローマ市にある FAO 本部訪問した際のあいさつ (2017年10月26日)】。

同「お告げの祈り前の講話 (2018年7月29日)】(『教皇フランシスコ講話集6』所収)。

同「FAO 第41回総会へのメッセージ (2019年6月27日)】。

実践例

カリタスインド／カリタスアジアは、長期の干ばつ、土壌の塩害、化学肥料や農薬の過剰使用、土壌の生産性喪失、輸出農業などの影響を受けたアジア地域で活動し、小規模農家に対して、計画立案、小規模統合農業、そして統合害虫防除についての最新の情報や技術の提供を行ってきました。また、持続可能な土づくりやパーマカルチャーの技術を用いた、水や土壌の保全のさまざまな対策によって、気候変動にも対処してきました。現地訪問の後、議論を重ね、現地での活動や、その地域の食料安全保障のためのアドボカシー活動などを含め、今後の行動計画を策定しています。

教皇の支援のもと、2013年から2015年にかけて国際カリタスによって展開されたキャンペーン「わたしたちは一つの家族、すべての人に食料を (One Human Family, Food for All)」の中心にあったのは、すべての人の食料確保の権利でした。このキャンペーン(訳注:カリタスジャパンでは反貧困キャンペーン「五つのパンと二匹の魚」として展開)は、食料への不平等なアクセスの是正と、食料の重要性(どこで、だれが、どのような条件のもとで生産したのか)についての意識啓発の促進を目指しつつ、一方で、食料廃棄の防止にも取り組んできました。このキャンペーンを通じて国際カリタスは、政府の指導者に対して、国際的な公約についての説明責任を果たし、食料アクセスを保証するための適切な政策を講じるように求めました。また同時に、世界各地のカリタスに対しては、たとえばガバナンスの問題や、市場、土地、生産資源へのアクセスなどについてもそれぞれの国の文脈で提言し、積極的に活動するよう促しました。

数々の司教協議会や地方教会は、開発と食の安全性促進プログラムを実施する多くの取り組みを行ってきました。なかでも、ルクセンブルク大司教区は、グアテマラ、ケニア、コンゴ民主共和国、カメルーンなどさまざまな国で、持続可能な建設によって、またとくに農村開発プロジェクトをもって、エネルギー効率を向上するための活動を推進しています。

2018年には、AEFJN（Africa-Europe Faith and Justice Network 訳注：EUとアフリカで活動する修道会・宣教会が加盟する、アフリカの正義のためのネットワーク。本部ベルギー）、AFJN（Africa Faith and Justice Network 訳注：米国とアフリカのカトリックの宣教共同体が加盟する、米国の責任ある対アフリカ政策についてカトリックの社会正義に立脚した提言を行う共同体）、AFSA（Alliance for Food Sovereignty in Africa 訳注：アフリカにおける食料主権とアグロエコロジーのための活動を行う、NGO、草の根運動、個人活動家のネットワーク）、SECAM（Symposium of Episcopal Conferences of Africa and Madagascar 訳注：1969年に開設された、アフリカとマダガスカルの司教協議会連盟）、RECOWA（Regional Episcopal Conference of West Africa 訳注：西アフリカ英語圏司教協議会連合 [AECAWA] と西アフリカフランス語圏地域司教協議会 [CERAO] によって2009年に設立された司教協議会連盟）が、CIDSE（Coopération Internationale pour le Développement et la Solidarité 訳注：ブリュッセルに本部を置く、開発援助と連帯のためのカトリック系NGO国際協力連合）の支援を受けて、土地と小規模な食料生産者に配慮する、わたしたちのかかわり方と責任に対する『ラウダート・シ』のアプローチにヒントを得た共同の刊行物を発行しました⁶⁵。

いくつかの勧め

1. すべての人の適切な食料への権利の実現を推進するとともに、食料の生産・流通・消費のサイクル全体の基礎として、その拡充を図りましょう。
2. 環境、雇用、労働の尊厳、合法性に配慮しつつ、おもに、エコロジカルな農業、牧畜業、自給漁業といった分野の、とくに家族単位で行われる小規模の生産者に適切な支援を行うことで、世界の食の安全に貢献しましょう。

65 https://www.cidse.org/wp-content/uploads/2018/11/EN-Joint_reflection_on_land_in_Africa_Oct_2018.pdf 参照。

3. 土地の所有と使用、漁業許可、種子購入、責任ある貸付、研修、保険、これらを適切に得る権利を（とくに女性と若者に対して）促進しましょう。そして、非食品や燃料の生産よりも直接食料を生産するための土地利用を優先し、土地の奪い合いや森林破壊に抗して、さらに、土着の多様な種子での栽培を推奨しましょう。

4. 農村の人々が自分たちの土地で生産量を増やせるように支援し、新しい技術習得のために研修を行い、コミュニティの組織作りと地域参画とを奨励し、環境、土壌の生物多様性、さまざまな自然資源の再生期間に配慮した食料生産を促進しましょう。

5. 気候変動へのレジリエンスと適応の手段として、たとえば、生産者協同組合、種子バンク、マイクロクレジット制度や分散型の研修、データの収集と調査の仕組み、地方コミュニティに役立つ情報交換、これらの促進を後押しすることで、農業景観の回復と保護や、持続可能な森林利用に投資しましょう。

6. 潜在的な食品ロスを可能なかぎり削減するために、地方と都市周辺地域とを、効率的なインフラを通じて商業拠点と結びましょう。

7. 農場にいる動物、とくに農作業や畜産に供される動物の扱いを改善しましょう。生産性と質に優れた担い手を養成し、彼らが、生産性を、つまり労働の質と収入を大きく改善させる、単純でありながらも効果的な方法によって、生産者、とくに最貧層の生産者を支援できるようにしましょう。

8. パーマカルチャー、アグロフォレストリー、小規模農業事業、有機肥料や有機農薬の生産といった、重要な先進分野に投資しましょう。土壌とそこでの微生物の多様性の向上にも、また花粉媒介種や特定の渡り鳥の種の保存、特定地域の砂漠化対策、こうしたものに資する多様性を生かした持続可能な農業にも投資しましょう。貧困国で伝統的に栽培されてきたさまざまな種子の保護、各地域の技術的、経済的、生態学的諸条件に適した種子の普及にも投資しましょう。

9. 大規模で高度に機械化された耕作を伴い、甚大な汚染をもたらす工業型農業事業を突き止め、それに抵抗しましょう。そうした事業は、人が摂取するに優先すべきとは考えられない農産物の生産を目的とすることも多々あ

り、しばしば不当に地域住民の土地を占拠したり、時には暴力的な立退きや大規模な森林伐採に手を染めたりするものです。

10. 遺伝子研究（遺伝子組み換え作物）による農産食品のイノベーションにかかわることになるすべての関係者での、制約のない議論を促進し、新たな洞察をもたらさう、独立した学際的な研究プロジェクトの数々に資金提供しましょう。

11. 公正な国際貿易システムを追求しましょう。それによって最貧国の農業が、原材料と加工品の両方の輸出を通じて強化され多様化されるようにし、貧困国の生産者にとって十分な高価格を保証し、貧困国で稼働する小規模生産者を、最富裕国の製品や、国内で事業を行う国外の大企業から保護できるようにしましょう。

12. 人類家族の食料安全保障を脅かすゆえに、食料への投機を制限しましょう。

13. 国際協力を通じて、違法漁業と無報告漁業に対策を行いましょ。

14. 自然災害、戦争、大規模な移住のあった地域にはとくに配慮し、種子や食料の入手を支援し、危機終息の折には、農村地域の復興のために、救助活動から復旧への移行までを確実にしましょう。

15. 食品廃棄物とポストハーベスト・ロスを削減するために、生産、流通、給食サービス網にも言及した、意識啓発、教育・協力プログラムの採用と普及を進めましょう。

16. 適切な食事——とくに妊娠中や幼少期の——について、意識啓発に努め、それが人間の発達全般に直接的な影響を与えることを教え、生産物、その産地、特性、伝統的な食文化に関するより適切な知識に基づいた、量的にも質的にも栄養価が高く健康的でバランスの取れた食事を推奨しましょう。

2

水

「安全な飲み水を手に入れることは、人間の生存に不可欠であり、また、それ以外の人権を行使する条件そのものであるため、基本的に普遍的な人権です」(LS 30)。

導 入

自然資源の枯渇は、先進国での持続不可能水準の消費量と関連があると回勅は明言しています。

飲料水は、これらの資源の中でもっとも重要なものです。それは、人間の生命および生態系の維持に不可欠であり、生き物や植物の成長、人々の衛生や病気の治療、また同時に、農業、牧畜、手工業、工業分野にとってもきわめて重要だからです。

世界人口の増加による水需要の増大は、気候変動と汚染によってますます激しさを増し、大きな課題として立ちはだかっています。汚染による水質悪化は、水が足りていないにもかかわらず水資源を民営化しようとする傾向と相まって、深刻な問題となっています。財貨は万人のために存在し、それゆえその使用は万人の権利であるという原理にのっとり、教皇は、飲用に適した安全な水の入手が不可欠で基本的で普遍的な人権であると主張しています。しかし今日でも、この権利は実際には、わたしたちの中のもっとも貧しい人々に対しては否定されており、国レベルでも国際的にも、十分に認識されておらず促進されてもいません。わたしたちの世界は、貧しい人々に対する膨大な社会的負債を抱えています。この負債は、いっそうの支援と、廃棄物を出さないようにする教育と意識啓発とによって返済されなければなりません。

せん。「水資源の私有化は水を得る権利という人権を侵害しており、決して許すことはできない」ということを踏まえ、わたしたちは、当面の利害やただただ功利主義的な現実の捉え方を超えて、共同プロジェクトや具体的な行動を早急に起こす必要があります⁶⁶。また、今後数十年のうちに、多国籍大企業による水の支配が大きな紛争の原因となることも考えられます。

すべてのキリスト者にとって、水は清めといのちの象徴であり、何よりも、永遠のいのちへと生まれ変わる洗礼の秘跡で使われるものです。イエスは、人間の渇きを永遠にいやす力のある水としてご自身を与えてくださいました。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」（ヨハネ7・37）。そして今度は、わたしたちの時代にあって渴いているすべての人に飲ませることで、ご自分に飲ませるようにと求めておられます。「お前たちは、わたしが……のどが渇いていたときに飲ませ（てくれた）」（マタイ25・35）。わたしたちが暮らす地球村において、このことは、個人の慈善的な振る舞いだけでなく、基本的な財である水がすべての人に行き渡るようにする具体的な選択とたゆまぬ献身をも求めています。

参考資料

聖ヨハネ・パウロ二世「世界食料デーにあたってのメッセージ（2002年10月13日）」。

教皇ベネディクト十六世「世界食料デーにあたってのメッセージ（2007年3月23日）」。

同回勅『真理に根ざした愛（2009年6月29日）』27（*Caritas in Veritate*）。

教皇庁正義と平和評議会『水。生命に不可欠なもの——世界水フォーラム（2003年京都／2006年メキシコシティ、2009年イスタンブール、2012年マルセイユ）時に寄せたメッセージ集』（英題 *Water. An Essential Element for Life*, Libreria Editrice Vaticana, 2013、ほか伊語でも発刊）。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に

66 教皇フランシスコ「被造物を大切にす世界祈願日メッセージ（2018年9月2日）」参照。

(2015年5月24日)』27-31 (*Laudato Si'*)。

教皇庁科学アカデミー「水に関する人権についてのワークショップ(科学アカデミー／La Catedra del dialogo y la cultura del encuentro 共催、2017年2月23～24日)最終文書(2017年2月24日)」。

教皇フランシスコ「被造物を大切にす世界祈願日メッセージ(2018年9月1日)」。

同「世界水の日にあたってのメッセージ(2019年3月22日)」。

同使徒的勸告『愛するアマゾン(2020年2月2日)』43-49 (*Querida Amazonia*)。

教皇庁総合人間開発省『アクア・フォンス・ヴィタ——貧しい人の叫び、地球の叫びの象徴、水についての手引き』(英題 *Aqua Fons Vitae. Orientations on Water*, 2020, <https://www.humandevlopment.va/en/risorse/documenti/aqua-fons-vitae-the-new-document-of-the-dicastery-now-available.html>)。

実践例

ブラジルでは、カリタスが家庭用飲料水と農業用水の入手のために活動し、食、健康、アクティブ・シチズンシップなど、その他人権の啓発の取り組みを行っています。目的としているのは、貯水池の設置による長期的な水利用の確保と、水管理やインフラの維持管理に関するセミナー開催による地域コミュニティの指導です。また、廃棄物を出さないようにするため、住民を教育したり定期的な視察や住民との会合を実施したりしています。その結果、農作物生産性、健康状態、社会福祉の向上などの成果が得られました。

ブルキナファソでは、国家の水計画の枠組みの中で、カリタスブルキナファソ(OCADES)が、農村部の住民の間で不公平になりがちな飲料水の確保を目指しています。OCADESは地域のコミュニティと緊密に連携協働し、手動ポンプの維持・修善を支援し、健康被害を軽減するためのインフラを構築、また、女の子たちのための教育プログラムも運営しています。10年間にわたって、カリタスフランスが共同出資したプログラムにより、10の地方自治体の5万人以上の人々が、飲料水の供給、保健医療、環境教育を受けられるようになり、目覚ましい成果を上げています。合計で、新たな井戸の採

掘 60 以上、古い井戸の修復 200 以上、家庭用トイレの設置 5,000 以上、植樹 10,000 本以上、水関連の技術者養成 200 人以上、利用者団体の設置 500 以上となりました。教会のプログラムは、プロジェクトの実現において社会的な結束力を強め、基本的な社会的サービスの利用を通じてよりよい未来をともに創造することを目的としています。これに向けて、ムスリム、キリスト教徒、アフリカの伝統的な宗教の信者が、建設的な対話を続けつつ、合同のプロジェクトを運営しています。カリタスブルキナファソは、インテグラルな人間的発展を促進するため、こうした努力を続けているのです。

コンゴの司教協議会は、『ラウダート・シ』を導入するために数多くの活動を行ってきました。その中には、この重要な水資源や多様な汚染源についての研究開発や、カリタスコンゴによって推進されている特別プロジェクトの実施を含め、飲料水に関するものもあります。

水に関する開発プログラムを推進するために、司教協議会や地方教会が主導する取り組みは数多くあります。たとえば、スロバキアの教会はカリタスと協働し、シリアとイラクで飲料水を提供したり、避難民の帰還を促すために井戸を掘ったり家屋の再建をしたりしています。

2019 年、スペイン司教協議会の正義と平和協議会は、飲料水の使用に関する啓発のために #ConectAguaPobreza キャンペーンを開始しました⁶⁷。

いくつかの勧め

1. 責任ある消費を奨励し、水の再使用を促進するために、水の貴重さに関する教育や啓発プログラムを採用しましょう。

2. 飲用だけでなく、衛生・調理・家事・農業用の水の入手を確実にしましょう。そのようにして、水へのアクセスについてのより幅広い考え方を広めましょう。

3. 地域社会が、自分たちの需要を見極めて適切な管理体制を導入し、継続的な水質管理を実行し、雨水を貯水し、灌漑用・家庭用・下水用の水のイ

67 <https://www.enlazateporlajusticia.org/agua/> 参照。

ンフラを維持する技術を向上させることで、水の自給に責任をもって取り組めるよう支援しましょう。

4. 安全で信頼でき、かつ利用可能で手ごろな価格の飲料水の持続的供給をすべての人に保証する、国レベルでの意思と手段を強化しましょう。

5. 使い捨てプラスチックの使用を最小限にとどめるために、再利用可能でかつ健康リスクのない飲料用容器などのエコロジカルな技術を用い、持続可能な水消費モデルを後押ししましょう。

6. 飲料水の入手に、個人所有の技術的な処理（脱塩等）が必要な場合には、その仕組みの分配とコストが公正かつ倫理的な基準に基づいて確定されるようにしましょう。

7. 基本的に普遍的な人権としての飲料水アクセス権の法制化を、国際条約や国内法制度によって進め、その施行に努めましょう。

8. すべての人に、料金を支払えない人に対しても、水の供給が保証されるように、料金表を設定し、地方行政を適切化しましょう。

9. 大量の水の浪費を回避する「点滴」^{かんすい}灌水を支持しましょう。

10. 河川、海洋、地下水に影響を及ぼす水質汚染の防止に努めましょう。

11. 生態系と農村開発を保護するために、廃水を正しく処理し、できるだけ多くを再生させましょう。

12. 水路周辺に建設予定の水力発電や産業プロジェクトが、水循環や生物多様性に与える悪影響を評価したうえで、被害を未然に防ぐ適切な対策を講じましょう。

13. 水資源の争奪を巡る紛争については、人間の尊厳に基づく優先順位を考慮した解決策を提示しましょう。



3

エネルギー

「世界的には、クリーンで再生可能なエネルギーの利用はごくわずかです」(LS 26)。

導 入

教皇はしばしば、エネルギーへのアクセスについての考えを述べますが、そこでは、この重要な資源の消費を制御しうる条件にも言及しています。経済的・量的にアクセス可能かどうか、設備の高度化が利用者の能力や実際のニーズに見合っているかなどの判断も含んでいます。教皇フランシスコはまた、クリーンで再生可能なエネルギーの特性を力説しています。これは、エネルギー資源関連の諸活動（抽出や変換、輸送、保管、消費）が社会（不平等や社会不安そして健康という観点で）や環境（地域および地球レベルでの、とくに気候に係る大気、水質、土壌の汚染）に及ぼしている、また及ぼしたであろう影響についての懸念が高まりつつあり、実際そのとおりだからです。

『ラウダート・シ』は、汚染性の高い化石燃料の使用を前提としたテクノロジーを世界レベルで「遅滞なく着実に」置き換える必要があると力説しています (LS 165 参照)。エネルギーシフトは、実際に現在進行中で、化石燃料は徐々に再生可能エネルギーに置き換えられています。それでもまだ、使用されている化石燃料のごく一部にしかすぎません。この必要不可欠なエネルギーシフトがさらに進展するまでは、もっとも貧しい国々が不釣り合いな経済的負担を課せられることのないように、有害性の低い代替エネルギーを選んだり、関連コストの配分についての短期的解消策や、公正な基準を見いだしたりすることは正当なことです。

アフリカの一部やいくつかの島では、住民の大多数、また機能的建造物（学校や医療施設を含む）の多くはいまだに電気が使えず、灯油ランプを使用しています。エネルギーへのアクセスについて考えると、この資源がどのように使用されているのかと問わずにはられません。

再生可能エネルギー資源を基本とした、安全で入手しやすく、手頃な価格の、効率的なエネルギーシステムを構築することで、貧困層のニーズにこたえつつ、地球温暖化の抑制が可能になります。このようなエネルギーシステムは、地域レベルで、気候変動の原因抑制と、気候変動が現在および将来に及ぼす影響に対するレジリエンスの強化に、確実に貢献することができます。

参考資料

聖ヨハネ・パウロ二世「教皇庁科学アカデミー主催スタディウィーク“エネルギーと人間——ニーズ、リース、希望”参加者へのあいさつ（1980年11月14日）」。

教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛（2009年6月29日）』49（*Caritas in Veritate*）。

教皇庁正義と平和評議会『エネルギーと正義と平和——開発と環境保護の現況からのエネルギー考察』（英題*Energy, Justice and Peace: A Reflection on Energy in the Current Context of Development and Environmental Protection*, Libreria Editrice Vaticana, 2014）。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』26、164、165、180、211（*Laudato Si'*）。

同「アスタナ万博でのパチカン・ナショナルデー参加者へのあいさつ（2017年9月2日）」。

同「教皇庁自然科学アカデミー／ノートルダム大学共催パチカン非公開会議参加の石油・天然ガスおよびその他エネルギー関連主要企業経営陣の謁見時のあいさつ（2018年6月9日）」。

同「教皇庁総合人間開発省主催会議“エネルギー転換と、わたしたちの共通の家を大切にすること”参加者へのあいさつ（2019年6月14日）」。

実践例

無公害エネルギーにすべての人がアクセスできるようにするために、多くの地方教会は地域コミュニティと協働し、エネルギーの創出と消費のサイクル全体と、またそれらの設備の維持管理と長寿命化に注意を払っています。これらの取り組みからはしばしば、クリーンエネルギーを供給するための長期的パートナーシップが生まれ、またそうしたエネルギーをもっと必要としている他の地域でも、同じく生産可能な方法が生み出されています。

フィリピン司教協議会の信徒委員会は、WeGen Laudato Si' 社（訳注：『ラウダート・シ』から生まれた、フィリピンの次世代型再生エネルギー企業。フィリピンとベトナムで展開）との覚書に署名し、国内の教会施設や貧困地域での再生可能エネルギー、とくに太陽光の利用を支持しています。その関連でこのプロジェクトは、教皇フランシスコの教えと『ラウダート・シ』の教えを広めるための情報の発信・共有・展開も推進しています。フィリピンのマーシン教区は、全小教区にソーラーパネルを設置した、世界で初めての教区となりました。WeGen Laudato Si' 社^{フィジビリティ・スタディ}によって実施された実現可能性の事前調査を経て、教区の建物にはソーラーパネルが設置されました。設置は無料でしたが、小教区は7年から15年の間、電気代の節約額に応じて毎月の料金を支払います。また、このプロジェクトでは、特別な仕組みを使って、余剰エネルギーを他の教会施設とシェアすることも可能になっています。

イングランド・ウェールズ司教協議会は、前世紀末より、Inter-Diocesan Fuel Management Ltd.（訳注：英国とウェールズの教区に供給するガス、電気、石油、バイオマス等を購入するための、カトリック教会が運営する1994年設立の非公開有限会社）が推進する「教区グリーンエネルギー調達プロジェクト」を実施しています。このプロジェクトは、イングランドとウェールズの教区内にあるさまざまなカトリック施設による、再生可能エネルギー源の利用促進を目的としています。

2015年、オーストリアでは一部の教区が、持続可能性に関する行動指針に沿って、化石燃料を段階的に廃止し、認証を受けたグリーン電力を購入す

るという重要な決定を下しました。

2017年、カリタスイングランドウェールズ（CAFOD）は、いくつかの提携団体とともに、非常に貧しい状況でも採用できる持続可能エネルギー利用の方法を開発し、提案しました。これは「エネルギー配給モデルツールキット（the Energy Delivery Model Toolkit）」として知られており、イシオロ教区（ケニア）には、現地カリタスとの協働によってこれが導入されています。診療所にはソーラーパネルとバッテリーが設置され、電気供給によって夜間でも明かりをとめて診療ができるようになりました。このようにして発電された電力は、浄水システムにも供給されています。

聖地エルサレムでは、教皇庁パレスチナ援助事業と CNEWA（Catholic Near East Welfare Association 訳注：米国ニューヨークに本部を置く教皇直轄の事業。教皇庁パレスチナ援助事業の運営にもあたる）が、多数の太陽光発電所を設置して発電を行っています。

また、コルカタ大司教区（インド）のように、教区事務局、小教区、小規模なキリスト教共同体や学校で、太陽光パネルによる電力利用が選択された例もあります。レジャ教区（アルバニア）では、祈願者修道会の司祭たちが、NGO の VIDES（訳注：サレジアンシスターズから生まれた国際ボランティア団体）と協力して、太陽光発電所の設置や再生可能エネルギーに関する研修コースの開催に向けさまざまなプログラムを実施しました⁶⁸。

2018年、CIDSE（Coopération Internationale pour le Développement et la Solidarité 訳注：ブリュッセルに本部を置く、開発援助と連帯のためのカトリック系 NGO 国際協力連合）のネットワークは、スイス、コンゴ、ブラジル、ベルギー、ポルトガル、ケニアの6つのストーリーをまとめたドキュメンタリー「Energy to Change」⁶⁹を制作しました。この作品では、さまざまな状況で、そのあらゆる段階（生産から流通・消費に至るまで）において、持続可能エネルギーのシステムが構築可能であることが紹介されています。

68 <https://progettoalbania.rcj.org/inaugurazione-impianto-fotovoltaico-allospedale-regionale-di-lezhe-e-benedizione-della-prima-pietra-della-palestra-della-nostra-scuola-29-maggio-2019/> 参照。

69 <https://www.cidse.org/2018/10/15/energy-to-change/> 参照。

一方、バチカン市国では2008年に、パウロ六世ホールの屋根に高性能の太陽光発電システムを設置し、発電された電力を送電網で送電しています。その2年後には、バチカンの別の場所に、太陽エネルギーを熱エネルギーと冷却エネルギーに変換するための太陽熱集熱器を備えた2基目のプラントが設置されました。このようにして、バチカンの従業員食堂の空調には、冷却水循環システムが使用されているのです。

いくつかの勧め

1. 電力が入手できない人々や、健康や環境に害となる方法でエネルギーを使用せざるをえなくなりがちな人々の状況に対処しましょう。

2. すべての人が利用可能なエネルギーへの移行を、決意をもって押し進めていきましょう。健康と環境への影響ができるだけ少ないエネルギー、種類や出力の面で用途に適したエネルギー、種類や量において、インテグラルな人間の発展に貢献する使用法すべてに適したエネルギー、地域社会の権利と声を大切にすエネルギーです。

3. しかるべき技術的・行政的制御のもと、さまざまな地域共同体や各世帯の責任感を高める寿命の長いインフラや設備によって、再生可能エネルギーによる分散型エネルギーシステム（小規模電力網^{マイクログリッド}）を推進しましょう。地域の文化を尊重し、ネットワークや行政組織に依存しすぎることなく、可能なかぎり地域共同体によって、発電設備の管理・維持が行えるようにしましょう。

4. 一人当たりの消費量が著しく多い国ではとくに、エネルギー効率に関してだけでなく、責任あるエネルギー消費に関しても調査研究と啓発に努めましょう。

5. 教会の建造物の新築あるいは改築にあたっては、可能なかぎり自然素材を生かし、エネルギー効率の高いシステムを使用するよう考慮しましょう。

6. もっとも脆弱な生態系や沖合での探査・採取活動を、とくに発展途上国において厳しく監視しましょう。人権侵害を防ぐため、また過失による水や土壌や大気の汚染を避けるために、必ず地元の人々に参加してもらいまし

よう。

7. 環境や住民にとって安全な、またプラント自体の安全性を担保する代替案を開発することで、炭化水素採取場で遊離天然ガスの焼却処分（余剰ガスフレア）を削減し、可能であれば完全に停止しましょう。

8. 広く利用可能な先進的なテクノロジーシステムを採用し、エネルギー分野だけでなく広く経済活動全般で脱炭素化を達成しうるエネルギーミックスを活用しながら、エネルギーの生産、輸送、流通、消費に伴う（地域あるいは地球規模での）汚染を大幅に削減しましょう。

9. エネルギーを手頃な価格で販売しましょう。販売利益を公平に分配し、また、関税やビジネスモデルがもたらす外部不経済も考慮しましょう。

10. エネルギーの浪費、各種機器の計画的な陳腐化、エネルギー効率の低い低品質の製品の供給、1 回限りの使い捨て品、これらに依拠した商業戦略を非難し放棄しましょう。

11. 燃料だけでなく乗り物のライフサイクル全体をも考慮して、無公害の輸送手段を推進しましょう。自転車、公共交通機関、各種カーシェアリングなどの交通手段の利用を促進しましょう。

12. エネルギー関連の諸活動が環境や人々の健康に及ぼす悪影響についての調査研究を継続し、その結果の周知に努めましょう。

13. エネルギー消費を削減するために、とりわけ地球上でもっとも裕福な諸地域で、ライフスタイルに関する選択を日々行うよう励ましましょう。

4

生態系、森林伐採、砂漠化、土地利用

「明確な境界線を定めて生態系の保護を確保する法的枠組みの確立が必要不可欠になっています。それをしなければ、^{テクノ・エコノミック}技術経済パラダイムに由来する新たな権力構造が、政治はおろか自由や正義をも押しつぶしてしまうでしょう。……種々の生態系の間には、またさまざまな社会集団の間には、一つの相互作用があり、それもまた『全体は部分に勝る』ことの証左です。……小規模生産者の利益を擁護し、地域の生態系を破壊から守ってくれる、協力体制やコミュニティ作りを助成することもできます」(LS 53、141、180)。

導 入

『ラウダート・シ』は明言しています。「この200年間ほど、皆がともに暮らす家を傷つけ、また虐げてきた時代はありません」(LS 53)と。そのうえでわたしたちは、「父なる神の道具となるよう呼ばれています。それは、わたしたちの星が、創造の時にお望みになられたものとなり、平和と美と充満へと向かう計画にかなうものとなるためです」(LS 53)。父なる神はご自分の被造物のための計画をおもちです。創世記は、世界という園を耕し守るよう、わたしたちを招きます。まことに、わたしたちは自分たちの生存に必要なものなら何でも、大地の豊かさからいただくことができますが、わたしたちはその資源を責任をもって大切にしなければならないのです (LS 67 参照)。

回勅は、国際関係上の倫理という点で、また北半球の国々が積み上げてきた南半球の国々に対するエコロジカルな負債という観点から、天然資源の過剰使用という問題を扱っています。開発途上国を廃棄物処理場や、有害廃棄

物の投棄場として利用するのと同様、原材料の採取が汚染を引き起こしたりしています。土壌や生物多様性の劣化、地球上の広範囲に及ぶ森林破壊、水質汚濁、景観の荒廃は、わたしたちがともに暮らす家である地球を搾取してきた人々の良心に深く受け止められねばなりません。

『ラウダート・シ』は、アパレシーダ文書を引用して「生命の源泉を不合理に破壊する経済組織の利害関心」(LS 54)について語っています。また、生物多様性への配慮や砂漠化対策が遅々として進まないことや、ひとたび特定の資源が枯渇すれば、新たな紛争地が生まれるという具体的なリスクを指摘しています。政治はこのシナリオを回避し、解消しなければなりません。変化と劣化の兆候があまりにも強烈であるため、「現今の世界の構造は、多様な観点から確実に持続不可能」であることを認めざるをえず、世界が「限界点」(LS 61)を超えて破局に至る可能性を危惧しています。

参考資料

聖ヨハネ・パウロ二世「アフリカ諸国司牧訪問時、ブルキナファソでのミサ説教(ワガドゥグ、1980年5月10日)」。

同「教皇庁科学アカデミー／スウェーデン王立科学アカデミー共催スタディウィーク“人間とその環境——熱帯雨林と種の保存”参加者へのあいさつ(1990年5月18日)」。

教皇庁科学アカデミー『(scripta varia シリーズ 84 号)人間とその環境——熱帯雨林と種の保存(スタディウィーク会議録)』(*Scripta Varia* 84, Vatican City, 1994)。

聖ヨハネ・パウロ二世「聖心カトリック大学主催会議“環境と健康”参加者へのあいさつ(1997年3月24日)」。

同「世界食料デーにあたってのメッセージ(2004年10月15日)」。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に(2015年5月24日)』53、141、180 (*Laudato Si'*)。

同「ブラジルの教会での友愛キャンペーンへのメッセージ(2017年2月15日)」。

CELAM(ラテンアメリカ司教協議会連盟)司牧書簡『宣教する弟子、共通の

家の保護者——回勅ラウダート・シに照らした識別（2018年1月25日）】。

アマゾン特別シノドス「最終文書（2019年10月26日）】。

教皇フランシスコ「教皇庁総合人間開発省主催の鉱業に関する会議参加者へのあいさつ（2019年5月3日）】。

同「国際刑法学会第20回国際会議参加者の謁見時のあいさつ（2019年11月15日）】。

同『愛するアマゾン（2020年2月2日）』28-40、47-52（*Querida Amazonia*）。

実践例

ナミビア司教協議会や、シエラレオネ、エチオピア、パキスタンあるいはパプアニューギニアの一部の教区が推進するような、森林再生の促進を目的とした多くの活動、適切な土壌管理のための取り組みや教育活動があります。

聖ヨハネ・パウロ二世のサヘル地域の砂漠化に対する懸念と、この地域の人々が十分な食料と水、そして尊厳ある未来を享受できるようにとの願いにこたえて、1984年にサヘルのために設立された「ヨハネ・パウロ二世基金」は、森林再生、アグロフォレストリー、^{かんがい}灌漑、砂漠化抑止対策などを通じて、サヘル9か国の生活環境改善のための活動を続けています。基金はまた、多目的利用の可能な校舎建設や井戸の設置、農民への必要な農機具提供の資金とされています。

ほかにも、教会の積極的なかわりを示すものとして、教会共同体が共同で流域を管理する地域ネットワークの構築があります。アマゾン川流域では、汎アマゾン教会ネットワーク（REPAM = Red Eclesial Panamazónica）が、アマゾン地域諸国の資源搾取と環境悪化の問題に対処する拠点となっています。2014年に、複数の司教協議会、修道会、カリタスによって設立されたREPAMは、創造的な司牧活動と預言的な社会・政治的ビジョンを組み合わせています。その活動には、政治的なアドボカシーと開発モデルの変革が含まれています。また、先住民族の文化に現存する生の神聖な次元の回復に基づく、倫理的で精神的な原則を用いた、生物多様性の保護も含まれています。この取り組み事例としては、コミュニティと地域を守るための「教会と鉱

業」(Iglesias y Minería 訳注：鉱業による環境問題や人権問題に取り組む、ラテンアメリカのキリスト教の諸団体のエキュメニカルなネットワーク)によるペルーでの活動や、鉱業が引き起こす劣化から地域を守るために宗教者や信徒が行っている努力が挙げられます。この模範に触発されて、アフリカのコンゴ川流域(REBAC 2015年設立の汎コンゴ川教会ネットワーク)、中米(REMAM 訳注：2021年設立の汎メソアメリカ教会ネットワーク)、アジア太平洋、南米コーノ・スールでも同様のプロジェクトが実施されています⁷⁰。

2009年、リマのアドリアーノ・トマシ補佐司教は、リマのパチャカマック地区で廃水処理の問題に取り組むプロジェクト「緑群(Manchay Verde)」を立ち上げました。廃水処理システムを通過した水が浄化槽に集められ、沈殿させた後にポンプで小型の植物浄化池(槽)にくみ上げられました。その結果、浄水が斜面から滴下して流れ、観賞用植物の灌漑に適したシステムとなりました。この試作モデルは透明な板材で作られているので、ガイドを伴った視察(とくに学校や地方自治体向け)やその他の教育活動を企画することができます。2019年までに、この「緑群」は、6ヘクタール(訳注：東京ドーム1.28個分)の灌漑用地に2,000本以上の樹木を植えました。リマの他の乾燥地域では、この経験にヒントを得た他のプロジェクトも開始されています。

2018年、アンゴラとサントメの司教協議会は、ナミベ州の砂漠に数百本の樹木を植える「ラウダート・シの森(Floresta Laudato Si')」という取り組みを開始し、他の地域でもこのプロジェクトの展開を目指しています。さらに、司教団の正義と平和と移住の委員会は、鉱業が住人や環境に与える有害な影響の緩和を目指した、鉱業界との対話に着手しました。

2016年から2019年にかけて、パキスタンの諸教区はカリタスと協力して、パキスタン全土で100万本の植樹を推進するキャンペーンを開始しました。また、そうした教区は、地域のコミュニティや地方自治体とともに、意識啓発活動やアドボカシー活動も行っています。

70 チリのパタゴニア地区にあるアイセン使徒座代理区の管理者、ルイジ・インファンティ・デッラ・モラ司教の活動にも言及したい。彼は氷河湖を脅かす水力発電所の脅威のために闘っている。モラ司教の司牧書簡「わたしたちの日ごとの水を今日もお与えください(2008)」(*Danos hoy el agua de cada día*)参照。

いくつかの勧め

1. 生態系と天然資源の有限性とに配慮した持続可能なライフスタイルと消費モデルを推進しましょう。エコロジカルな市民性の教育の普及を通じて、個人に対するものであれ集団に対するものであれ、搾取や酷使に断固として反対しましょう。

2. 汚染を招かず、かつ連帯を基盤とした、生産システムを推進しましょう。連帯経済のさまざまな経験は、環境の限界に配慮しつつ富を生み出す新しい多角的な生産モデルを構築するための指針となりえます。

3. 森林再生プロジェクトを推進しましょう。

4. 伝統的なコミュニティと先住民族、その人々が有する固有の人権や膨大な文化遺産、そして生物多様性の保全に関する彼らの知識を、土地の搾取、居住地破壊、知の盗用——彼らの知的財産が適切に保護されていない場合に類出する——から保護するための効果的な手段を見いだしましょう。

5. 自然災害の脅威に備える取り組みに力を入れ、環境災害の頻度や複雑さの増大への対応となるコミュニティのレジリエンスを維持しましょう。

6. 生態系の適切な管理、土地資源の持続可能な開発、村落の遺産の保護と地域住民の生活条件の改善を通じて、(a) 森林と泥炭地を有するコンゴ川流域の保護や、(b) サヘルとサハラの世界社会システムと自然体系のレジリエンス強化を目指す「グレート・グリーン・ウォール」など、多国間協力に基づく率先的な取り組みを支援しましょう。

7. 環境災害や天然資源の過剰利用の影響に苦しむコミュニティが、地域・国・国際レベルで、そうした問題を扱う意思決定プロセスに参加できるようにする取り組みを支援しましょう。

8. 生物多様性、地球の主要な生物群系、そこに暮らす人々を守る公正なルールを通じて、インテグラルエコロジーの倫理観を社会に実現する新たな国際的規制の枠組みを作り、誤った解決策を退け、地球上の生命の未来に資する真の変化を促しましょう。



5

海と大洋

「海洋管理システムにも言及しておきましょう。国際条約や地域協定は存在しますが、細分化された適応と、規制・取り締まり・処罰の厳格なメカニズムの欠如とが、そうした努力を台なしにすることになります」(LS 174)。

導 入

海や大洋などの「グローバルコモンズ地球公共財」の賢明な管理には、人間がその管理の複雑さに見合うガバナンスのシステムを備えることが必要です。

海洋はしばしば、地球の青い肺と呼ばれます。海洋は多くの活動や課題の交差点となっています。例として、港湾活動が行われ、観光船や商業船の航路が敷かれている場（食糧や消費財や原材料の輸送路）であり、塩や藻類などの資源はもちろんのこと、漁業資源（漁業・養殖による）や海流エネルギーと海底および下層土資源の利用・開発の場、データのやり取りや通信のためのケーブル敷設の場、科学研究、保護海域の種類別の境界設定の場、観光業の場、そしてむごい惨状になることもある難民／移民の移動の場であることが挙げられます。また、人身売買、海賊行為、違法漁業、そして、薬物や武器や偽造品を含むさまざまな違法取引などの対処すべき負の側面もあります。また忘れてはならないのは、緊迫した状況下（国家間の争奪戦から漁業紛争に至るまで）を含め、潜水艦や軍用船がさまざまな地域をパトロールする必要があることです。海洋の環境状態、とくに、水中や海の生物の体内に含まれるプラスチックやマイクロプラスチック、さまざまな汚染（船舶や、沖合での採掘活動が引き起こすものや、陸地から運ばれるもの）、酸性化、

種の絶滅やサンゴ礁地帯の荒廃につながる生物多様性の喪失に対する懸念もあります。港湾労働者、沿岸地域住人、小島嶼住民^{しょうとうしょ}、船員、漁師、彼らの労働・生活環境、海上埋め立てや海進（居住や淡水資源や農業にとって脅威となりうるもの）、相異なる漁法の競合もまた、懸念されています。

海洋関連の問題は、地政学的な緊張を招く可能性があるため、わたしたち人類家族の共通善を目的とした、補完性の原理にのっとりた総合的で長期的なアプローチで取り組む力のある、管理システムに関する合意が必要です。回勅の中で教皇はこのような管理システムの必要性を指摘しています。

参考資料

教皇庁「正義と平和」委員会『被造物が万人のためにあるという原理——海洋法会議について』（英題 *The Universal Purpose of Created Things. Conference on the Law of the Sea*, 1st Edition 1979, 2nd Edition 2011）。

聖ヨハネ・パウロ二世「イタリア国内司牧訪問、漁業従事者と船員へのあいさつ（チヴィタヴェッキア、1987年3月19日）」。

同「ポーランド司牧訪問時、船員とのみことばの祭儀での説教（グディニャ、1987年6月11日）」。

同自発教令『ステラマリス——船員司牧について（1997年1月31日）』（*Stella Maris*）。

同シノドス後の使徒的勧告『オセアニアにおける教会（2001年1月22日）』31（*Ecclesia in Oceania*）。

同「教皇庁移住・移動者司牧評議会第15回総会参加者へのあいさつ（2002年4月29日）」。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』40、41、174（*Laudato Si'*）。

教皇庁総合人間開発省長官ピーター・タークソン枢機卿「船員の日メッセージ（2017年7月8日）」。

教皇フランシスコ「EU主催国際会議第4回「わたしたちの海洋」（マルタ開催）へのメッセージ（2017年9月27日）」。

同「太平洋諸島フォーラム事務局代表者の謁見時のあいさつ（2017年11月11日）」。

同「被造物を大切にすると世界祈願日メッセージ（2018年9月1日）」。

教皇庁総合人間開発省『アクア・フォンス・ヴィタ——貧しい人の叫び、地球の叫びの象徴、水についての手引き』（英題 Aqua Fons Vitae. Orientations on Water, 2020, <https://www.humandevlopment.va/en/risorse/documenti/aqua-fons-vitae-the-new-document-of-the-dicastery-now-available.html>）。

実践例

教会は、漁師、船員、旅行者、移民、そして多くの沿岸地域のコミュニティなど、海や海洋と密接にかかわって生活する人々に特別な注意を寄せています。19世紀末以来、「海洋使徒会」（AOS 訳注：船員司牧にあたる教会の国際組織。ステラマリスの呼称で知られ、現在は教皇庁総合人間開発省の管轄下にある）は、多くの国や船上で司牧的・霊的ケアを確保し、沿岸部の人々の生活環境に配慮を示しつつ、奴隷制、劣悪な労働条件、家族と離れた暮らしなどの問題と闘ってきました。

多くの国で、地域のカトリックの共同体が海岸の清掃活動や、海面上昇を食い止めるための壁（マングローブの植林、フェンス、土囊^{どのお}）の建設に携わっています。カリタスキリバスはマングローブ植林に若者グループを参加させています。カリタスはオーストラリア、フィリピン、ベトナムでもまた、漁業共同体のための研修や諸活動、その他の支援を行っています。

オセアニアでは、司教たちが、海の状態、とくに生態系に深刻な問題をもたらす可能性のある海底からのミネラルやハイドロカーボン採掘のためのさまざまなプロジェクトについて、世論を動員し、公的機関に対して問うことに貢献してきました。オセアニア司教協議会連盟は2018年4月16日、それらの多くの地域の住民の困難な状況に関する声明を発表しました。また、教会はもっとも過酷な状況にある人々の支援も行っています。たとえばサイクロン後の、あるいはカートレット諸島からブーゲンビル島の一部地域への避難（訳注：島の水没の危険によるもの）のような再定住のケースなどです。

2020年2月、正義と平和委員会欧州協議会（Conference of European Justice and Peace Commissions 訳注：欧州32か国の司教団の正義と平和委員会で作られた協議会）は、アドボカシーや実践的な取り組みの出発点として活用できる文書『海の共通善——2020年度行動計画基本文書』（*Common Good of the Seas. Basic Text for the 2020 Annual Concerted Action of Justice and Peace Europe*）を発表しました⁷¹。

いくつかの勧め

1. 汚染水や海洋プラスチックの量を減らし、海や大洋を廃棄物処理場とすることを回避しましょう。
2. 海や海港での海賊行為、人身売買、麻薬その他の違法な取引を撲滅しましょう。
3. サイクロンや津波発生時の警報システムと緊急時対応の手順を向上させましょう。
4. 観光や航行、経済活動を規制して、生物多様性と文化遺産が豊富な海域を保護しましょう。
5. 船舶所有者、船員、旅客船乗客に、自分たちの活動がもたらす結果や社会環境に及ぼす影響についてのいっそうの自覚を促しましょう。
6. 生物多様性が豊富な地域を損ないがちの、鉱物や水素の海底採掘は差し控えましょう。
7. 絶滅危惧種の漁業、ならびに再生を阻み不経済で破壊的な集中漁業を避けましょう。
8. とくに海底にダメージを与える可能性があるトロール漁は避け、伝統漁法の漁師が尊厳をもって生活するのに十分な漁業資源を入手できる条件を整えることによって、生物多様性に配慮した漁の頻度と方法を採用しましょう。
9. 当たり前人間らしい処遇の尊重を保障し、家庭生活を支援して、船員および漁師の労働と生活の環境を保護しましょう。
10. 水没の加速で、居住地や耕作地を放棄せざるをえなくなっているコミ

71 <http://www.juspax-eu.org/en/dokumente/200210-Concerted-Action-The-Common-Good-of-the-Seas.pdf> 参照。

ユニティの惨状について、意識を高めましょう。

11. 港湾や海上での船員司牧「ステラマリス」に協力し、活動を広めましょう。

12. 大洋と海に関連した霊的取り組みや神学的考察を奨励しましょう。海と大洋について観想するよう人々を教育し、長い時間をかけて海との特別なつながりをはぐくんできた聖地を顕彰しましょう。

13. 海洋法を適用してその規定を明確にし、具体的には、海上での支援（とくに困難な状況にある移住者への）の提供、漁業の監視、海底からの資源の掘削・採掘への懲戒、海上での武力行使の規制、汚染との闘いに関する、あらゆるレベルでの協力を強化しましょう。



6

循環型経済

「わたしたちの産業システムは、生産と消費のサイクルが一巡する時点で廃棄物や副産物を吸収し再利用する能力を開発してこなかったのです。わたしたちは、非再生可能資源の使用を可能なかぎり控え、その消費を削減し、その効率的利用を最大化し、再使用し、再資源化しながら、現世代と将来世代のための資源保存を可能とする循環型生産モデルをいまだに適切に取り入れることができないでいます」(LS 22)。

導 入

現在の経済システムは持続不可能であり、わたしたちはその主要な側面の多くを検討する必要があります。すなわち、消費主義、近視眼的な考え、投機、経済成長への過信、化石燃料への依存、地球と貧しい人々に影響を及ぼす環境負債と社会的負債の増大、情報とテクノロジーの支配と不正な操作、そして人や^{ディーセントワーク}尊厳ある仕事への投資不足です。

環境への懸念を考慮した、新たな経済ビジョンの推進が急務です (LS 128、129、195 参照)。わたしたちは、「現実に対するより広い展望に訴える『経済的なエコロジー』」(LS 141) を必要としています。インテグラルエコロジーは、富を生み出す行為がわたしたちの世界を破壊するよりもむしろ改善させる、そんな経済の新たな構想を求めています (LS 129 参照)。世界が必要としているのは、この時流を逆転させ社会的排除と環境破壊とを撲滅することのできる循環型経済モデルです (LS 22 参照)。

サーキュラーエコノミー

ライナーエコノミー

循環型経済とは、従来の直線型経済 (生産し、使用し、廃棄する) に代わ

るものです。循環型経済では、資源を生産のために過剰に搾取するのではなく、できるかぎり長く使い続け、最大限にその価値を得て、それぞれの製品寿命の終わりに製品や材料として回収します。製品の使用期間中と使用終了時にいかに製品の価値を最大化するか、それによってその過程でいかに経済を強めるかを見極めることが、設計段階から、また製造、販売、リユース、リサイクルの各段階で可能です。

循環型経済への移行は、決定的な変革であり、同時に大きなチャンスです。すべてのものは価値あるものであるゆえ、「ごみ」という概念自体を廃れさせ、市場と消費者と自然資源の関係性の見直しを迫るものとなります。経済用語でいえば、投入産出の管理上、また生産者と消費者、成長と持続可能性、人間と地球のつながりを強化するうえでの、効率性と有効性の確保を指します。この移行はすでに行われており、技術革新、持続可能なインフラへの投資、そして資源の生産性向上、これらの相互作用に関連しています。これは、着実にバランスの取れた包括的な循環型の成長を促す取り組みの一環です。

参考文献

聖パウロ六世使徒的勸告『福音宣教（1975年12月8日）』31 (*Evangelii Nuntiandi*)。

同回勅『ポプロールム・プログレシオ（1967年3月26日）』1 (*Populorum Progressio*)。

聖ヨハネ・パウロ二世回勅『真の開発とは——人間不在の開発から人間尊重の開発へ（1987年12月30日）』1、12、26-27、35 (*Sollicitudo Rei Socialis*)。

同回勅『新しい課題——教会と社会の百年をふりかえって（1991年5月1日）』30、34 (*Centesimus Annus*)。

教皇庁正義と平和評議会『教会の社会教説綱要』323-376。

教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛（2009年6月29日）』21、49、24-26、34-52 (*Caritas in Veritate*)。

教皇フランシスコ使徒的勸告『福音の喜び（2013年11月24日）』52-62、186-188、191-194、198-199、203-215 (*Evangelii Gaudium*)。

同「草の根市民運動国際大会参加者への講話（2014年10月28日）」。

同回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』
22、138-142、189-198 (*Laudato Si'*)。

同「第3回草の根市民運動国際大会参加者への講話（2016年11月5日）」。

教皇庁教理省／総合人間開発省『経済と金融の諸問題——現行の経済金融システムのいくつかの側面についての倫理的認識について（2018年5月17日）』 (*Oeconomicae et pecuniariae quaestiones*)。

実践例

循環型経済の事例は豊富にあります。カリタスによる、作物残渣^{ざんさ}の再利用を前提とした農業の多様化がその一例です（エル・グラナド、ドミニカ共和国）。

カリタスドミニカとカリタススペインは、気候変動による農作物の減少対策として、地域の農場を多様化するプロジェクトを展開しています。導入された重要な要素は、混作です。この方法では、よく茂ったバナナはカボチャやナス、コリアンダーなど小さな植物に日陰を提供し、今度はそれらの植物が土壌に栄養を与え、より効果的な灌漑^{かんがい}が可能になります。もう一つ重要なのは、化学物質をいっさい使用しない手作業での交配を含めた農場の手入れや剪定、雑草駆除などの研修です。このようにして管理された農場は生産性が向上し、その農家はすぐに単一栽培から、市場で販売するさまざま品種へと生産を拡大していきました。収穫量の増加を目の当たりにした農家は、努力に見合った結果が得られることに納得しています。カリタスバラホナの事務局長は、この手法について次のように説明しています。「それは、自然との調和あるかかわりもち、集落の農家間で種子や家畜や食べ物の交換が促されるような、家族経営の自家消費型農業を回復することなのです」。

オーストリアでは、いくつかの小教区や教会機関（学校、大学、病院など）が、その建物の環境性能を評価するために EMAS^{イーマス}（EU 環境管理監査制度）の認証制度を採用して、エネルギー効率の向上、コストの削減、よりよい労働環境の確保を奨励しています。

モンテビデオの教会でも、カトリックの諸施設を巻き込んだ「共鳴

(Resuena)」⁷² (訳注: 2017年開始のごみ分別事業) や、青少年のための環境教育活動を目的とした「三輪車 (Triciclo)」など、興味深いリサイクルプロジェクトが実施されています⁷³。

パプアニューギニアのマウントハーゲン教区では、『ラウダート・シ』をすべての環境活動のよりどころとしています。家庭ごみによる汚染に対処するため、清掃活動、教育活動、政府機関との協働を通して、適切な廃棄物管理に特別な注意を向けてきました。

いくつかの勧め

1. 労働の尊厳に、また労働者とコミュニティに資する公正な雇用部門の移行に注視しつつ、人間中心のアプローチを確立させましょう。

2. すでに経済活動において流通している自然資源のリユースとリサイクルを促進し、さまざまな有機廃棄物の再利用 (バイオエネルギー、バイオ燃料、堆肥など) を促進しましょう。リサイクルがとくに困難な物品、材料、物質 (一部の多層プラスチックなど) の生産を避け、代替素材の研究を奨励しましょう。

3. 海岸やその他の公共の場所の清掃を奨励しましょう。

4. リサイクルが容易な、あるいは、生分解性の包装の導入を目指しましょう。

5. 乗り物や他の機器の共同使用 (たとえば、カーシェアリングシステムなど) や中古市場を促進しましょう。

6. 官・民の資金供給が円滑になる、明確な国家・地域戦略や計画を基盤とする、持続可能なインフラへの投資を促しましょう。

7. より循環的で温室効果ガス排出量の少ない経済への移行を促進する規制やインセンティブを通じて、民間部門のイノベーションを刺激し、技術革新を「開放」させ、サプライチェーンの透明性を向上させましょう。

8. エネルギー問題にとどまらない諸課題に取り組むために、とくに国際

72 <http://www.resuena.com.uy/> 参照。

73 <https://icm.org.uy/iglesia-y-ecologia-el-cuidado-de-la-casa-comun/> 参照。

的なパートナーシップや資金提供を通じて、技術革新を確実に後押ししましょう。

9. 化石燃料補助金の改革と、二酸化炭素排出量に応じた課税（炭素税）を促進しましょう。



7

労働

「それは、肉体労働や農作業ばかりでなく、社会報告書の作成から科学技術的な開発の企画設計まで、今ある現実の改変にかかわる活動なら何にでも関係しています。あらゆる形態の労働は、自分以外のものとの間にもつことができ、またもたなければならないかわりについての理念を前提としています」(LS 125)。

導入

聖ヨハネ・パウロ二世は、労働とは、人格の表出であり、社会（コミュニティ）への貢献であり、わたしたちに自分自身を明らかにするもの、絶え間ない創造のダイナミックな動きの中で自分の可能性を開花させるものだと説いています⁷⁴。また、労働はわたしたちの権利と義務をも明らかにします。労働は、「地上における生の意味の一部であり、成長や人間的発達や人格的完成への小路」(LS 128)であり、それゆえ経済的な面を含め、家族のかかわりの重要性を重視しつつ、包括的な方法で推進されるべきものです。『ラウダート・シ』は、労働の2つの基本的な側面、すなわち、神がわたしたち人間に託された園を豊かに実らせるために、わたしたちに与えられたものを保護すること、そしてそれを神との協力のうちに耕すこと⁷⁵、この二つを結びつけ、分析しています。ですから、環境の保護と、自然の約束や可能性とを発展させる労働とを、対立させる根拠はないのです。

ですから人間としてのわたしたちには、人類の将来について、またもっと

74 聖ヨハネ・パウロ二世『働くことについて』6 (*Laborem Exercens*) 参照。

75 創世記2・5、15 参照。

広く地球上の生命とそれぞれの発展すべてについての、絶え間ない識別のプロセスを通じて、技術、学問、法といったあらゆる面で、責任を果たし慎重であることが求められています。労働は、当然のことながら、個人の生存だけでなく、コミュニティの発展のためにも必要であると考えられています。実際、労働は、経済活動と社会生活をつなぐものです。それゆえ十全な人間の発展は失業によって損なわれ、経済的な機能不全はつねに人的損失を伴うものなのです⁷⁶。

参考資料

第二バチカン公会議『現代世界憲章』67-68 (*Gaudium et Spes*)。

聖パウロ六世「ジュネーブ司牧訪問時、国際労働機関 (ILO) でのあいさつ (1969年6月10日)」。

聖ヨハネ・パウロ二世回勅『働くことについて (1981年9月14日)』 (*Laborem Exercens*)。

同「大聖年・労働者のためのミサ説教 (2000年5月1日)」。

教皇庁正義と平和評議会『教会の社会教説綱要』第6章。

教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛 (2009年6月29日)』32、36 (*Caritas in Veritate*)。

教皇庁正義と平和評議会『ビジネスリーダーの使命——省察 (第4版、2014年)』 (*Vocation of the Business Leader: A Reflection, 4th ed.*)。

教皇フランシスコ使徒的勸告『福音の喜び (2013年11月24日)』202-206 (*Evangelii Gaudium*)。

同「草の根市民運動国際大会参加者への講話 (2014年10月28日)」 (2014年10月28日)。

同回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に (2015年5月24日)』22、26、98、124-129、171、180、187、191 (*Laudato Si'*)。

同「南米三か国司牧訪問時、第2回草の根市民運動国際大会参加者への講

76 教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛 (2009年6月29日)』32 (*Caritas in Veritate*) 参照。

話（ボリビア、2015年7月9日）』（『教皇フランシスコ講話集3』所収）。

同「草の根市民運動国際大会参加者への講話（2016年11月5日）」。

同「教皇庁総合人間開発省主催国際会議“労働と労働者について——ポプロールム・プログレッシオからラウダート・シまで”にあたって長官ピーター・タークソン枢機卿あて書簡（2017年11月23日）」。

教皇庁教理省／総合人間開発省『経済と金融の諸問題——現行の経済金融システムのいくつかの側面についての倫理的認識（2018年5月17日）』（*Oeconomicae et pecuniariae quaestiones*）。

教皇フランシスコ使徒的勧告『キリストは生きている（2019年3月25日）』268-273（*Christus Vivit*）。

実践例

さまざまな教区が、失業者、貧困者、または非常事態で移住中の人々とともに、農業プロジェクトを開始することを決定しました（イタリア、ケニア、ベネズエラ）。

1995年に、イタリア司教協議会は「ポリコロ・プロジェクト」（訳注：初会合の地がPolicoroだった）を開始しました。これにより、組織犯罪の勢力が強い国内のもっとも貧しい地域を中心に、何百もの職業機会（とくにコンソーシアム、協同組合、小企業によって）と、何千もの雇用が創出されました。

インクルージョン、インテグレーション
包摂と共生の名のもと、ペルーの各地で、善き牧者の愛徳聖母修道会のシスターたちが、困難な状況にある母親やHIVに感染した孤児を養護施設に受け入れ、工芸活動に参加させています。スペインでは、カリタスビスケーが、環境保護活動（リサイクル、廃棄物収集）や、人助け、縫製の仕事を通しての、危険にさらされている人々の社会と仕事への復帰を目指した協同組合「Koopera」を開始しました。これは、訓練的な要素が強いもので、日常的に社会から疎外されている人々のための、社会と仕事への参加を促すプログラムになっています。

フランスでは、1998年に「Le Cèdre（ヒマラヤスギ）」という購入者支援団体が設立され、何千もの機関（多くのカトリック学校や小教区を含む）が、

購入商品（各種サービス、IT、文房具、食堂）の代金を分割で支払えるようになりました。このようにして経費を抑えると同時に、インテグラルエコロジーの倫理観で選ばれたサプライヤー（卸売業者）を優先的に取引先としています。

「The Future of Work After Laudato Si'」もまた興味深いプロジェクトです。このプロジェクトは、労働の世界において教会の声を広めることを目的として、さまざまな機関を束ね、以下のことを通じて活動しています。1) 協働と知識共有の増進手段となる、教会機関の間での連携とネットワーク形成。2) 就労の現場における具体的な対応策を構築するための、現在および将来の課題についての考察と調査研究。3) 労働問題に関する対話に積極的に参加するためのスキルの訓練。

米国司教協議会は、「Catholic Campaign for Human Development（人間開発のためのカトリック教会キャンペーン）」を通じて、労働問題にとくに注意を払いながら、インテグラルエコロジーを推進するプログラムと活動に次々と着手しています。たとえば、バッファロー（ニューヨーク州）では、地域コミュニティにとって、よりよい経済的機会と環境的便益を促進するために「People United for Sustainable Housing（持続可能な住居のために団結する民）」と協力しています。

ギニアでは、ンゼレコレ教区内のジアマ・マッシフ生物圏保護区に位置する「ウルスラ会ニンバ山麓農業司牧センター（Le Centre Agro-pastoral Ste-Ursule du Mont Ziama）」が2016年に設立され、シオンのウルスラ修道女会が運営しています。これは起業のプラットフォームであると同時に、技術的解決策（とくに有機農業に関して）を普及させる活動拠点にもなっています。それはまた、貧困の撲滅と持続可能な社会・経済開発の推進を目的とした、組織的で倫理的な解決および、人間らしさと仕事についての啓発にもなっています。運営者の目標は、新たな人材を創出して、ギニアの森の住民たちが自活し、失業や離村を減らし、インテグラルな農業（訳注：環境、健康、経済、社会、次世代へ持続可能性を考慮した技術のみを用いる農生産システム）を行うことができると証示することです。

いくつかの勧め

1. ^{ディーセントワーク} 尊厳ある仕事と労働者重視を推進し、あらゆる差別を拒否し、等しくある女性の尊厳と、人間にとって意味のあるものならあらゆる種類の労働が有している価値を認めましょう。
2. 家族の全体のニーズに妥当な適性賃金を保証し、児童労働を撲滅しましょう。家庭生活と両立する柔軟な勤務スケジュールとともに、休憩時間や精神的（霊的）・文化的なレクリエーションの時間を促進しましょう。
3. 搾取、不安定さ、健康リスクの多い、非正規労働と非公式経済（^{インフォーマルエコノミー} 訳注：貧困国や発展途上国に多く見られる、国家の統計や記録に含まれていない経済活動。インフォーマルセクター、ポピュラーエコノミーも同義）を正規のものにしていきましょう。
4. 住人が移住することの多い、後発開発途上国で雇用を創出し、彼らが仕事を得て尊厳ある生活を送れるよう、必要な条件を保障しましょう。
5. 自然で汚染のない製品の使用に基づき、昔からの技術と知識を守ること、農作業がよりいっそう環境と「一体化」したものになるよう支援しましょう。これは、自然のサイクルのリズムに合わせること、また在来種（固有種）を大切に、生物多様性を守る生産を確保することによって可能になります。
6. 若者が、自身の技能を社会のために生かし、自分の家庭を築くために、彼らにとって安定した雇用機会を促進しましょう。
7. 社会扶助に限らず、貧しい人々、長期失業者や低技能労働者、移民、周縁化された人々、受刑者や元受刑者、そして障害のある人々に配慮した、包摂的な経済を推進しましょう。こうして、彼らが社会的・経済的な参加を得、自立し、責任をもつことを助けましょう。
8. 一方の親が、家族から長期間離れた生活を強いられる仕事のための、保護措置を取り入れましょう。人間味のある方法で資源を生み出せる、家庭というものの経済的価値を広く知らしめましょう。
9. 子の世話をするために家にいながら仕事をする親の、貴重な教育的・

経済的役割を認識しましょう。このことで、共通善を推進する社会の有益な一員となるための子どもたちの準備を助けましょう。

10. 母親の社会的・経済的価値を訴え、しっかり保護されるようにしましょう。個人だけではなく、むしろ家庭を、経済システムの中心に据えましょう。

11. 労働者が組織を立ち上げて、自由で敬意ある議論の中で、彼らの声が伝わるようにしましょう。参加、信頼、補完性、共有責任に基づいて、雇用者と労働者の関係を円滑化しましょう。

12. 労働者の権利に関する条約を効果的に実施し、労働者にその権利を知らせましょう。事故や失業を防止する対策を推進しましょう。

13. 最善の防止策や・捜査手続きに関する調査研究の促進によって、新しい形態の奴隷制、人間搾取、人身売買、売春を予防し、撲滅しましょう。

14. 機械や新たなテクノロジーに対する人間の優位性を再確認し、保護しましょう。労働界の将来に重大な影響を及ぼす分野（遺伝学、バイオテクノロジー、ナノテクノロジー、認知科学、ロボット工学、人工工学、データマネジメント）の、研究、開発、法整備を意識的に進めましょう。

8

金融

「経済は、人間に及ぼしうる負の影響を顧慮することなく、利得を期待して、テクノロジーにおけるあらゆる前進を受け入れます。金融が実体経済を制圧しています。地球規模の金融危機の教訓は体得されておらず、環境悪化の教訓を学ぶわたしたちの足取りはあまりに遅々としています」(LS 109)。

導 入

今日の金融情勢とエコロジカルな回心は、明らかにつながっています。このことは、「インテグラルエコロジーのコストとは何か」また「その便益とは何か」という2つの問いを投げかけます。これらの問いに対する答えは、金融の世界だけにゆだねられるべきものではなく、テクノクラティック道徳的な識別を要求します。技術主義パラダイムに支配され、投機に走り、短期的な利益を渴望するこの世界は、『ラウダート・シ』が批判するものです。現今の状況についての道徳的な識別はどれも、まず各プロジェクトの真の意味を理解し、そのうえでその将来の経済的発展を最善の方法へと方向づけるはずです。

残念なことに、今日では「環境や人間自身に悪影響を及ぼす、もっぱら短期的な金融利益」⁷⁷が大手を振っています。依然として、実体経済に貢献せず、生産と需要から切り離された信頼性の低い金融商品や激しい価格変動に基

77 教皇ベネディクト十六世「教皇庁正義と平和評議会主催、ヨハネ二十三世回勅『マーテル・エト・マジストラ』公布50周年記念集会参加者へのあいさつ(2011年5月16日)」。

く投資を通じて、「目的自体としての利益」⁷⁸の追求が続いています。さらにまた、多くの投資家は、リスクを最小限に抑えたいという思いから、すでに資本を有する人にしか資金を貸与せず、もっとも必要としている個人や民族を排除しています。このようにして、信用取引にあずかれる人とそうでない人との格差は拡大し続けています。豊かな世界と活力ある経済というものは、貧困に終止符を打つことができ、またそれをしなければなりません。人権の重要性と価値の認識からも、人類が蓄積してきた富と技術のレベルからも、もはや言い逃れはできません。さらにいえば、まさに新型コロナウイルス COVID-19 のパンデミックは、福祉を制限する現行のシステムに対し、また貧しい人々に悪影響があろうとも災害ですら大規模投機の対象となりえる経済社会システムに対し、今こそ挑戦すべきだと伝えています。

現今の危機の、経済的、金融的、生態学的、社会的側面のつながりを考えるうえで、新たな開発パラダイムの立ち上げに貢献しうる倫理的な考察のための4つの柱を念頭に置くことが重要です（LS 108 および 202 参照）。すなわち、1) お金の意味と価値、2) わたしたちが築きたい将来のビジョンとそのための関連投資、3) 金融政策における、また投資の社会影響評価における、共通善の優位性、4) 金融界と労働界を調和させうる「実体経済に資する自由で安定したグローバルな経済・金融システム」⁷⁹のために必要な規制の枠組みです。

参考文献

聖ヨハネ・パウロ二世「イタリアのカトリック教会行事、第43回社会週間あてメッセージ（1999年11月10日）」。

教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛（2009年6月29日）』36、45、65（*Caritas in Veritate*）。

78 同『真理に根ざした愛（2009年6月29日）』38（*Caritas in Veritate*）。

79 教皇庁正義と平和評議会『グローバルな公的機関の枠組みによる国際経済・通貨システム改革に向けて（2011年10月24日）』（*Towards Reforming the International Financial and Monetary Systems in the Context of Global Public Authority*）。

教皇庁正義と平和評議会『グローバルな公的機関の枠組みによる国際経済・通貨システム改革に向けて（2011年10月24日）』（*Towards Reforming the International Financial and Monetary Systems in the Context of Global Public Authority*）。

教皇フランシスコ使徒的勸告『福音の喜び（2013年11月24日）』54-57、202-208（*Evangelii Gaudium*）。

同「教皇庁正義と平和評議会主催“困窮者のためのインパクト投資”会議参加者への講話（2014年6月16日）」。

同「草の根市民運動国際大会参加者への講話（2014年10月28日）」。

教皇庁正義と平和評議会『土地と食べ物』32-36、133-138（*Land and Food*: Libreria Editrice Vaticana, 2015）。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』56、109-112、128、185、189-192（*Laudato Si'*）。

同「第3回草の根市民運動国際大会参加者への講話（2016年11月5日）」。

教皇庁教理省／総合人間開発省『経済と金融の諸問題——現代の経済金融システムのいくつかの側面に関する倫理的識別のための考察（2018年5月17日）』（*Oeconomicae et Pecuniariae*）。

教皇フランシスコ「教皇庁自然科学アカデミー／ノートルダム大学共催パチカン非公開会議参加の石油・天然ガスおよびその他エネルギー関連主要企業経営陣の謁見時のあいさつ（2018年6月9日）」。

同「教皇庁総合人間開発省主催会議“エネルギー転換と、わたしたちの共通の家を大切にすること”参加者へのあいさつ（2019年6月14日）」。

同「教皇庁社会科学アカデミー主催セミナー“ソリダリティ、インクルージョン、インテグレーションの新形態”参加者へのあいさつ（2020年2月4日）」。

実践例

投資家は、経済のさまざまな分野でポジティブな変化を促すことができます。特定の基準（人権、児童労働、環境など）を満たしていない企業には投資しないと決めている場合です。投資ファンドの一部が、このような責任あ

る融資に移行しているのを見るのは頼もしいことです。また銀行は、同じ基準を満たす投資のオプション取引を一般個人向けに提案しており、上場企業もその基準に適合した活動や報告に努めています。宗教的信条にかなう倫理的投資を考える人は、時には利益が低くなるかもしれませんが、フィルターやコンサルティングを利用することができます。カリタス米国 (CRS) と聖座が主催した3つの主要な会議では、これらのテーマに焦点が当てられました⁸⁰。

2017年、ベルギー司教協議会は、教会の資産の善良な管理のための憲章を打ち出しました⁸¹。

オーストリア司教協議会⁸²に代表される、いくつかの司教協議会、国際カリタス、さまざまなカトリックの機関は、化石燃料（石炭、石油、天然ガス）を抽出または生産する企業への投資をすべて引き揚げることを約束しています⁸³。これに関連して、GCCM（現ラウダート・シ・ムーブメント）によって推進されている世界的なキャンペーンが活発に行われています。この非投資アプローチは、アマゾンに関するシノドスの司教たちによって支持、採択され⁸⁴、年々よりいっそうコミットメントが増えています。

末端のレベルにもまた、さまざまなマイクロクレジットの取り組み（とくに開発途上国において）や、受けた融資の慎重な使用を支援するプログラムがあります。さらに、借金を抱えている家庭や、高利貸しの被害者を支援する取り組みもあります。イタリア司教協議会は、「希望の融資（*Prestito della Speranza*）」を通じて、弱い立場にある個人や零細企業が融資を利用できるよう支援してきました。ほかにも、富裕国と貧困地域との間の直接的で支援的なつながりを支持する、同様の取り組みが広がっています。

80 <https://www.viiconference.org/> 参照。

81 <https://www.cathobel.be/wp-content/uploads/2017/05/17-05-11-Charte-de-bonne-gestion-Contenu.pdf> 参照。

82 『投資に関する倫理要綱』（*Richtlinie Ethische Geldanlagen*, https://www.bischofskonferenz.at/dl/muoMJmoJKMofqx4KJKJKJKkolml/Richtlinie_Ethische_Geldanlagenfinal.pdf) 参照。

83 <https://catholicclimatemovement.global/divest-and-reinvest/leaders> 参照。

84 アマゾン特別シノドス「最終文書（2019年10月26日）」70。

いくつかの勧め

1. 投資の意思決定にあたっての、倫理的で責任ある総合的な判断基準を普及させ、人間のエコロジーや社会のエコロジーを傷つけたり（たとえば、妊娠中絶や武器取引によって）、あるいは自然環境のエコロジーを傷つけたりにしている（たとえば、化石燃料の使用によって）企業を支援しないように配慮しましょう。

2. ネットワークや大学を通じて、銀行業や金融仲介部門における倫理規範、共通善、責任に関する意識啓発に努めましょう。

3. 明確な国家・地域戦略や計画を基盤とする、持続可能なインフラへの投資を加速しましょう。

4. 国際開発金融機関やその他の金融系開発機関としては、社会的包摂と環境保護とくに注意を払いつつ、実体経済に作用するインフラへの投資を拡大しましょう。

5. 適切かつ実効ある監督当局を設けることにより、金融機関と金融市場とが、共通善とインテグラルな人間の発展のために運営されるものとなるよう、立て直しを図りましょう。

6. 心無い無責任な投機活動を行う人々の動きを制限し規制しましょう。

7. 将来的に見込まれるリターンだけでなく、(ESG基準で)自然環境や社会に照らした持続可能性も考慮に入れた、より「インテグラルな」金融投資の評価基準を採用しましょう。

8. たとえば、化石燃料分野からの段階的な投資引き揚げを検討することによって、社会・環境分野への責任投資を促進しましょう。

9. 暗号通貨（ビットコインなど）や、特定地域で有効な代替通貨については、市民社会や民間部門からの提案を、倫理基準にのっとって慎重に検討しましょう。

10. 自然環境を損ないながら応分の賠償をせずにいる企業の、株主に対する不適切な利益配分を回避し、ビジネスと生産のサイクル全体を考慮した財政モデルを採用しましょう。

11. リスクレベル軽減を助けてくれる、信頼に値する仲介者のかかわりを得ることや、マイクロクレジットを奨励することによって、貸し付けを得やすい人とそうでない人との格差をなくしましょう。

12. 脱税を助長する違法な取引や、基礎食品への投機に関与した金融機関に厳罰を課しましょう。

13. タックスヘイブンを封鎖しましょう。社会からの強奪である、脱税やマネーロンダリングをやめましょう。巨大企業や多国籍企業の利益よりも人間を優先させましょう。

14. 透明性があり矛盾のない、教会の資産管理を推進しましょう。『ラウダート・シ』がいう意味での、インテグラルな持続可能性という視点を取り入れる勇気を持ちましょう。

このようにすることで、経済と金融に対するまったく異なる向き合い方の選択が可能であると、あかしすることができるでしょう⁸⁵。

85 第15回通常シノドス「最終文書（2018年10月27日）」153参照。

9

都市化

「近年、たとえば、多くの都市が遂げた^{けた}桁外れの無秩序な成長が見られます。そうした都市は、有毒排出物による汚染のためばかりでなく、都会の秩序のなさや交通機関の問題、視覚や聴覚に影響する汚染の結果としても、暮らすには不健康なところとなりました。多くの都市は、エネルギーと水を過度に浪費する、巨大で非効率的な構造物です。最近造られた地区であっても、過密で、無秩序で、緑地が十分ではありません」(LS 44)。

導 入

「真正な発展は、生活の質の全人的改善をもたらす取り組みを含んでおり、人々の生活条件を考慮することなしには不可能です」(LS 147)。このため『ラウダート・シ』は、「生活空間と人間行動がかかわり合っていること」(LS 150)を強調しています。

世界はますます都市化が進んでおり、この傾向は今後数十年変わることはないでしょう。都市は予算に苦慮しており、市民に行政サービスを提供し、急速な人口増加に対応するための財源は非常に限られています。これには、都市の「断片化」を助長する危険性があります (LS 49 参照)。ほとんど10億人が非公式居住地で生活しており、まともな住宅や清潔な飲み水や安全な公衆衛生施設(トイレ)を利用できずにいます。都市計画は、環境と貧困層にとって重要であるにもかかわらず、軽視されたり、構想が不十分であったりすることがしばしばです。今日でさえ、都市人口の大部分は貧困地区やスラム街に住み続けています。

都市部では、交通、緑地、住宅計画、社会の結束の観点から環境・貧困関連諸課題に対処することにおいて、インフラを整備することがきわめて重要です（LS 232参照）。それらのインフラは、その地へのわたしたちの帰属意識を強め、それによって、インテグラルエコロジーを促進する機会となっています。「わたしたちを包み込み結びつけてくれる都市の中であって、帰属感や根つき感や『我が家』感を強めてくれる公共空間やランドマークや都市景観を守ることもまた必要です。都市の中の相異なる部分がうまくまとまっていること、そして、住人たちが、一地域に閉じ込められて、より大きな広がりをもつ都市を他者と共有している空間だと思えずにいることがなく一体感を有していること、それが重要なのです」（LS 151）。

参考資料

聖パウロ六世使徒的书簡『オクトジェジマ・アドヴェニエンス（1971年5月14日）』46、9-12（Octogesimo Adveniens）。

聖ヨハネ・パウロ二世「都市の人口と未来についての国際会議参加の60都市の市長らの謁見時のあいさつ（1980年9月3日）」。

教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び（2013年11月24日）』71-75（*Evangelii Gaudium*）。

同回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』21、24、28-29、44-45、49、141、142、147-153、192、231-232（*Laudato Si'*）。

同「教皇庁社会科学アカデミー主催ワークショップ“現代の奴隷制と気候変動——都市の責務”における発言（2015年7月21日）」。

同「イタリア全国地方自治体協会の会員市町村長らの謁見時のあいさつ（2017年9月30日）」。

実践例

世界の多くの都市は、低所得者層居住区における行政サービスを向上させるために、行政と市民社会（たとえば自治会など）が実施する、特別な政策

など優れた活動を取り入れています。たとえば、交通、廃棄物処理、下水道事業にとくに高い関心を払った分散型の都市管理システムを促進する公共事業や、高齢者などもっとも脆弱な人々の支援やサポートを提供する行政サービスなどがあります。

2016年6月5日、インドネシアのジャカルタ大司教区は「エコロジカルな回心運動 (Šilih ekologis)」を開始しました。これは、飛行機を利用する人に対し、市内の一部の小教区が緑地を増やし維持するための特別基金として1万ルピア (IDR)、およそ0.7米ドル (USD) 相当を寄付するように求めるものです。また、インドネシアの複数の教区では、市内の貧困地区での再植林プロジェクトや、プラスチックごみの回収、海岸の清掃、そして、子どもや若者の間でのエコロジー問題への意識啓発のための数々のプロジェクトが開始されました。

持続可能な交通手段を推進する活動も数多くあります。電気自動車といった低公害の車を選んで、保有する自動車を交換することなどです。こうした取り組みは、都市部の汚染を減らすために、一部のローマ教皇庁大使館で採用されています。

2019年3月13日、マレーシアのローマ教皇庁大使館は、マレーシアのグリーンビルディング・インデックス (訳注: マレーシアが独自に導入しているグリーン格づけ) から「プラチナ認証」を受け、ローマ教皇庁大使館の建物の環境持続可能性指数 (eco-sustainability index) の高さを証明しました。とくに、ローマ教皇庁大使館のエネルギー効率と節水性、室内環境の質、建物のデザインと持続可能な管理、また、使用されている資源と建材が評価されました。そして、建物に採用された、環境持続可能性に配慮したデザインや建築の革新性も注目されました。

いくつかの勧め

1. コミュニティの参加を得て、貧民街から人々を立ち退かせるのではなくそこを正式に認定し、未利用地を都市内の手頃な価格の住宅地に転換することによって、社会的・経済的な包摂と、労働市場とのよりよいつながり

促進するために、適切な建設政策を進めましょう。

2. 住人の団結や、不当にも分断の場となっていた、都市にある使われなくなった建造物の一部を、史跡として保存し、教育や啓発活動の補助として活用しましょう。

3. クリーンエネルギーへのアクセスを促進する都市政策を支援しましょう。

4. 投機や透明性欠如に起因する、不動産市場でのひずみを、適切な規制や施策で取り除くことによって、持続可能な都市開発を統制しましょう。

5. すべての人（歩行者や自転車利用者を含む）に平等な機会を提供する、エコロジカルで経済的で効率的な都市交通システムを開発しましょう。公共交通機関の機能を強化し、都市における公共資源、民間資源、インフォーマルな資源を活用した統合的な解決策を開発しましょう。

6. インフォーマル・エコノミー非公式経済を、そこで働く労働者の公共サービスや公共機関や公共調達の利用可能性を増進させることで、また彼ら労働者を支援する法律や規制を改革することで、さらに、彼らのリーダーの意思決定プロセスを盛り込んで法令を整備することによって、認知しましょう。

7. すべての住宅計画において、低炭素かゼロ炭素かの高断熱建造物を確保しましょう。

8. 都市開発プロジェクトにおいては、社会交流のために、緑地や都市農園を増やすように計画しましょう。

9. 再開発や開発プロジェクトを扱うどの決定においても、市民、とくに、貧困地域に暮らす人々の参加を促しましょう。

10. 美的価値と、帰属性や一体性の雰囲気配慮した、都市空間をデザインしましょう。

10

制度、司法、行政

「あらゆるものが関係しているのなら、社会制度の健全さは、生活の質と環境とに影響を及ぼします」(LS 142)。

導 入

「政治共同体と市民社会は、相互に関連し依存し合っていますが、目的順位において同等ではありません。政治共同体は、本質として、市民社会に、そして最終的にはその市民社会の構成員である人と集団に奉仕するために存在するものです。……国家は、各社会主体がそれぞれの活動に自由に従事できるよう、適切な法的枠組みを提供しなければならず、また必要なとき、補完性の原理を尊重しながら、民主生活と自由な結社の間の相互作用が直接共通善に向けられるよう関与する用意がなければなりません」⁸⁶。

このように教会の社会教説は、市民社会の優位性を説いています。政治共同体、政府、各行政機関は、市民社会の奉仕者であり、共通善を促進する義務を遂行するために組織化されなければなりません⁸⁷。『ラウダート・シ』は「社会制度の健全さ」(LS 142)の重要性を強調しています。これら制度は、地域社会が直面するさまざまな課題に対応しなければなりません。なぜなら、その中のいくつか（水利用や犯罪撲滅のようなもの）は、国家レベルだけでなく、補完性の原理に照らして「実質的な社会的・参加型民主主義のグローバル化」の一環として、中間レベルを含めて対応することができるからで

86 教皇庁正義と平和評議会『教会の社会教説綱要』418。

87 教皇ベネディクト十六世「英国司牧訪問時、ウェストミンスター宮殿での政府要人らへのあいさつ（2010年9月17日）」および『教会の社会教説綱要』164-170参照。

す⁸⁸。政府は、汚職を回避し、透明性を高め、社会で生じる諸要求を先見の明をもって検討しなければなりません。これは、単にそうした要求を掲げる集団の集票力や財力に基づいてではなく、むしろ、正義と道徳の基準にのって社会全体の共通善への配慮からなされるべきです⁸⁹。

参考文献

第二バチカン公会議『現代世界憲章』69 (*Gaudium et Spes*)。

聖パウロ六世回勅『ポプロールム・プログレシオ (1967年3月26日)』52、54 (*Populorum Progressio*)。

同使徒的書簡『オクトジェジマ・アドヴェニエンス (1971年5月14日)』46、47 (*Octogesimo Adveniens*)。

聖ヨハネ・パウロ二世「欧州連合 (EU) 理事会加盟国代表者らへのあいさつ (1983年11月26日)」。

同回勅『新しい課題——教会と社会の百年をふりかえて (1991年5月1日)』46-47 (*Centesimus Annus*)。

教皇庁正義と平和評議会『教会の社会教説綱要』第8章。

教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛 (2009年6月29日)』37、41-43、47、57、67 (*Caritas in Veritate*)。

同「英国司牧訪問時、ウェストミンスター宮殿での政府要人らへのあいさつ (2010年9月17日)」。

教皇フランシスコ使徒的勸告『福音の喜び (2013年11月24日)』205、222-230 (*Evangelii Gaudium*)。

教皇庁正義と平和評議会『土地と食べ物』113-115、141-145 (*Land and Food: Libreria Editrice Vaticana, 2015*)。

教皇フランシスコ「イタリアのクリスチャン・ライフ・コミュニティ

88 同「教皇庁正義と平和評議会主催、ヨハネ二十三世回勅『マーテル・エト・マジストラ』公布50周年記念集会参加者へのあいさつ (2011年5月16日)」。

89 聖ヨハネ・パウロ二世回勅『新しい課題——教会と社会の百年をふりかえて (1991年5月1日)』47 (*Centesimus Annus*) 参照。

(CLC) の学生ボランティア訓練団体 (Lega missionaria studenti = LMS) の会合時の若者へのあいさつと質問への回答 (2015年4月30日)』。

同回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に (2015年5月24日)』
(*Laudato Si'*) 142-146、180-189。

同「第3回草の根市民運動国際大会参加者への講話 (2016年11月5日)」。

同「ローマ条約締結60周年記念、EU首脳陣の謁見時のあいさつ (2017年3月24日)」。

同「チリ、ペルー司牧訪問時、ペルー政府要人らとの会合でのあいさつ (2018年1月19日)」。

同「第52回世界平和の日メッセージ“よい政治は平和に寄与する” (2019年1月1日)」。

実践例

多くの司教協議会は、政治指導者の養成と役割についてのパンフレットやメッセージを作成し、彼らの価値観やその決定に対し責任があることを思い出させています。フランス司教協議会常任委員会の文書「変わりゆく世界の中で政治の意義を求めて (*Dans un monde qui change, retrouver le sens du politique*)」(2016年)や、コンゴ司教協議会の自然資源委員会の文書「環境と自然資源に関するコンゴ民主共和国の政党および宗教団体の見解 (*Regards des Partis politiques et des Confessions religieuses de la République Démocratique du Congo sur l'Environnement et les Ressources naturelles*)」(キンシャサ、2016年)がその一例です。

カリフォルニア州、バージニア州、フロリダ州、ネブラスカ州、アイオワ州、ミネソタ州など、アメリカ合衆国各州のカトリックの協議会などのように、多くの司教協議会が地方自治体と連携しています。これら協議会は、インテグラルエコロジー、大気の水へのアクセス、環境衛生、自然災害への対応、エネルギー効率、公害対策などの法整備への関心を集めるために、地方自治体と協力しています⁹⁰。

90 <https://www.catholic.org/common-home> 参照。

多くの教区、カトリックの組織、小教区は、貧困地域の住人を対象に、権利に関する研修講座を開催し、法的支援や相談を行っています。

多くの司教団の正義と平和委員会は、政府と協力して、国政選挙や地方選挙にかかわり、適切な投票手続きの監督・監視を支援してきました。また、武力紛争後などの危機的状況下では調停役を務め、刑務所の処遇改善のために活動してきました。

2019年、CCEE（ヨーロッパ司教協議会評議会）、COMECE（EUのための司教委員会）、CIDSE（Coopération Internationale pour le Développement et la Solidarité 訳注：ブリュッセルに本部を置く、開発援助と連帯のためのカトリック系 NGO 国際協力連合）、GCCM（現ラウダート・シ・ムーブメント）、JESC（イエズス会欧州社会センター）、そして正義と平和委員会欧州ネットワーク（Justice and Peace Europe）は、『ラウダート・シ』のアプローチを欧州の文脈で、とくに EU の諸機関に取り入れることを目的として、「ラウダート・シ^{アライアンス}欧州同盟」(ELSiA) を設立しました。この同盟は、環境政策と社会正義に関連したインテグラルエコロジーについての教会のメッセージを支持すること、より環境に配慮した持続可能なライフスタイルのために最善な欧州レベルでの貿易を促進すること、エコロジカルな回心をテーマとした神学的・霊的な考察を奨励すること、気候、開発、環境に関する EU 政策のための提案作成において司教協議会と協力するために、欧州のカトリック運動の幅広いネットワークを構築すること、これらのために活動します。

いくつかの勧め

1. 「世界平和の日メッセージ」を毎年広く発信しましょう。
2. インテグラルエコロジーの諸原則、諸価値、諸方法に格別の注意を払いつつ、政治、経済、産業、軍事、各種団体のリーダーたちの養成のための特別な機会を用意しましょう。
3. すべての市民が民主的プロセスを理解し、意思決定プロセスに（個人として、また集団として）貢献できるように育成しましょう。
4. もっとも疎外され孤立させられた人々とともに働く、教会や地域諸団

体や市民社会の動きを支援しましょう。

5. 移民など不安定な状況にある人々が、所有権や身分証明書入手に関し、しかるべきものを得られるよう支援しましょう。

6. 貧しい人々や教育に恵まれなかった人々、障害のある人々、人身売買の被害者など保護を必要とする人々に、有している権利について知らせ、虐待や脅迫を訴える方法について知識を与えることで、司法へのアクセスを促し保護しましょう。

7. すべての利害関係者が参加する、法律の実効性に関する評価作業を奨励しましょう。各行政機関が適切に機能しているかどうか公正な調査を行い、状況や手続きや法令を改善するために、必要に応じてその調査結果を検討しましょう。

8. 政治家、議員、ビジネスリーダー、軍人、医療提供者、受刑者や刑務官らの司牧ケアのために、養成を受けたチャプレンを任命しましょう。

9. すべての大規模プロジェクト（農業、工業、あるいは天然資源の採取）は、「事前協議」の原則を適用し、それぞれのコミュニティが開発への具体的な貢献ができるように促しつつ、丁寧に、時宜を得て、自由なかたちで、十分な情報提供がなされたうえで実施しましょう。

10. 鉱業や類似プロジェクトの調達手続きや認可の審査について、多くの国において公正で包括的な発展に貢献するはずの開発基金や鉱山使用料の適正な使用について、汚職や資金洗浄^{マネーロンダリング}、新形態の奴隷制度、またさらに広く、サイバー犯罪を含む組織犯罪、これらとの闘いについて、責任を担う各行政機関および警察を国家レベルおよび国際レベルで強化しましょう。

11. 受刑者の社会復帰を促すために、初犯の若者とその両親に特別に配慮しつつ、刑務所制度を入念に見直しましょう。

12. キリスト教的人間論にかなったしかたで共通善と人権を増進する法律を提案するために、地方教会と立法機関との対話を醸成しましょう。



11

健 康

「人々が日常的に被っているさまざまな形態の汚染があります。大気汚染物質にさらされることによる健康被害は広範囲に、とくに貧しい人々に及び、おびただしい数の^{そうせい}早逝をもたらす原因となっています」(LS 20)。

「ヒューマン・エコロジーは、もう一つの深遠な現実をも含意しています。すなわち、人間の自然本性に刻まれていて、より尊敬ある環境の創造のために欠かすことのできない道徳法と、人間の生とのかかわりです」(LS 155)。

導 入

『ラウダート・シ』でそのあらましが説かれている、システム全体の健康という概念は、人間の全人的な幸福を追求する^{ヒューマン}人間のエコロジーに合致します。このモデルは、人間の身体や心だけでなく、人間の自然環境や社会環境との相互作用をも考慮に入れています。「わたしたちは、環境悪化や現今の開発モデルや使い捨て文化が人々の生活に及ぼす影響を考えないわけにはいきません」(LS 43)。健康とは、公平性と社会正義の問題です。問われているのは、すべての人の医療アクセス、もっとも貧しい地域における保健医療行政の状況、さまざまな社会階層で受けられる医療「レベル」の違い、医薬品に要するコスト（「知的財産権を不当なほど厳格に主張」⁹¹することを含む）、医療を受ける権利、健康の維持管理や予防に関する必要な情報の公開とそれ

91 教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛（2009年6月29日）』22 参照（*Caritas in Veritate*）。

へのアクセス、そして、居住地によって健康が左右されるという現実です。

慢性疾患やいわゆる機能障害の多くは、環境的要因に起因しています。大気汚染物質、化学肥料、殺虫剤、除草剤、気候変動、その他同様の要因を考えてみれば分かるでしょう。大都市では、矛盾しているようですが、多くの人が孤独を経験しているのです。人々は密集地に暮らしていますが、そこは社会交流のためのサービスや空間を欠いています。生態系ネットワークの衰退が、社会的なネットワークの衰退をもたらし、どちらの場合も、だれよりも影響を被るのがもっとも貧しい人々なのです。「ある領域の汚染原因を突き止めるには、社会の仕組み、その経済のあり方、行動パターン、現実把握の方法についての研究が必要になります」(LS 139)。

『ラウダート・シ』は、人体の理解とケア、そしてわたしたちの自然とのかわり、これら間にある相互連関をとくに強調しています。健全な人間論というものは、インテグラルエコロジーに必要なだけでなく、性、出生率、生命の継承、一般的に生命倫理に関連する諸問題、これらについての豊かな示唆も含んでいます。また、これらのことは、科学的・技術的知識（遺伝学、神経科学など）の進歩に、また実験、法改正、倫理問題による帰結に、そして人体を原料の一種として利用することにつながる新たな経済機会や権力構造の創出機会とに、よくも悪くも密接に結びついています。

参考資料

聖ヨハネ・パウロ二世「一般謁見時の連続講話“神の計画における人間の愛について”（1979年9月～1984年11月の全129回）。

教皇庁教理省『生命のはじまりに関する教書——人間の生命のはじまりに対する尊重と生殖過程の尊厳に関する現代のいくつかの疑問に答えて（1987年2月22日）』。

聖ヨハネ・パウロ二世「1990年世界平和の日メッセージ“創造主である神とともに生きる平和、創造されたすべてのものとともに生きる平和”（1990年1月1日）』。

同回勅『いのちの福音（1995年3月25日）』（*Evangelium Vitae*）。

教皇庁教理省『指針 人格の尊厳——生命倫理のいくつかの問題について (2008年9月8日)』。

教皇ベネディクト十六世回勅『真理に根ざした愛 (2009年6月29日)』 48 (*Caritas in Veritate*)。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に (2015年5月24日)』 20-21、50-51、120、139、155 (*Laudato Si'*)。

同「教皇庁保健従事者評議会主催第30回国際会議“人間と地球に役立つ、健康と歓迎の文化”参加者あてあいさつ (2015年11月19日)」。

同「教皇庁総合人間開発省 (2017年より保健従事者評議会から移行) 主催第32回国際会議“世界的健康格差を訴える”参加者あてあいさつ (2017年11月18日)」。

同「教皇庁いのち・信徒・家庭省主催会議“*Yes to Life!* ——いのちという尊い贈り物を大切に”会議参加者あてあいさつ (2019年5月25日)」。

実践例

南米の一部の国では、大規模な石油流出や採掘作業によって引き起こされる汚染について、それらが時に生物多様性と人間の健康に深刻なダメージを与えると、司教たちが繰り返し非難してきました。

教会は伝統的に、とくに貧しい地域に対し、医療施設や専門スタッフを提供することに非常に積極的に取り組んできました。貧しい地域では、不衛生な環境にかかわっていることの多いいくつかの病気や欠損症が、行政側や法律によって認められなかったり過小評価されたりすることが、患者が地域社会から排除されたり見捨てられたりすることにつながっています。

米国では、カトリック医師会は、医師、司祭、倫理神学者による、祈り、学習、実践、個人指導を含む1年間の研修を用意しています。「医学生と研修医の短期研修講座 (*Medical Student and Resident Boot Camp*)」と呼ばれるプログラムは、カトリックの若い医学生が現代医学を学び実践する際に直面する課題、すなわち、世俗化、無神論、相対主義と実証主義的な態度を、インテグラルエコロジーの観点から扱います。

米国司教協議会は、「人間開発のためのカトリックキャンペーン (Catholic Campaign for Human Development)」を通じ、健康問題にとくに焦点を置いた、インテグラルエコロジーを促進する一連のプログラムや活動を推進しています。たとえばルイジアナ州では、「ルイジアナバケツリレー (Louisiana Bucket Brigade)」(訳注：ルイジアナを拠点とした社会問題と環境正義のためのNPO)と協力して、その地域で操業している石油化学工業の有害な影響からもっとも脆弱な人々の健康を守る活動を行っています。同様のプログラムには、アイダホ州での「アイダホ資源団体協議会 (Idaho Organization of Resource Councils)」(訳注：草の根運動支援団体)、テネシー州での「コミュニティエンパワーメント全州協会 (Statewide Organizing for Community Empowerment)」(訳注：露天堀採掘反対運動から生まれた、社会、経済、環境正義にかかわる地域団体)といった事例があります。

エチオピアのカトリック社会開発委員会は、「活性化プログラム (Energizing Programme)」を推進し、人々の健康に多大な影響を及ぼしています。このプログラムは、農村部の家庭にエネルギー効率のよいストーブや太陽光発電所を普及させ、健康問題への取り組み、汚染の削減、低エネルギーコストの提供、女性の負担軽減、天然資源劣化や森林伐採の抑制などによって、彼らの生活条件を大幅に改善することを目的としています。

いくつかの勧め

1. 選別と排除の視点による診断を推進することなく、先天性異常や病気の出生前診断と治療に投資しましょう。
2. 子どもたちの発達と安定のための最適条件を確保しうる政策を推進しましょう。子どもたちが、自分や他者の身体を大切にし、性の相補性、妊娠について、胎児のいのちといった大事なことを学べるように、情動と性についての適正な教育を推進しましょう。
3. 病気の原因の幅広い検査に基づいた病因診断を受ける、という患者の権利を支持しましょう。
4. 医学部や看護師養成課程の段階から、医療従事者が、人間的、道徳的、

司牧的、靈的そして宗教的な養成を受けられるようにして、良心が正しく形成されるよう支援しましょう。

5. もっとも貧しい人々やもっとも傷つきやすい人々に格別の注意を払いつつ、健康を守り、保健医療を受け、医薬品を使用する権利が、すべての人々に拡大されるよう教育機関や福祉団体や保健医療業界の意識を高めましょう。

6. 人間の健康と環境悪化との相互作用をもっと理解し、予防・保護・ケア・教育に積極的に取り組むため、そうした相互作用に関する研究を奨励しましょう。

7. さまざまな形態の公害や生活習慣が健康に及ぼす影響について、さらに意識を高めましょう。さまざまな開発・インフラ・工業化プロジェクトにおいて、健康を保護する体制を確立し、強化しましょう。

8. 栄養不良や薬物使用その他依存症による被害について人々に明白に伝え、自分自身や他者へのリスクをもたらしうる原因行動をやめさせることで、健康的な生き方を推進しましょう。デジタル機器への依存からも生じるリスクについても意識を高め、医療支援や精神的支援のための各種の資源を提供しましょう。

9. 労働条件や、人々の心身の健康・地域経済・安全性に及ぼしうる影響に至るまで、プロジェクトについての事前の環境影響評価を実施しましょう。考えうるあらゆる代替案のリスクと便益を評価し、すべての当事者による、正直で透明性の確保された討議に基づく最終決定を下しましょう。

10. 総合支援システムとしての緩和ケアを推進しましょう。受胎から自然死に至るまでの人命を大切にす、医療的・人間的・靈的な寄り添いに向けて、医療従事者を養成しましょう。

11. 都市開発や人的移動の拡大という世界的な潮流の中で、ウイルス性や細菌性の感染症の急速な蔓延に伴う危険性を詳しく調査しましょう。

12. 生きる権利や人間の尊厳に強く結ばれた、基本的人権であるプライマリヘルスケアが、すべての人に保障されるための取り組みを推し進めましょう。



気候——課題、責任、好機

「気候は共有財の一つであり、すべての人のもの、すべての人のためのものです……気候変動は、環境、社会、経済、政治、そして財の分配に大きく波及する地球規模の問題です。それは、現代の人類の眼前に立ちはだかる重大な課題の一つです」(LS 23、25)。

導 入

「わたしたちは、気候変動には差異ある責任があるということを意識し続けなければなりません。米国の司教団が述べたように、「強力な利害関係に押されがちな議論においては、とくに、貧しい人、弱い人、傷つきやすい人の必要」にもっと関心を払うべきです。……いずれにしても、これらは、諸民族の連帯に根ざす、第一に下すべき倫理的な決定なのです。……気候変動と環境保護に関する政策は政権交代のたびに変更できるものではないのですから、継続性が必要不可欠なのです。成果を出すには時間がかかり、また一政権の任期内では目に見える効果につながらないかもしれない当面の支出が必要とされます。それゆえ、世論や市民団体からの圧力がなければ、対処すべき緊急の必要があるときはなおのこと、政府当局はつねに介入すること及び腰でしょう」(LS 52、172、181)。

気候変動は環境だけでなく、倫理的、経済的、政治的、社会的な問題にも、とくに、もっとも貧しい人々に大きな影響を及ぼします。貧しい人々は地球温暖化の原因からはもっとも懸け離れているにもかかわらず、適応能力の低さ(手立てに乏しい)ゆえに、もっとも大きな打撃を被りやすいのです。その人々はまた、とくにリスクの高い地域(小島嶼国^{しょうとうしょ}など)に住んでいること

もしばしばで、エネルギーの入手がすこぶる困難な状況に直面しています。加えて、貧しい人々は、このような現象の影響をもっとも受けやすい経済部門である農業への依存度が高い人々です。気候変動の影響を考えるとわたしたちは、将来世代の人々のことも考慮しなければなりません。

こうしたことを踏まえ、また、より多くのことを科学の世界から学ぶにつけても、気候変動は現在、国際社会が取り組むべき主要かつ喫緊の課題です。この課題は困難で複雑な仕事です。それゆえ、現在と将来の世代の全人的な発展を促進し、人間の健康と環境を保護し、短期的にも長期的にもエネルギー需要を満たすことができ、緻密な取り組みを土台とする、共通の長期グローバル戦略を考案する必要があります。

この課題に関する学際的な討議の継続は、気候変動との闘いと貧困との闘いととの相乗的なつながりを踏まえた、また、教会の社会教説の諸原理に添った、新しい開発モデルの明確化を目指してもいます。気候変動の現実は、個人や政府に、単独の取り組みでは何も達成できないことをますます思い知らせています。それには、低炭素で持続可能な開発に力を注ぎ、テクノロジーやレジリエンスの強化に投資し、そして、とりわけもっとも脆弱な国々においては、そうしたことを公正な条件のもとで実行することが必要です。わたしたちは、気候変動との闘いと極度の貧困との闘いには密接なつながりがあることを理解してきました。したがって、気候変動への対応は、生活状況、健康、交通事情、エネルギー事情、安全保障のすべてを改善し、新たな雇用機会を創出する好機にもなりえるのです。

参考資料

教皇ベネディクト十六世「2010年世界平和の日メッセージ“平和を築くことを望むなら、被造物を守りなさい”（2010年1月1日）」。

教皇フランシスコ回勅『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に（2015年5月24日）』22、26、164-165、180、201、211（*Laudato Si*）。

同「EU各国環境大臣らとの会合時のあいさつ（2015年9月16日）」。

同「アフリカ司牧訪問時、国連ナイロビ事務局でのあいさつ（ケニア、2015

年11月26日)】。

同「お告げの祈り前の講話(2015年12月13日)」。

同「COP20——第20回気候変動枠組条約締約国会議(ペルー、2014年)に際してのメッセージ」、「COP22(モロッコ、2016年)に際してのメッセージ」、「COP23(ドイツ、2017年)に際してのメッセージ」、「COP24(ポーランド、2018年)に際してのメッセージ」、「COP25(スペイン、2019年)に際してのメッセージ」。

実践例

カトリック教会は、気候変動の問題に適切な対策を取るために、とくに「適応」と「緩和」として、教育、訓練、実践の分野で、多くの活動を行っています。「適応」とは、気候変動の影響を抑制するために社会経済的な構造を強化することをいいます。一方「緩和」とは、地球温暖化のおもな原因の一つである温室効果ガスの排出量削減のための努力を指します。教育の分野では、気候変動という複雑で学際的な現実に対応するための適切な訓練の促進を目的に、初等教育、中等教育、大学で、多数の取り組みが行われています。

気候変動に関する国際的議論におけるカトリック教会の声は、共通善のために気候変動の課題に対処する政策を採用する道徳的義務と緊急性を強調するうえで、これまでも、そしてこれからも重要な意味をもっています。この声は、純粋に個人的利益や国益との闘いにおいても、基本的なものであり続けています。CIDSE (Coopération Internationale pour le Développement et la Solidarité 訳注：ブリュッセルに本部を置く、開発援助と連帯のためのカトリック系 NGO 国際協力連合) は、2017年に、『ラウダート・シ』に照らして気候変動の課題にどのように対応すべきかを政府やその他の利害関係者が考えるのに役に立つ資料として、『共通善のための気候変動対策行動』(Climate Action for the Common Good) を出版しました⁹²。

92 <https://www.cidse.org/2017/11/14/cidse-climate-action-for-the-common-good> 参照。

2016年、バングラデシュ司教協議会の正義と平和委員会は、気候変動や、自然に優しいライフスタイルに関連する問題をより深く研究するため、「気候変動デスク」を設置しました。

カリタスには、もっとも脆弱な地域共同体の「適応」の支援を目的とする、数々のプロジェクトの実施経験があります。そうしたなかでもとくに注目すべきは、カリタスモンゴルが、2010年から極寒の地で、パッシブソーラーや雨水トレンチを設置した栽培ハウス、バイオクライマティック（訳注：当該地の気候に合わせ、その建築物から生じる環境負荷を抑える建築デザイン）の倉といった革新的なモデルを使って、野菜の栽培シーズンを延長する計画を実施し、気候変動へのレジリエンスと適応を目指している例です。このプロジェクトは、年間500トンのCO₂を削減するだけでなく、包括的で自給自足型の地域経済を促進することを何よりの目的としています。また、野菜の生産量を増やすことで食料安全保障を確保し、余剰農産物を販売して家庭の収入を増やし、脆弱な家庭の栄養状態を改善することも期待されています。

ハンドブックに関しては、アイルランド司教協議会が2014年に出版したものを挙げることができます。『大地の叫び——気候変動の司牧的考察』（*The Cry of the Earth. A Pastoral Reflection on Climate Change*）⁹³と、カリタスアイルランド（Trócaire）によって準備されたハンドブック『GLAS “大地の叫び” についての司牧の補助資料』⁹⁴（*A Pastoral Resource to Supplement The Cry of the Earth*）です。

GCCM（現ラウダート・シムーブメント）は、オンラインのトレーニングコースから、気候関連問題についてのカトリックの信徒の関与と行動に至るまで、気候変動との闘いに関連したアドボカシー活動を企画し、その他の気候関連の取り組みをコーディネートしています。

2014年5月、聖十字架修道女会は、カーボンフットプリント（訳注：活動の中で排出された温室効果ガスをCO₂相当量で表現したもの）削減基金を設立して、会全体で輸送から生じる年間総排出量を監視し、会員修道女の居住地や奉仕する地域において、再生可能エネルギー、森林再生、エネルギー効率化といったプロジェクトを推進することで、その排出量を相殺する試みを行って

93 https://www.trocaire.org/sites/default/files/pdfs/parishes/cry_of_the_earth_2014.pdf 参照。

94 <https://www.trocaire.org/wp-content/uploads/2020/09/glas-resource.pdf> 参照。

ます。2015年以降、CO2排出量削減のためのこの内部助成金プログラムは、961トン以上の排出量を削減し、6か国で40のプロジェクトに資金を提供しています⁹⁵。

いくつかの勧め

1. 保育園や幼稚園で、現在と将来の世代のために子どもたち自身が被造物保護に貢献できる具体例をしっかりと教えることで、ともに暮らす家とその気候を大切にするための意識を高めましょう。

2. 学校における、インテグラルエコロジーに基づいた、また、ライフスタイルの転換や革新的な技術の活用による、気候変動や持続可能性という問題の解決法についての、学際的な教育指導を奨励しましょう。

3. 自然科学と社会科学の学位課程で習得する知識を組み入れた、気候変動と環境悪化の問題およびその解決策を取り扱う、大学の教育課程を計画しましょう。

4. 大気汚染や気候変動と闘う政策やテクノロジーは、人々の健康にもよい影響を与え、健全な経済をも促し、インクルーシブな職場（訳注：属性にかかわらず、それぞれが能力を生かせる職場）を、とくに困窮者のための雇用を、創出するものでもあるという自覚を促しましょう。

5. 再生可能エネルギーの使用と森林再生——とくに、アマゾン地域のよ
うな、地球の「肺」において——を土台とした「持続可能な開発」諸活動によって、気候変動と闘いましょう。

6. 気候変動の緩和を助けるさまざまな解決策案の影響評価は、予防原則を用い、^{テクノロジー}技術主義的アプローチは避けて、慎重に行いましょう。気候変動の「緩和」と「適応」による措置やプロジェクトの、潜在的な副次的便益と、随伴するリスクとの評価を行い、またそれらが、貧困の削減活動、食料と水の入手可能性、農業、農村の底上げ、衰弱した生態系の回復といったものを与える影響も見極めましょう。

95 <http://www.holycrossjustice.org> 参照。

7. 農業や気候変動レジリエンス促進のための種々のプロジェクトと防災プロジェクトとを、うまく結びつけましょう。

8. 再生可能エネルギーや気候変動レジリエンスの視点がある開発を推進する活動、エネルギー効率の改善や廃棄物削減のための活動、シェアリングと再生利用と再使用の文化を維持する活動などを支持しましょう。こうした支持によって、民間部門やその他の非国家主体が、持続可能な経済へのよりエコロジカルな移行を奨励しましょう。

9. 気候変動の問題に対処する、国際的な協力プロセスを支援し、関連する既存の国際法の効果的な実施のために働きましょう。

10. 「気候難民」というカテゴリーを定義し、該当事例には必要な法的・人道的保護を提供できるようにする適正な措置の実施を目的とした、国際的なプロセスを支援しましょう。

バチカン市国の取り組み



バチカン市国では、『ラウダート・シ』での提案を実施するために、エコロジカルなメンテナンスプロジェクトの数々が、各省庁の事務所や事業所によって丁寧に計画され、実行されています。

環境保護に関しては、いくつかのプロジェクトがすでに実施されています。バチカン市国内のごみ収集制度の見直しと改善は、ごみは何かを生み出すもの、大切にすべきものとして利用すれば経済資源であるという考え方に示唆を受けています。この考え方に基づいて、それぞれの事務所や事業所では、ごみの分別収集と、一般ごみ（有機物、ビニール、紙、金属）と、一般ごみ以外や有害ごみ（廃油、タイヤ、有害金属、プラスチック、電池、医療廃棄物）との分別処理が行われています。

水資源の保護に関しては、噴水（訳注：バチカン市国には100以上の噴水がある）の水を再利用させる閉鎖式水循環システムの設置により、無駄の削減と機能的な水利用を実現することで行われています。また、2016年以来、バチカンの従業員食堂では、カフェテリア方式を導入し、飲み物にはマイカップを使用することで、水の浪費やごみの発生を大幅に削減しています。さらに、新たな灌漑・散水システムも設計され、新しいメンテナンス技術を導入して配水管を近代化し、植え込みの種類に合わせた散水で水を節約しています。

緑地のケアとその関連諸活動としては、バチカン市国では、既存の生態系の保全を助ける統合管理システムの開発に与しつつ、天敵昆虫、毒性のない成分を配合した植物保護製品（訳注：いわゆる農薬）、輪作、耐病性品種の導入を通じて、有害な農薬の段階的削減に注力しています。

エネルギー資源の消費削減の取り組みとしては、エネルギー制御の改善と二酸化炭素排出量の削減を確実にするための介入が行われています。具体的には、ソーラーパネル、LED機器による照明設備、室内の自然光に応じて光度調整する最新の、光と動きを感知するセンサー（これは労働者の安全と健康の確保に関する、法律に照らした基準を満たすようになっている）の

設置です。古いシステムはもはや使用されておらず、新世代のオペレーティング・システムやアプリケーションで環境負荷を低減する技術改善がなされてきました。スタッフ不在時には自動で消灯し、営業終了時には電力供給を停止する新システムが導入されています。エネルギー消費量削減のために、照明設備にはさらに各種のアップグレードがなされました。たとえば、2018年には、システイーナ礼拝堂の天井の新しい照明設備によって、エネルギーコストと温室効果ガス排出量の約60%が削減され、フレスコ画の劣化速度をかなり落とすことが可能となりました。サンピエトロ広場やベルニーニの柱廊や、サンピエトロ大聖堂の新しい照明設備は70~80%の省エネを実現し、丸天井に施された装飾芸術も格段に見やすくなりました。すでに触れたとおり、バチカン市国はソーラーパネルを設置して電力を生産し、それを供給網へと送っています。

結 論

新型コロナウイルス COVID-19 のパンデミックが突きつける挑戦を背負いつつ暮らす日々であって、「わたしたちは恐れおののき、途方に暮れています。福音の中の弟子たちのように、思いもよらない激しい突風に不意を突かれたのです。……嵐はわたしたちの弱さを露わにし、偽りの薄っぺらな信頼を暴きます。そうした信頼のもとに、わたしたちは日常の予定、計画、習慣、優先事項を決めているのです。眠り込んでしまったこと、自分のいのちと共同体をはぐくみ、支え、強めてくれるものを忘れてしまっていたこと、嵐はそれを見せつけます。嵐は、あらかじめ「仕立てられた」考え、それによって己の民の魂を豊かにしてきたものを忘れさせてしまう考えを、ことごとく露わにします。一見すると「身を守る」ように思えるものの、自らのルーツに頼ることも、年配者の記憶をたどることもできなくする考えや行動によって、わたしたちを麻痺させる企てです。それは、逆境に立ち向かうために必要な免疫を奪ってしまうのです。自分のイメージのことばかり考えて、己の「エゴ」をごまかすための常套である化粧は、嵐によって剥がれ落ちます。そして、決して逃れることのできない、あの（恵みの）共通の属性が再び明らかになります。兄弟姉妹だという属性です」⁹⁶。

このことばは、本文書に光を当ててくれます。本書の目的は、何度も指摘されてきたように、わたしたち一人ひとりが生活の中でインテグラルエコロジーを中心に据えることを再確認し、それを実践に移す具体的な方法を見つける手助けをすることです。まずはわたしたち自身から、そして何よりも、わたしたちの共通の家と、そこに暮らす人々、とりわけ、もっとも不利な立場であって脆弱な人々を大切にすべきだということから始めるのです。

これまで見てきたように、インテグラルエコロジーに向けたこのような呼

96 教皇フランシスコ「パンデミック下の特別な祈りの式でのことば（2020年3月27日）」（『パンデミック後の選択』24-27頁所収）。

びかけへの応答となる多くの取り組みが、カトリック共同体のメンバーによって、また、まさに善意あるすべての人々によってなされるのです。

そこで、教皇フランシスコの魅力的であって、要求の高いこの提案を実行に移す最善の方法について、考察するのはふさわしいことです。とりわけ教会は、『ラウダート・シ』の示唆に従ってよい手本となるよう求められています。インテグラルエコロジーの教育や養成への取り組み、ごみの分別収集と分別処理、低公害の輸送・交通手段の利用、鑑識眼のある循環型の消費行動、より断熱効果の高い建造物設備、省エネ、倫理的投資、^{エシカル}使い捨てプラスチックの撤廃、緑地の整備、これらはすべて、カトリック教会がそのさまざまな施設、小教区、学校、大学、病院を通して、大きな貢献をなしうる分野です。

聖座がかかわる事業には、エキュメニカルな取り組みである「被造物の季節」（訳注：日本のカトリック教会では「すべてのいのちを守るための月間」に重なる）への参加と、毎年9月1日に祝われる「被造物を大切にす世界祈願日」が含まれており、たいいてい、年ごとにテーマが選ばれ、それについて論じられ、背景が説明されます。教皇フランシスコが、2016年の「被造物を大切にす世界祈願日」のメッセージの中で、7つの慈善のわざの伝統的な2種類（訳注：精神的なもの、身体的なもの）に「わたしたちの共通の家を大切にすること」を加えるよう提案したことには、触れておく必要があります。「精神的な慈善のわざとしての『わたしたちの共通の家を大切にすること』は、『神の世界を感謝のうちに観想すること』（LS 214）を必要とします。その観想は、『神がわたしたちに届けようとお望みになる教えを、一つ一つのものの中に発見させてくれます』（LS 85）。身体的な慈善のわざとしての『わたしたちの共通の家を大切にすること』は、『暴力や搾取や利己主義の論理と決別する、日常の飾らない言動』（LS 230）を必要とします。このわざは、『よりよい世界を造ろうとする一つ一つの行為において感じられます』（同 231）」⁹⁷。

教会の社会教説は、被造界と、現在および将来のあらゆる民族のインテグ

97 同「被造物を大切にす世界祈願日メッセージ（2016年9月1日）」。

ラルな人間的発展とをより重んじるものへと、「グローバルな開発モデルの転換」⁹⁸する急務を明白に示しています。これには、開発の新たなパラダイムへの移行が含まれており、それが基盤とするのは慎重さと警戒心、貧しい人々と将来世代への配慮、ライフスタイルの転換、経済的・社会的・環境的観点からはほとんど「持続不可能」な消費と生産の転換です。そしてこの新たなパラダイムはまた、人間と環境との間の契約を確かなものとします。この契約のきずなは、「創造主である神の愛の鏡とならなければなりません。わたしたちは神から生まれ、神に向かって歩むからです」⁹⁹。

途方もない技術の進歩をもたらした、その才能と創造力をもってしても、わたしたちの世界の深刻な環境的・社会的諸問題の解決に資する効果的な国際協力の形態を見いだすのに今これほどまでに悪戦苦闘しているのですから、「一つの世界」や「一つの計画を共有する」という観点で考えることは、複雑な課題を意味します。にもかかわらず、共通善に関する明確で一貫性のある対話、すなわち、多国間主義や国家間協力の強化と、政治的・経済的搾取のリスクの回避に資する対話が、ますます求められる状況にあります。依然として、多国間主義の協力体制は、必要とされているにもかかわらず、この時代が直面している、大きくて、奮起すべき挑戦へのふさわしい応答としては十分ではありません。

「このわたしたちはどうすればよいのですか」(ルカ3・14)。この質問への答えは、一つではありません。洗礼者ヨハネが、この質問をした群衆に答えたように、年齢や境遇、教会や社会での役割によって、わたしたち各人の課題は異なります。ですが、わたしたちすべてに当てはまる、一つの答えがあります。わたしたち一人ひとりには、ともに暮らす家を守る責務と、わたしたちの隣人——地理的・時代的な隔たりにかかわらず——に関心を示す責務があるからです。あらゆる回心への呼びかけと同様、このエコロジカルな回心への呼びかけも、わたしたち一人ひとりに個人的に向けられており、自分の生き方について、識別と転換とを求めています。

「もはや、世代間の連帯から離れて持続可能な発展を語ることはできませ

98 教皇ベネディクト十六世「お告げの祈り前の講話(2006年11月12日)」。

99 同「お告げの祈り後のあいさつ——神のあわれみについて(2007年9月16日)」。

ん。将来世代に残しつつある世界がどのようなものをひとたび考え始めれば、わたしたちは物事を違ったふうに眺め、この世界が無償で与えられ、他者と分かち合うべき贈り物であることに気づきます。……世代間の連帯は、任意の選択ではなく、むしろ正義の根本問題なのです。ポルトガルの司教団は、こうした正義の義務を認めるよう訴えました。『環境は、授かりものの論理に属しているのです。環境は、あらゆる世代に貸しつけられているのであって、いずれ次世代へと手渡さねばなりません』。総合的な^{インテグラル}エコロジーは、こうしたより広範な展望を特徴としています」(LS 159)。

収録写真

- 表紙： [コラージュ] Charina Santos
[写真] Jeremy Bishop - Unsplash; Paul Haring - CNS; Pixabay
- 20 頁： ヨハン・ヴェンツェル・ペーター 『楽園のアダムとエバ』
© Vatican City State Governorate – Vatican Museums
- 26 頁： 教皇フランシスコ、病院にて、ある家族と（パラグアイ司牧訪問時、2015年7月11日） © Vatican Media
- 36 頁： アフリカの子どもたち © Association S.F.E.R.A. Onlus
<https://www.associazionesfera.org/>
- 42 頁： 若者たち © FIDAE (Federazione Istituti di Attività Educative)
<https://www.fidae.it>
- 52 頁： 教皇フランシスコ、ローマ、ボルゲーゼでのイベント「地球村」訪問
(2016年4月24日) © Vatican Media
- 60 頁： 教皇一般謁見（パウロ六世ホール、2019年10月12日） © Vatican Media
- 72 頁： 教皇フランシスコ、イスタンブールでのヴァルソロメオス全地総主教との会談（トルコ司牧訪問時、2014年11月30日） © Vatican Media
- 88 頁： © Luca Marabese
- 100 頁： © Giuseppe Quattrociocchi
- 112 頁： <https://sozai-free.com/>
- 118 頁： © Luciana Nardone
- 124 頁： <https://www.photo-ac.com/>
- 146 頁： 教皇フランシスコ、バンビーノ・ジェズ小児病院訪問（2018年1月5日） © Vatican Media
- 152 頁： © Gabriele Verga
- 160 頁： アースデイ 50周年バチカン記念切手（2020年）
© Vatican City State Governorate – Philatelic and Numismatic Office

ともに暮らす家を大切にする旅
『ラウダート・シ』公布から5年

2023年1月11日

日本カトリック司教協議会認可

著者

インテグラルエコロジー教皇庁部局間協働作業グループ

訳者

瀬本正之、吉川まみ

監修者

日本カトリック司教協議会 社会司教委員会

カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館内

☎03-5632-4411(代表)

<https://www.cbj.catholic.jp/>

© 2023 Catholic Bishops' Conference of Japan

事前の許可なく、複製、転載、改変、送信等を行うことを禁じます。